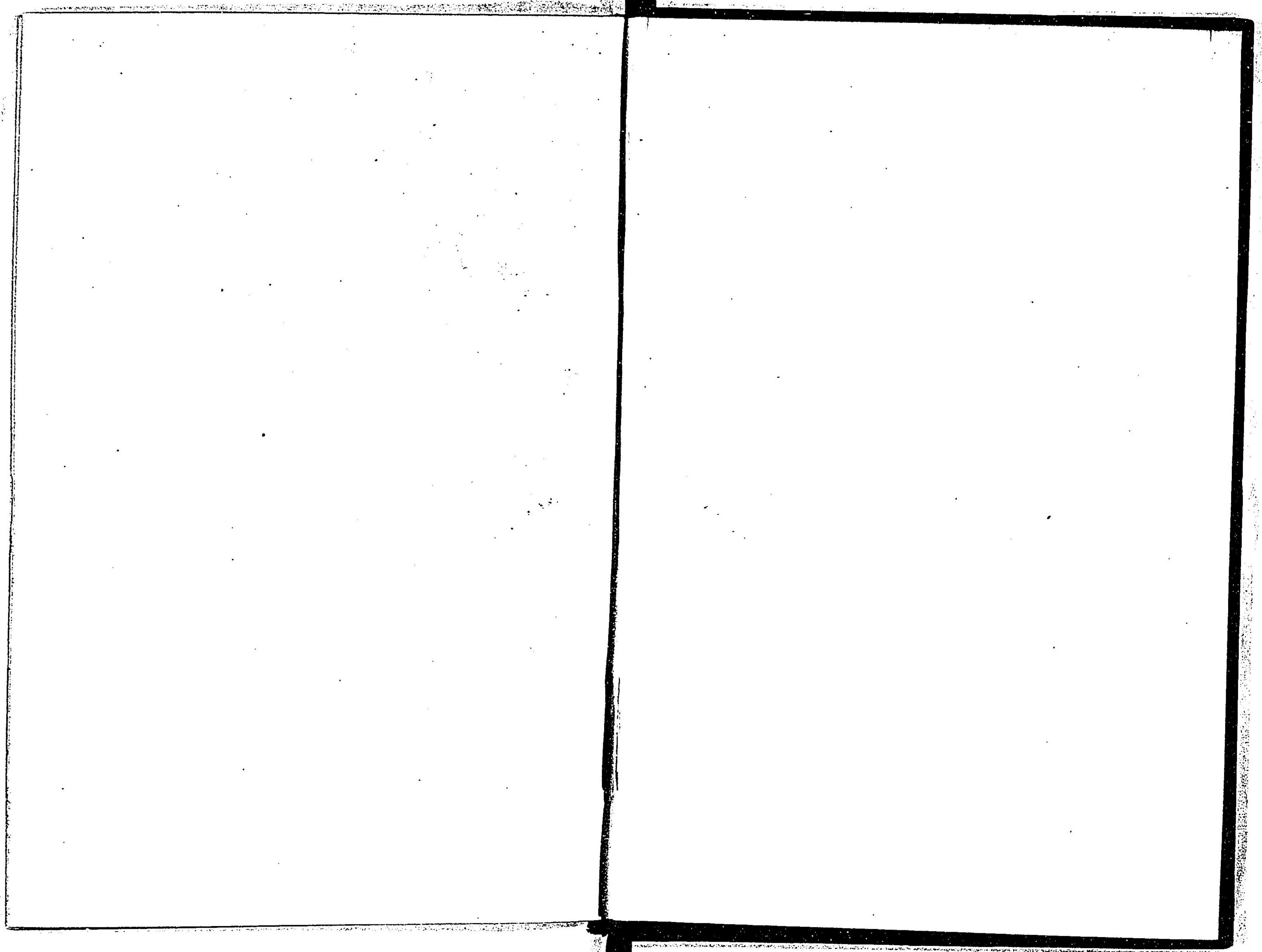


人文地理學

講義

橫山又次郎著

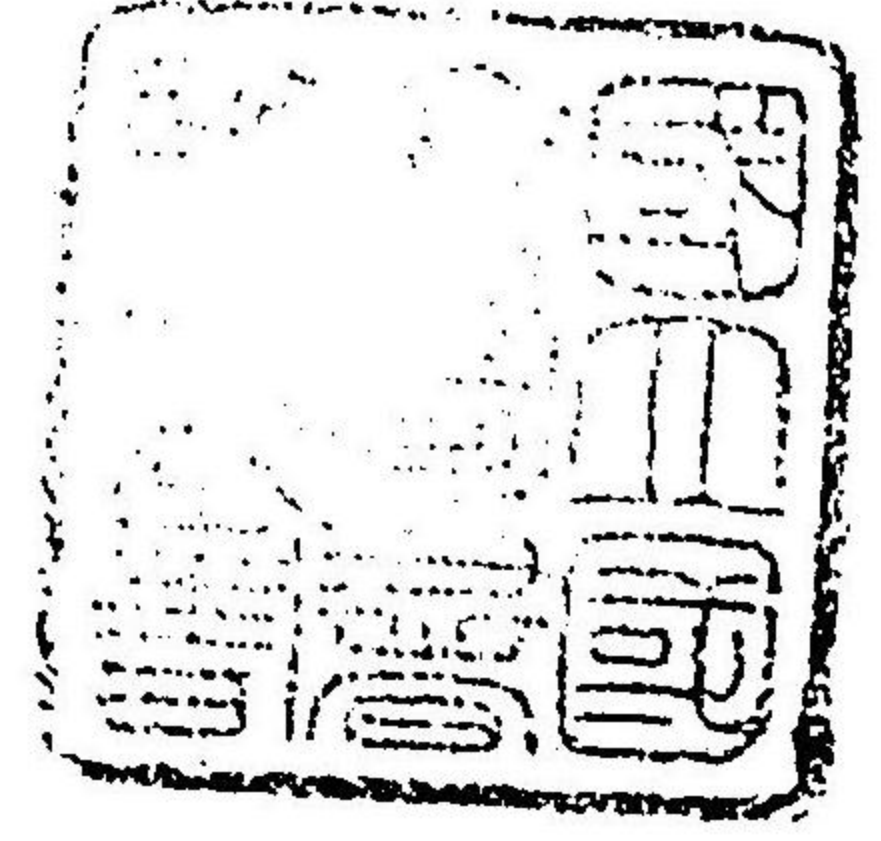


理學博士橫山又次郎著

人文地學講話

早稻田大學出版部藏版

290.1
Y19353



219355

人文地學講話目次

緒言

| | | |
|-----|---------|----|
| 第一章 | 人類屬 | 一 |
| 第一節 | 人類屬の起源 | 三 |
| 第二節 | 世界島 | 三 |
| 第三節 | 世界の人口 | 三 |
| 第二章 | 人類屬の分類 | 一六 |
| 第一節 | 人類一源説 | 二一 |
| 第二節 | 人類の結族 | 二二 |
| 第三節 | 人類の種類別 | 二四 |
| 第四節 | 人類の分類 | 二七 |
| 第五節 | 言語の差異 | 二九 |
| 第六節 | 人類の分布區域 | 三三 |
| 目次 | | 三六 |

第七節 人類の八分……………三七

第八節 人類の三分……………五一

第九節 人類と風土との關係……………五二

第三章 文明に因る人類の分類……………五六

第一節 文明の高低……………五六

第二節 生業の種類……………六一

第三節 天然民族と其の分布……………六四

第四節 天然民族の滅亡……………七一

第五節 文明の財産の分布……………七三

第六節 文明の巢窟と其の範圍……………七五

第七節 半開の文明と全開の文明……………七八

第八節 遊牧民とその分布……………七九

第九節 文明民族の經濟の階級……………八二

第四章 國家……………八五

第一節 地球面の占領……………八五

第二節 政體の種類……………八八

第三節 國家の大小……………九二

第四節 世界一統帝國と殖民地帝國……………九三

第五節 一等國……………九九

第六節 二等國……………一〇三

第七節 三等國……………一〇七

第八節 政治區域……………一〇九

第九節 地學上の位置と政治上の位置……………一一〇

第十節 國土の生長と國境の形……………一一四

第十一節 國の重力の中心……………一一六

第十二節 海國……………一一八

第十三節 政治區域の界……………一二一

第十四節 境界線の發育……………一二五

| | | |
|------------------------|------------|-----|
| 第十五節 | 一國內の行區域 | 一六六 |
| 第十六節 | 領地 | 一三一 |
| 第十七節 | 領地の界と利益圈 | 一三三 |
| 第十八節 | 所領殖民地の種類別 | 一三五 |
| 第十九節 | 海外領地の發育の四期 | 一四三 |
| 第二十節 | 政治區域の現状 | 一四七 |
| 第五章 宗教的團體とその分布 | | |
| 第一節 | 宗區 | 一五〇 |
| 第二節 | 異教 | 一五一 |
| 第三節 | 印度東亞的宗教 | 一五三 |
| 第四節 | 泰西教 | 一五五 |
| 第六章 人類の土着と人口の疎密 | | |
| 第一節 | 人類の住地 | 一六〇 |
| 第二節 | 不常住地 | 一六一 |

| | | |
|------|--------------|-----|
| 第三節 | 散住地の種類 | 一六四 |
| 第四節 | 村落 | 一六五 |
| 第五節 | 住地の位置 | 一六六 |
| 第六節 | 市街 | 一六七 |
| 第七節 | 地面的職業と地位的職業 | 一六九 |
| 第八節 | 國民の重なる職業 | 一七一 |
| 第九節 | 市街と地方との職業の區別 | 一七五 |
| 第十節 | 住地の大小 | 一七七 |
| 第十一節 | 市街の生長 | 一七八 |
| 第十二節 | 市相と市區 | 一八二 |
| 第十三節 | 人口稠密の度 | 一八四 |
| 第十四節 | 全地球面の人類の分布 | 一八九 |
| 第十五節 | 人口の上下の分布 | 一九六 |
| 第十六節 | 大市街 | 一九八 |

第七章 交通

第一節 交通と其の用……………二〇二

第二節 交通の類別……………二〇二

第三節 河上交通……………二〇七

第四節 運河……………二〇八

第五節 運輸機關と其の通路……………二一〇

第六節 道路の種類と運輸機關との分布……………二一三

第七節 歩徑と荷持交通……………二一七

第八節 駄道と駄獸交通……………二一九

第九節 橋と車との交通并道路工事……………二二二

第十節 鐵道……………二二六

第十一節 鐵道網……………二三一

第十二節 鐵道線の密度……………二三三

第十三節 海路……………二三六

第十四節 帆船航海とその線路……………二三九

第十五節 汽船航海……………二四三

第十六節 連海運河……………二四六

第十七節 迅速交通に伴ふ距離の短縮……………二五〇

第八章 萬國交通と萬國貿易

第一節 萬國交通の發育……………二五三

第二節 太古と中古との萬國貿易……………二五七

第三節 近世の萬國貿易……………二五九

第四節 今日の萬國貿易……………二六一

第五節 萬國貿易品……………二六三

第六節 世界に於ける穀類の大産地……………二六五

第七節 鐵と石炭……………二六八

第八節 貴金屬……………二七四

第九節 萬國郵便と電信線網……………二七九

目次終

人文地理學講話

理學博士 横山又次郎著

緒言

地學とは英語でいふジオグラフィで、從來吾が國では、之を地誌の如くに解釋して居たが、近來泰西では、之を吾が國でいふ地文學と地誌とを合併したものの名稱として居て、更に之を總論と特論とに區別して居る。即ち地學總論とは大體吾が地文學に相當するもので、地學特論とは大體吾が地誌に相當するものである。是に因て觀るときは、地文學と地誌とは、從來世人が考へて居たやうに、違つて居るものでないことになる。

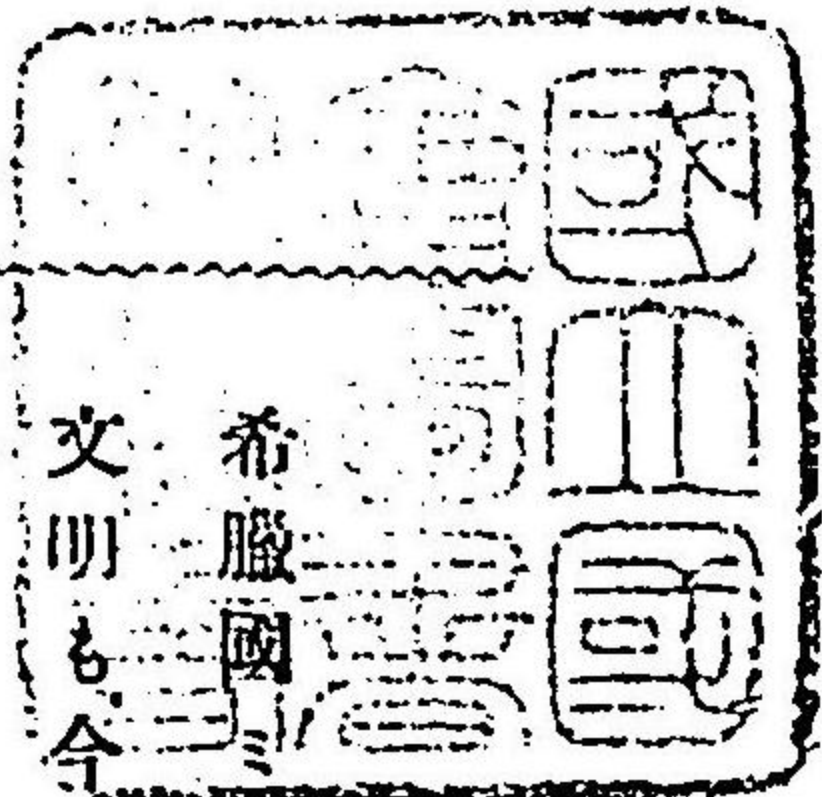
地學總論は天文、天然、生物、人文の四地學に別れて、本講話はその最後の人文に關する部分である。

人文地學は、別名を人類地學、文明地學、歴史地學等と稱して、その目的とする所は、人

二
類と、其の活動の結果として現れた文明的産物の、地球面に於ける分布とである。
随つて、其の人類學、人種學、社會學、史學、經濟學等に關係することも亦少からぬので
あるが、しかし、眼中常に地球面との關係といふことを措いて説くのであるから、自
然此等の學問とは又違つて來るのである。

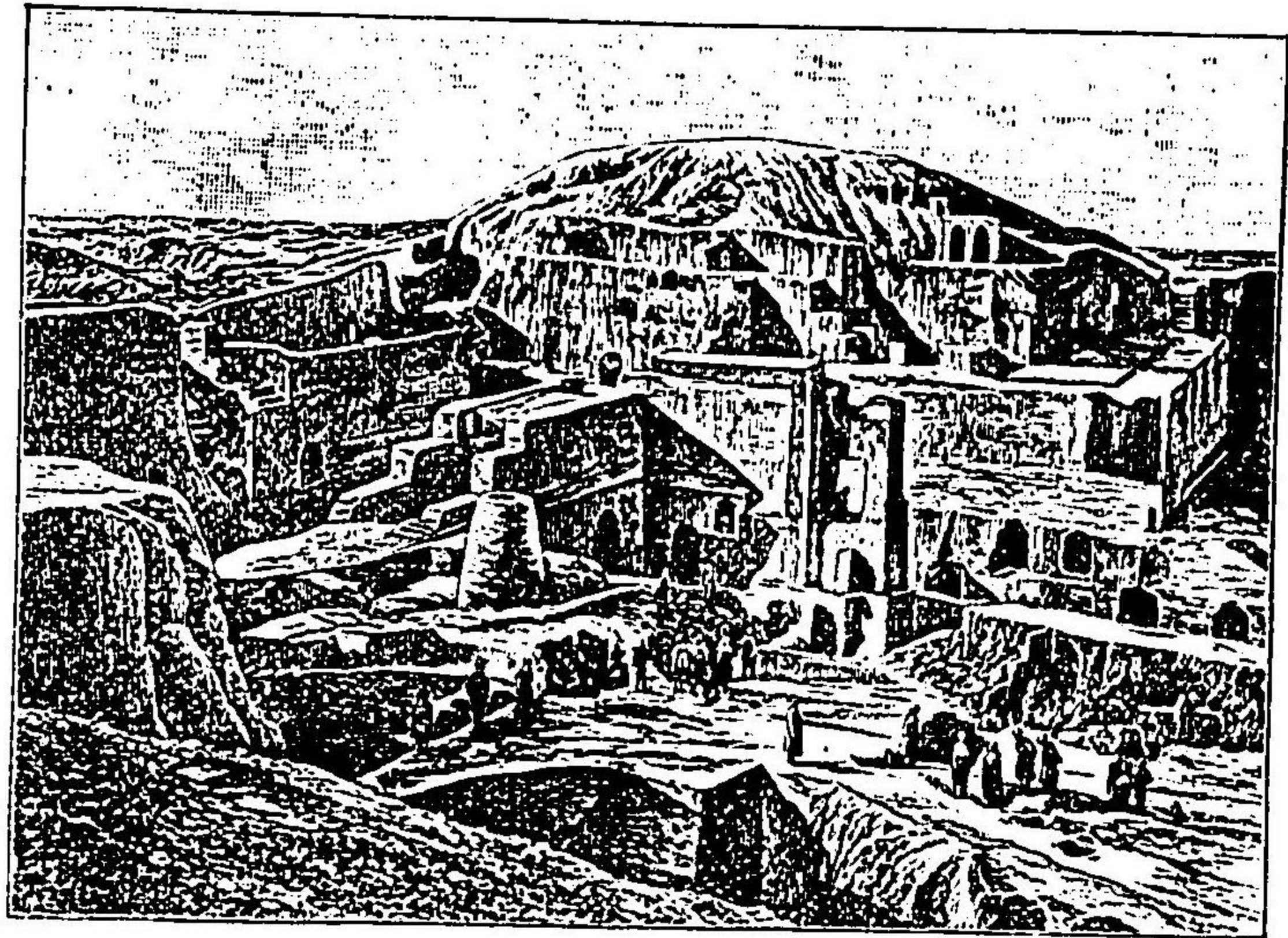
第一章 人類屬

第一節 人類屬の起源



希臘國、セニイの文明は、今から三千五百年の昔に遡るとのことであるが、支那の
文明も、今から少なくとも四千年の昔に遡るであらう。又埃及の文明は、同國アビド
ス産の象牙細工の人形に據ると、今から六千二百年の昔に遡ることは確である。
然るに、最近に於けるメンボタミヤ國ニツブールでの發掘に據ると、此の國では、文
明が餘程早く開けた證據がある、即ち掘り當てたものは、今から五千六百五十年の
昔、王位にあつたナラム・シンといふ、サルゴン王の子の宮殿で、此の宮殿が又其のす
つと以前に此の地に時めいたスメリヤ王城の墟址の上に、地均らをして建てられ
たものであるといふことが分つたので、此の地の文明は實に今から一萬年の昔に
遡るものであることも、亦略見當が附いたのである。乃ち、スメリヤ時代の遺跡と
して、發見された重なるものは、城壁、水溜め、土管、銅製の山羊の頭、大理石の像の破片
等で、城壁は焼かない瓦を土漚青で固めて造つてあり、水溜めは焼いた瓦で造つて

第一圖



ニツブのラナムシンの宮殿の址

あり、それから土管も焼いたもので、水道や下水に使用したものらしく、山羊の頭には、瑪瑙で拵へた眼球が入れてあり、又像の眼球は種々の色の石を以て拵へてあり、頭髮は銀の細線で作つてあるといふ次第。此等を見ては、當時の文明は可なり高等の度に達して居たことを推測しなければならぬ。

蓋し、文明といふものは一朝一夕に開けるものではない。それで、上述の如き程度の文明に達するには、餘程長い年月を閲みしなければならぬ。その長い年月のことは最早史

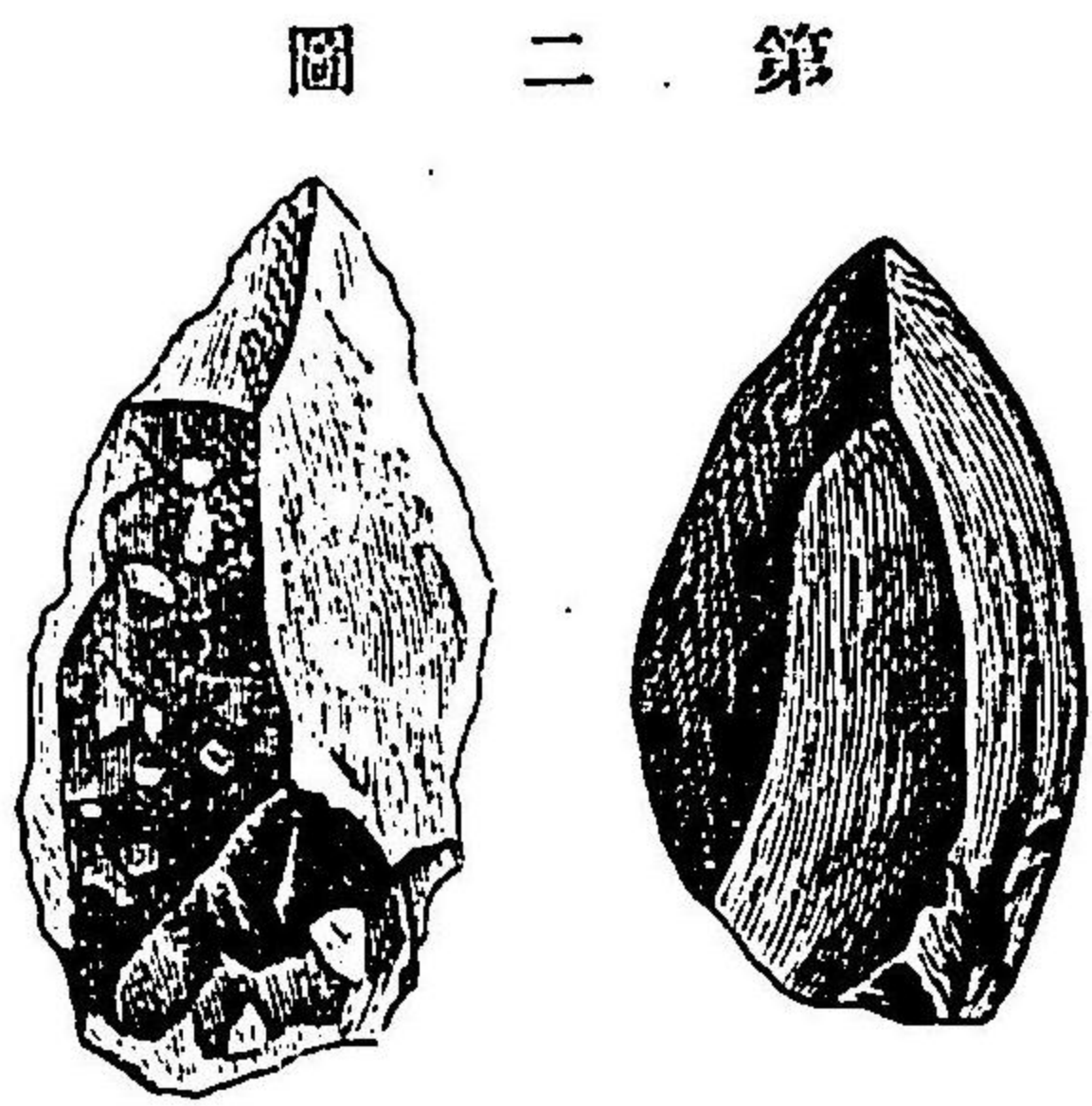
學の研究範圍外となつて、人類學の研究する所となつて居る。然らば、此の人類學の研究する區域は、年數にすると、何程ぐらいなものであるかと云ふに、此の時代は所謂無記錄時代であるから、年數の正確な計算をすることは全く不可能である、しかし、其の年數が随分長いものであることだけは左の一例で解る。

埃及ナイル河の三稜洲地に、ベッスーセといふ所がある。此處で、深さ四十尺の井戸の底から、粘土製の焼いた鉢が揚つて來て、又同國マームデー運河では、今の水平から九十尺の下に、同じ類の土器が掘り出された。さて、此等の土器が一通り智力の發育した者の拵へた物に違ひないことは明であるが、其の者の住んで居た時代は全く不明である。強いて之を知らうとするには、ナイル河の土砂の沈澱力を以て推測するの外ない。若し此の法を用ゆるとすれば、土器の年齢は三萬乃至四萬五千年になる。然し、これは土砂の沈澱速力を、今も昔も同一であると見ての計算である。然るに、此の土砂の沈澱の遅速は河が土砂を流し出す多少に由るもので、土砂の多少は又上流地の雨量の多少に因るものであるから、雨量が今も昔も同じであれば兎も角、それが不明である以上は、前の計算は不確であると見なければなら

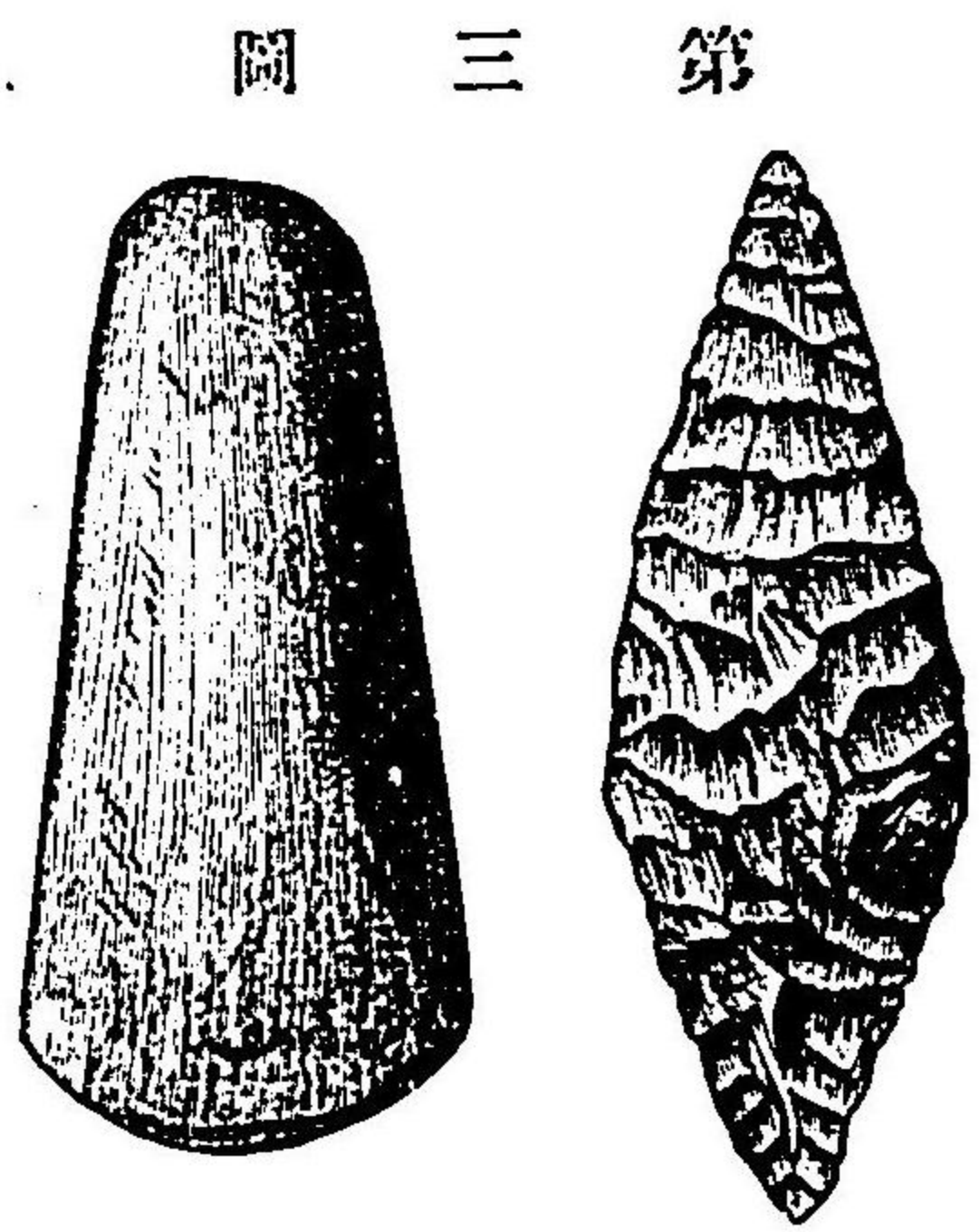
ぬ。去りながら彼の土鉢は随分古い物には違ひなく、既に知れて居る埃及の文明時代前のものであることは言ふまでもないことである。

人類學者は有史以前の時代を金屬時代と、石器時代とに別つて、石器時代に次いで、金屬時代があつたとして居るが、此等の時代の古さは、國々によつて、違ふもので、國によつては、今尙石器時代の状態に在る所もある、此時代の研究の最も進んで居るのは、歐羅巴で、今の獨逸、瑞士、丁抹等の石器時代は、今から四千四五百年以前のことであるといふのであるから、其末期は大して舊いものとは云へないのである。然し、此の石器時代にも、新舊があつて、新石器時代といふのは地質學上から見れば、まだ現世界に屬して居る、此の時代は諸大陸の地形も、氣候も、亦動植物も、現在と同一であつた時代で、獨り違つて居たものは當時の人類の文明の度ぐらいである、即ち彼等は器具を作るに、角、骨、石等の類を用ゐて、金屬を用ゆることは全く之を知らなかつたのである。然し、此時代の石器も、更に之を此の前にあつた舊石器時代のものに比べて見ると、尙其の細工に巧妙な所がある、即ち舊石器時代のものは、石を打ち磨いで拵へてあるに反して、此の時代のものは一定の模型に據つて拵へて且

之に研きまで掛けてある。



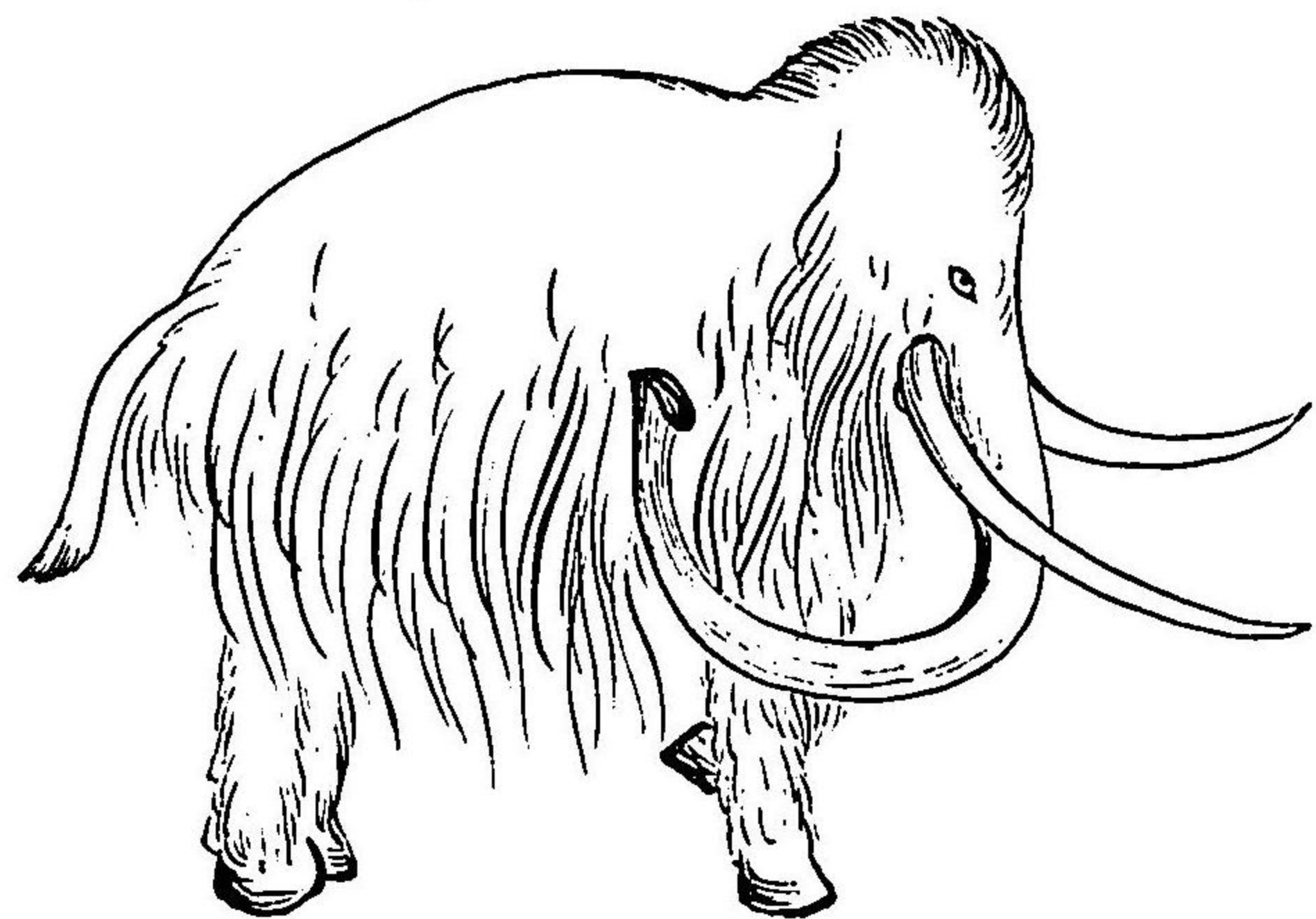
器石の代時器石舊



器石の代時器石新

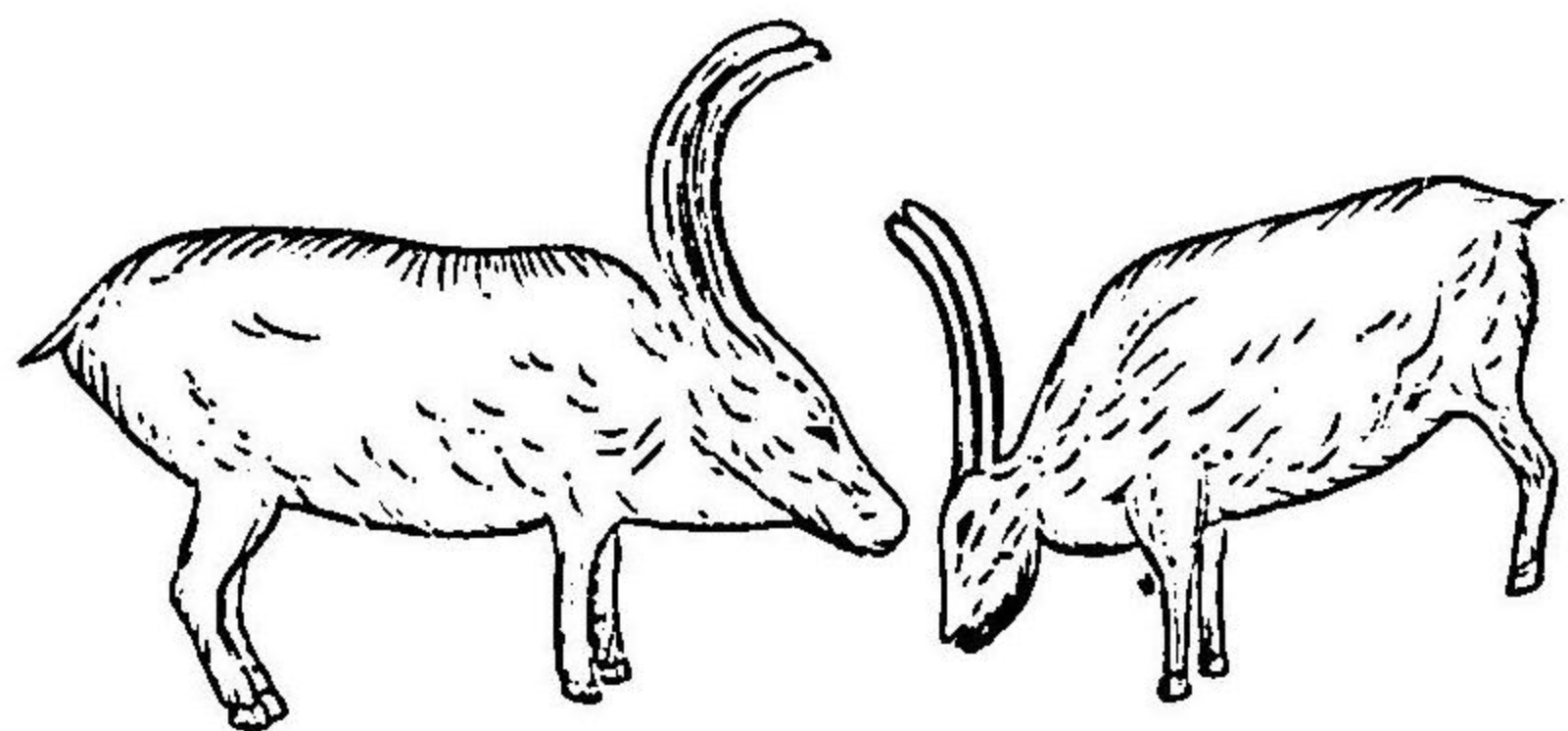
舊石器時代は地質學上から謂へば、既に前世界の洪積世に入るべき時代で、當時諸大陸の地形が今と違つて居たのみならず、氣候や動植物に至るまで、今と多少違つて居たのである。其の證據には、石器と共に現今其の地方には全く絶えて居る動物の骨が産して、又之と共に當時の動物の形を彫み込んだ、骨片や象牙があり、又當時の人類の穴居の跡に、滅亡動物の壁畫がある、即ち第四圖は佛國コンパレルの洞

第 四 圖



佛國バパン洞の壁に彫るめらマモン

第 五 圖



佛國チフドンムイの鹿の壁畫

八

壁に彫んであるマンモス象の形で、第五圖は同フランドロームの穴の壁に書いてある馴鹿である。マンモスは今は全く其跡を絶ち、馴鹿は現時歐羅巴の最北部に

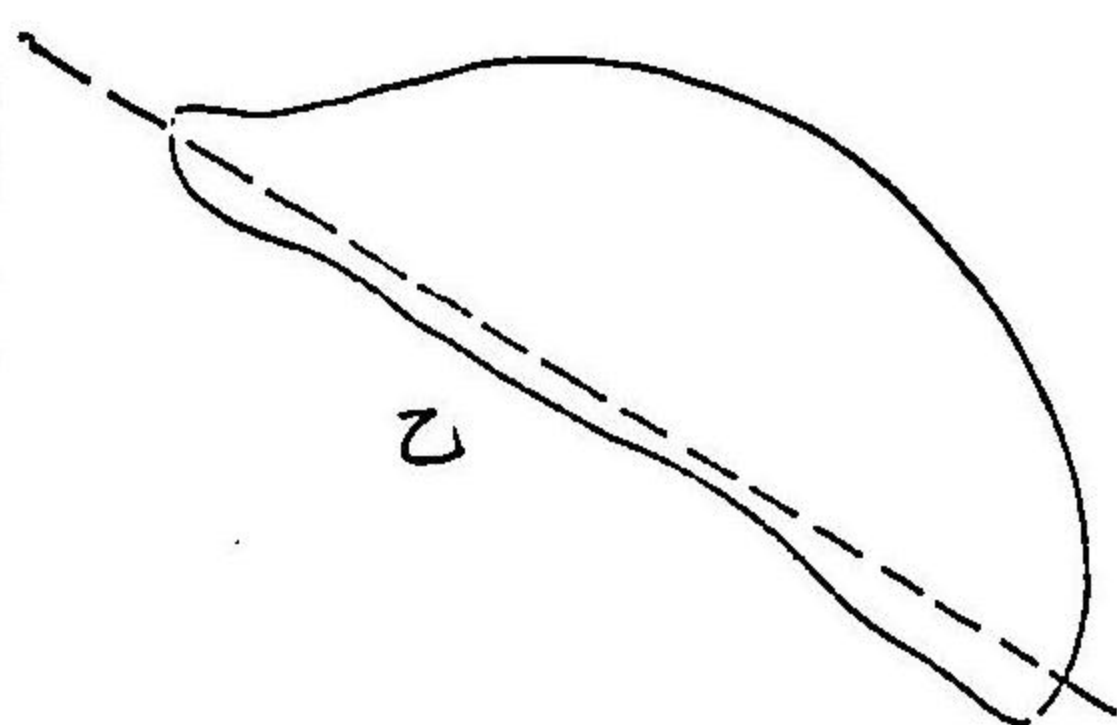
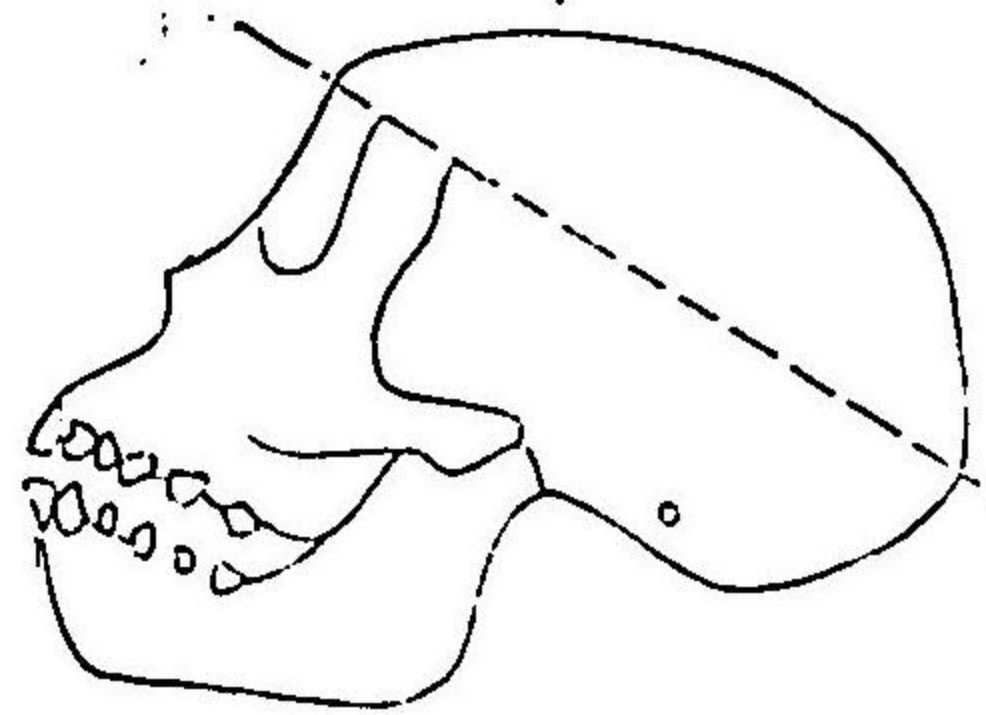
退いて居る動物である。

是に因て観るときは、人類の、前世界の洪積世中、歐羅巴に現れて居たことは確實である。然るに、近來に至ては、北部亞弗利加、印度、北米、南米等にも、洪積世の人類の遺跡が発見せられたのであるから、人類は既に洪積世中殆ど全世界に蔓延して居たものと見て差支ないのである。

次に、此の洪積世の人類と、現在の人類との間には、多少の差があるや否やの問題

甲、若い狒々の頭骨
乙、瓜哇のピセカントロプスの頭蓋骨

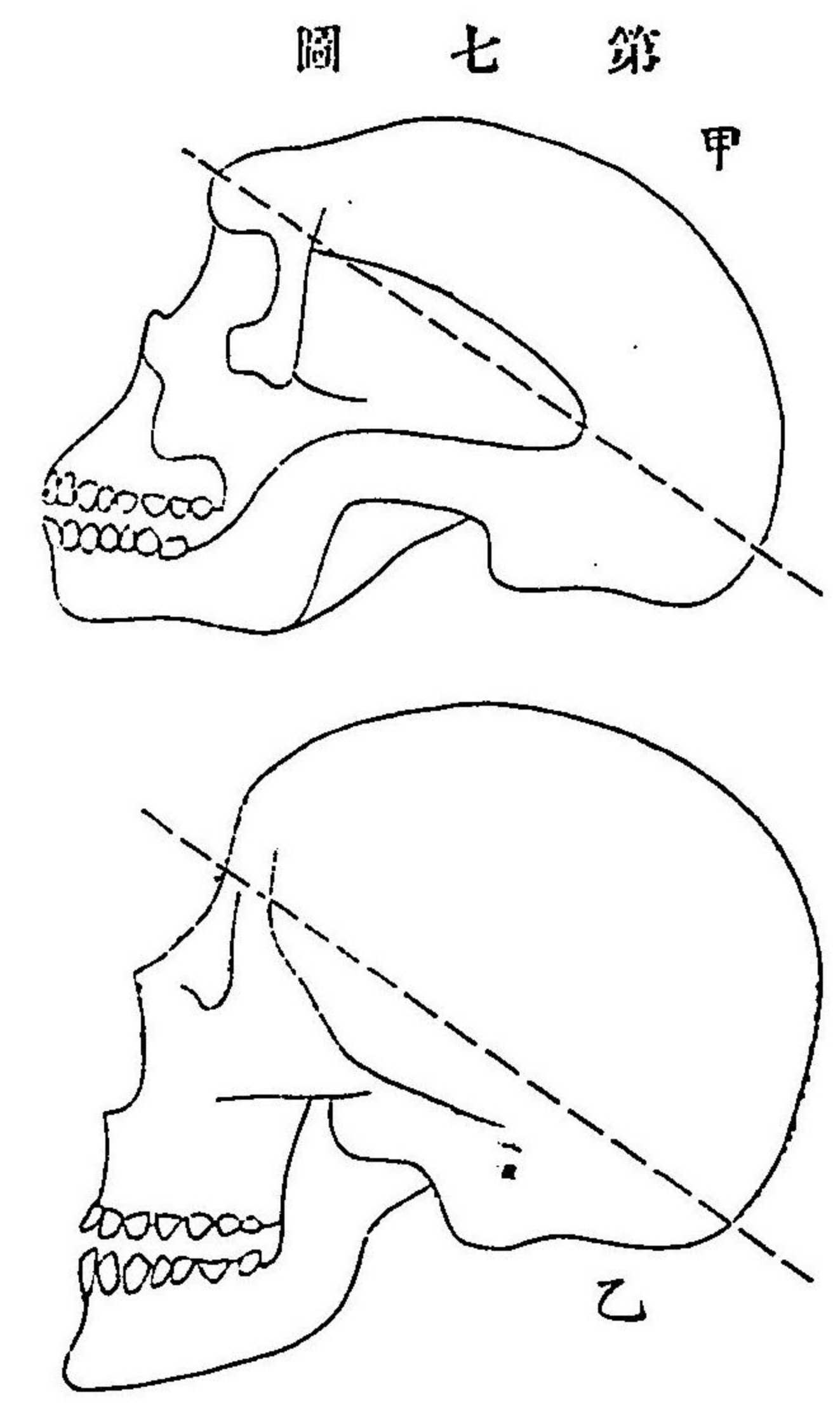
第 六 圖



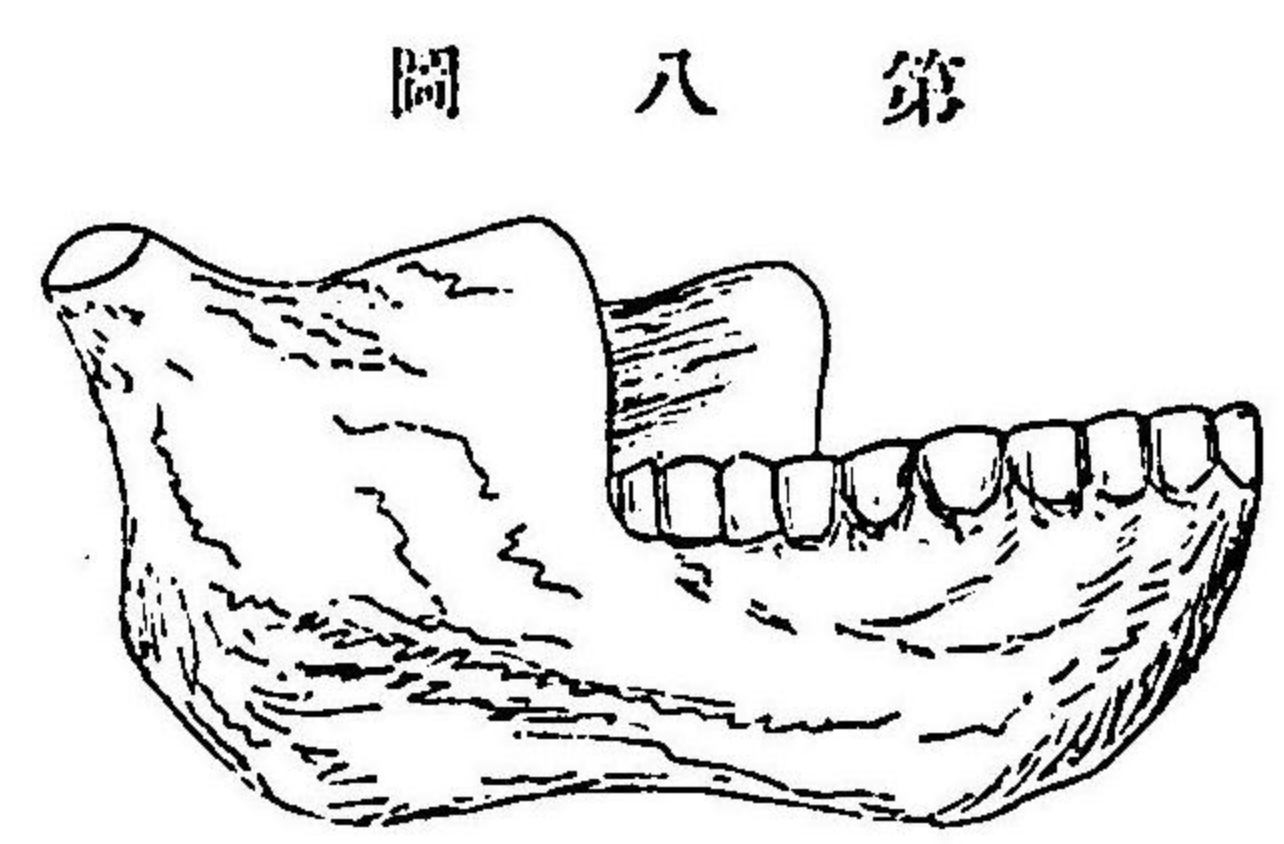
である。此の問題の久しく解決を見るに至らなかつた所以は、最初洪積世の人類は大抵その細工品に依て知れて居て、人類の骨格その物は甚だ少なかつたからである。然るに近來その骨格が陸續発見せられて、終にその大體の性質も明になつた次第である。乃ち之に據ると、額が甚だ低く、且斜に

後退して居て、それから、眼窩の上に當る所に前方に突出する結節がある。此兩性質は何れも頭骨の發育の甚だ劣等なることを示すもので、一口に言へば、猿に似て

甲、獨逸ネアンダール産の原人の頭骨
乙、今の歐羅巴人の頭骨



第七圖



第八圖

獨逸の最古の人類の頭骨下の近附

居る性質である。故に、之を今の人類 *Homo sapiens* (第七圖乙) と區別して、原人 *Homo primigenius* (第七圖甲) と稱することになつた。尙又明治四十一年、獨逸ハイデルベル

グ附近の洪積層の最下部に出た人類の下顎骨は一層劣等で、ハイデルベルグの人類 *Homo Heidelbergensis* の名を得るに至つた。

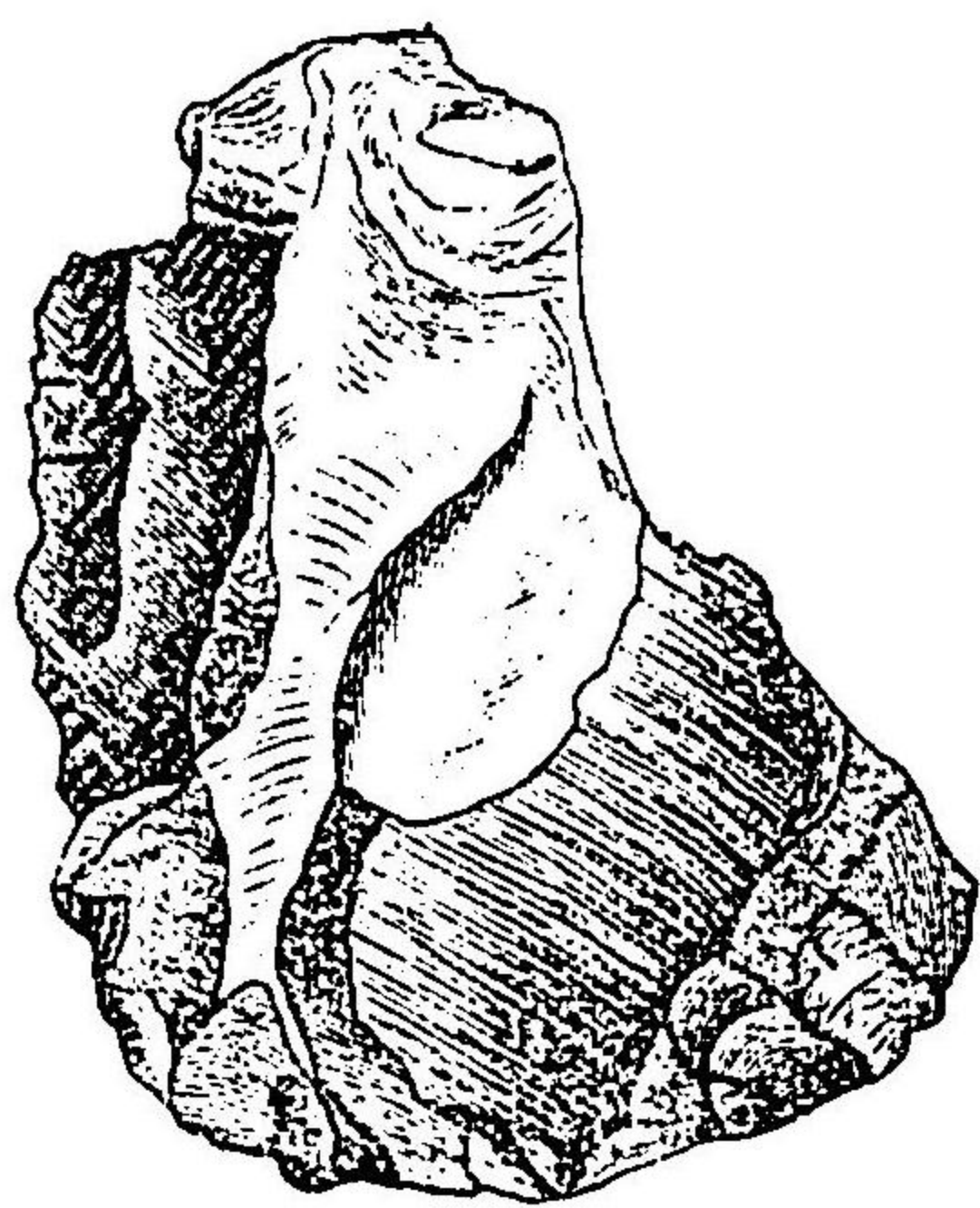
抑、生物が其の初生から今日まで、進化によつて變遷して來たことは今日既に確定事と見て、差支ないのである。して観ると、人類が高等の猿の類から發育して來たものであるといふことも決して想像説ではなく、寧ろ確定事と見てよいのである。因つて、今日の問題はその最初の猿類似の人類は何時頃此の世界に住んで居たかといふことである。先年、瓜哇の第三紀層と想像された地層中から一枚の頭蓋骨と、數片の足の骨とが出たが、此の頭蓋骨は餘程高等の猿のそれに似て、足の骨は直立すべき形を有つて居るといふので、之に、ピセカントロプス、エレクトラス *Pithecanthropus erectus* 即ち直立猿人との名が附いた。それから、此の物は人類と猿との間の連絡動物といふことになつたが、殊に其の時代が第三紀といふ原人の住んで居た時代前のものであるから、其の連絡動物であるといふことも、尙更實らしくなつた次第である。然るに、最近の研究によれば、第一、その出た地層は第三紀のものではなくて、矢張洪積世のものであることが分り、第二に、頭蓋頭は人類と猿との丁度中間

に位するものではなくて、人類より餘程猿の方に近いものであるといふことも分つたのである。それで、この動物は、詰り、一種の高等猿で、且人類の先き振れではなく、之と同時に、生活したものであることになつたのである。

然らば、第三紀には、人類はまだ出現して居なかつたかといふに、それは無論未定の問題であるが、しかし進化論の原理から推せば、當時既に居たものであると言つた方が至當に違ひない、と云ふのは、洪積世の人類は劣等には、違ひないが、兎に角、通りの器具を拵へて、獵を専業として、生活して居た人類である。して見れば、必ず之に先立つ獸類似の人類も居なくてはならぬ。その人類の智力が、器具を製し得るやうになるまで、發育するには、無論長年月を経なければならぬ。して見ると、その極々最初の人類の生息したのは、洪積世前の時代、即ち、第三紀であると言つた方が、實際、真に近いかと、思はるるのである、只今日ではまだその第三紀に、住んで居たといふ、實證を見出さないまでである。

近來、白耳義并に佛良西の學者の中には、原始石 *Holies* と名づけられた、原人の石器に似た石片を取つて、之を原人前の、人類の遺跡であると唱へる人がある。して其

第九圖



第三期中新世の産石

出所は何層であるかといふに、第三紀の末期や中頃の層ばかりでなく、古いものはその初期の層であると、言つて居る。若し此石片が真に人類の手に成つたものなら、それは大した發見であるが、しかし、學者の多數は之を天然石と見て、前の説を、否定して居る。

第二節 世界島

昔の希臘人は、世界は地中海を遠く東方に伸ばした方向に擴かつて居るもので、人類は此の東西に長い世界に住んで居ると考へて、之をオエクメネ *Oekumene* 即ち世界島と名つけたのである。然るに、又當時の希臘人中には、學者があつて、世界は實際、圓いものであるから、對住者同じ子午線下にて赤道の南北同距離に在る者もあれば、隣住者(同緯度の下に在つて、經度百八十度を距る者)もあり、又、對脚者(地球の全然反對の點に在る者)もある筈であると説いて、世界島の決して狭い窮屈な所でない

いことを暗示して居る。

此の希臘の學者の議論の的確なことは後世に至つて始めて知れたのであ
るが、蓋しその説は現世界ばかりでなく過去の洪積世にも、亦當て筈まるものと思は
るるのである。尤も、洪積世には、寒氣が甚だ強く、歐米の過半は大氷田の下にあつ
たやうな次第であるから、當時の世界島が希臘時代の世界島ほど大きくなかつた
ことは事實であらう。然し、洪積世が過ぎて、氣候が舊に復して溫和になつてから
は、人類は次第に北遷して、希臘時代になつた頃には、既に世界の大部分を占領して
居たと見て、大きな誤りはあるまい。只人類が北大陸の北方の海岸まで進行した
のは、蓋し耶蘇紀元後と思はるるのである。尤も、世界の大部分が人類に占められ
て居ることを實際に知り得たのは、發見時代以後のことである。

此の發見時代の初め、即ち西暦千五百年の頃に世界中の陸地が、北極附近の島を除
いて、大抵皆人類に住まはれて居たことは確であるが、しかし、其の間に、幾多の無人
の境は介在して居たのである。此の無人の境が次第に有人境に變じたのは全く
人口の増加に伴ふた結果である。蓋し、此の無人境の中には、島も少なくなかつた

ので、太平洋中のガラバゴス群島の如き、又印度洋中のマスカリオン、セイシエル、チ
ヤゴスの三群島の如き、又大西洋中のベルムーダス群島の如きは何れも、十七世紀
になつて始めて殖民せられたものである。

發見時代になつてからは、諸國の航海者が切りに世界の海を乗り廻はして、新領地
を得んことに熱中した爲に、世界島の知識も非常に増大して、北は北緯七十度に至
り、南は南緯五十度に達して、其の面積もその以前に比ぶると、三倍餘に増したので
ある。又單に面積が増したばかりでなく、その全部が世界の交通區域内に、引き入
れられたのである。

現在に於て、人類の永住して居る地域の限界は、亞細亞大陸に於ては、タイミル半島
の最北部を除いて、其の北岸まで、歐羅巴に於ては、ノワゼンブラ島の南部を横切て、
西の方諾威の北岬まで、北亞米利加では、グリーンランドの西岸は北緯七十九度ま
で、加奈陀の北部は此の地方に在る群島の南岸まで、アラスカは、其の最北點のバロ
ー岬までである。それから南半球に於ては、南亞米利加、亞弗利加、タスマニヤ、ニウ
ジーランド等の南端から、程遠からぬ諸小島まで、其の多くは南緯五十度線の邊

に位して、只南米の南方が五十六度まで伸びて居るだけである。然るに、此の區域以外の地にも尙世界島に準ずる地域がある。即ち大西洋の北方には、年々多數の捕鯨者と海獣取とが入込んで、冬越しをする所がある。又スピッツベルゲンやフランツヨーゼフ島の如きは近年遊獵者や世界漫遊客の觀光の爲め見舞ふ所となつて居る。それから、南極周圍の海にも現今盛に漁業者が入り込むのである。それで、今日に於て地球面の總面積を約三千二百萬方里と見做せば、その約九割二分(二千九百五十萬方里)は世界島と見るべきである。

第三節 世界の人口

現今開明國に行はるゝやうな人口調査は十八世紀の中頃に瑞典で始めて施行されて、それからその末に至て、合衆國が之に倣つたが、次いで十九世紀の前半になると、大抵の歐羅巴の國々も之に倣つたのである。然るに、獨り露國に至ては、明治三十年に至るまでは、精細な人口調査を行つたことは一度もなかつた。人口調査の始まる前には、見積りといふものをした。その見積りは今でも調査のない國に對して行ふものであるが、今の見積りは何か見積りをする基礎があつて

而して後、するのであるから、稍信するに、足るが、昔の見積りは多くは漠然たる見積りにしか過ぎなかつた。此漠然たる見積り方で見積られた十九世紀の初めの世界の人口は約十億であつたが、しかし、此の數はその後の調査の結果から考へて見ると、當らずと雖も遠からざるものといふので、今では、之を十九世紀の初期の世界の人口と見做すことになつて居る。

十九世紀に入つてからは、諸國で、人口調査を始めたのであるから、之が爲に無調査國の人口を見積るにも、大に根據を得たわけで、今では、世界の人口は既に十六億を超過して居ると見積られて居る。

此の十六億といふ數を見出すには、二様の方法を用ひたのである。一は人口調査の結果を基礎として豫算した者で、是は前に調査のあつた國々の人口を計算した法である。他の一は概算と、見積りとに據つたもので、是は無調査國に對して行はれた法である。此二方法で見出した數を一所に合せたものが、即ち前に述べた世界人口の見積り數である。

右の如き次第であるから、今日でも世界の人口を精確に擧ぐることは無論できな

い事である。しかし、人口調査が文明國で行はるるやうになつてからは、世界の人口の六割は先づ基礎ある計算と見て差支ないやうになつた。此の六割の人口は人類の住んで居る陸面の約半分に住んで居る。亞弗利加洲は其の十分九までまだ無調査の國である。又、我が亞細亞の如きも、其の半分は全く見積りに據つて居る國で、其の半分に支那のやうな人口の多數稠密の國が這入つて居るのは遺憾なことである。此の國の人口は三億二千萬から四億二千萬の間に見積らるゝのであるから、どちらにしても、一億の誤謬があると見なければならぬ。是は世界の總人口に對しては約十六分の一に當つて、實に少からぬ割合である。

一國の人口を見積る一手段は全人口の一部分の實數を土臺として、其全部の數を推定することである。例へば、徵兵適齡者の數とか、又は納稅義務者の數とかいふ様な者を本として他を推定するのである。納稅義務者は略戸主に相當するものであるから、一家族の平均數が略知れて居る場合には、之に依て全人口を概算することが出来る。固より、多數の奴隸を使用する國に於ては、此の方法は役に立たぬのである。昔の希臘時代や、羅馬時代の人口を見積ることの非常に困難なものも全

く此の奴隸の數と、自由民との數の割合が不明であるからである。又見積りの一手段として、一國に於ける食料品の産額や消費額を用ゆることがある。しかし、これは随分不確な方法と云ふの外ない。

又探檢家が其の探檢した國の人口を見積るに、自家の通過した道筋の戸數を概算して、全國の戸數を推測し、それから、一戸凡何人といふことを數へて置いて、全國の人口を推測することがある。この方法は随分粗漏なものには違ひないが、空に見積るのに比すれば、遙に優つて居るのである。

以上の如き見積りから、人口稠密の度を計るのは探檢地學者の仕事である。人口稠密の度とは全人口を全國に萬遍なく分配すれば、一定の區域内に何人づゝ居るやうになるかといふ平均數のことである。されば、全人口數を、全面積の數で除すれば其の商が即ち人口の稠密の度となるのである。例へば、吾か日本の人口は約五千二百萬で、その面積は二萬九千二百方里であるに因つて、五千二百萬を二萬九千二百で除すれば、一平方里の人口稠密の度は千七百八十になる。斯かる稠密の度は之に接する、土地の人口を見積るに、大に益することがある。例へば、印度の人

口調査の結果は其隣國である支那の或る地方の人口の甚だ稠密であることを推測せしめたと同時に、又其或る地方の見積り稠密の度が餘り大に過ぎることも分つたのである。即ち山東省の人口は從來三千七百萬と見積られて、その面積は約九千四百万方里であるから、一方里の人口稠密の度は約四千の割になる理である。しかし、此の數が山東省の如き山の多い土地の大部分に多過ぎるといふのは、印度ペンガルの少しも山のない平地で而も人口の甚だ稠密な所でさへ、一方里の平均人口が明治三十四年の調査では僅に三千六百二十であつたのである。近年諸國に於ては、人口の増加が極めて速かであるから、調査した年の大に相異る、人口を擧げて國々の人口を比較する時には、是と同時に、必ず調査の年限を擧げることにならなければ、誤謬に陥り易い虞がある。調査年限の少しぐらいの差は、各國に夫々大凡の増加率といふものがあるから、是に因て概算して、年限を一定することもできる。此の増加率を得るに最も必要なものは人口の動態と稱するものである。それは外でもない、出産數の死亡數に超過する數、並に若し移住者があれば、入國者と出國者との差に由つて、人口數の變化する状態を云ふのである。

以上の如き方法に據て、本年末即ち明治四十三年末の世界の總人口を計算すれば、その數は少なくとも十六億三千七百萬になる。此の中成るべく控へ目に見積つてあるのは、支那と亞弗利加とで、前者は三億五千萬、後者は一億三千五百萬と見てある。それから前の數を大陸別にすれば、左の通りになる。

| | |
|------------|----------|
| 亞細亞 | 約八億八千四百萬 |
| 歐羅巴 | 約四億四千一百萬 |
| 南北亞米利加 | 約一億七千萬 |
| 亞弗利加 | 約一億三千五百萬 |
| 濠斯刺利亞及び大洋洲 | 約七百萬 |

最近十年間の世界人口の一個年の平均増加率は六厘六毛、即ち一萬人に對して十六人の割のやうであるが、此の率は、遠き將來にも當て筈まるものであるとは考へられない。その理由は、今では世界中人類の住居に適する所は、既に残らず人類の入り込む所となつて居るからである。尤も、亞米利加の如く、濠斯刺利亞の如く、尙多數の人口を收容し得る所はないでもないが、しかし近來のやうに、人口の激增

を見る時代に於いては、此等の土地の人口の飽和の度に達するのも蓋し遠い將來ではあるまい。それで、今後人口の増加率が今より大きくなる見込はない否、歐羅巴の諸國では、其の出産数が年を逐ふて大抵減少しつつあるのである。乃ち十九世紀の後の六十年間で平均した一個年間の出産数と、最後の十年間で平均した一個年間の出産数とを比ぶるに、精確な統計のある國では、後の数が前の数より少ないのである。即ち人口一千に對する出産数が英吉利では三十三人三分から二十九人九分に、阿蘭陀では三十四人二分から三十二人五分に、白耳義では三十八人八分から二十九人一分に、獨逸では三十六人八分から三十六人一分に、埃地利では三十八人一分から三十七人一分に、佛蘭西では二十五人二分から二十二分二分に、瑞典では三十人三分から二十七人二分に、諾威では三十二人二分から三十人三分に、丁抹では三十一人二分から三十人二分に、芬蘭では三十五人から三十二人二分に減じて居る。是に因て觀るときは、文明國の多くに於ては、其の出産数の大抵次第に減じつつあることは掩ふべからざる事實である。

第二章 人類屬の分類

第一節 人類一源説

今から五六十年前までは、人類には色々の種類があつて、其の間には判然たる區別があるものゝやうに考られて居たのであるが、是は畢竟人類間には一見種々の著明な差があるからである。即ち骨格の逞しいものもあれば、又甚だ微弱なものもある。身の長の高い者もあれば、低いものもある。容貌の美しいものもあれば、醜いものもある。皮膚の色の白いものもあれば、黒いものもある。髪の毛の剛いものもあれば、柔かなものもある。黒いものもあれば、褐色の者もある。眞直な者もあれば、彎れたものもある。又寒暑勞働に耐へるものもあれば、耐へないものもある。その他、生活法や、道徳心の發育にも大なる差がある。又一方には大厦高樓を建て、有ると有らゆる文明の利器を使用して居るものもあれば、他方には森林原野に徘徊して、僅に天然に産する草根木實の類を食べて生きて居るものもある。斯かる次第であるから、人が自然人類には判然たる區別を有する種類があると見

たのも、亦無理のないことである。

然るに、進化論が出て、其の勢力が次第に増して来るに連れて、前に掲げたやうな差異區別は全く生活の状態やら、外界の影響やらで生じて来るものであるといふことが判然して、今では種々の人類は一見甚だ異なるやうではあるが、實は元皆同一の本源、祖先なら出たものであらうといふとに一決したのである。

第二節 人類の結族

昔しアリストートルが人類を群居的動物と言つた通りに、人類は必ず多少相集つて住む傾きを有つて居るものである。之を人類の結族と稱して、其の元素ともいふべきものは家族である。家族は狭義に取れば親と子とから成り立つものであるが、廣義に取れば、子の妻、孫、孫の妻等も含むことになる。それから、それが段々大きくなれば遂に親族となり、親族の上には宗族 *Tribe* がある。宗族となれば、其の間に血縁の有無は不明であるが、然し、昔から相接近して居る土地に住んで、體格も相似て居り、又言語も同一である所から、その祖先は本同一であつたことが推測せらるるのである。

さて、宗族が更に大きくなれば、民族 *People* となる。民族は必ずしも其の祖先を同ふするものではないが、其の言語と、昔からの經歷とは同一で、常に其利益を同ふして居るものである。故に場合によつては、一宗族で民族に成長したものもないでもないが、然し、多くの場合には、相似ざる宗族又はその一部分が互に相合して、民族を形つて居る。又勝者と敗者とが年月を経るに随つて互に相融和して、一民族となつて居る場合もある。斯かる場合には、一方がもと異元素であることが、數百年の後でも、尙其の體格の上に残つて居ることがある。良し又雜婚の爲め特徴は消へ失せても、社交上特に一階級となつて残つて居るとか、或は又居住の場所を異にして居るとかいふこともある。固より、これは混血融和の程度によつて色々違ふもので、其の度が進めば進む程、兩者の差が少なくなる譯である。斯かる次第であるから、言語習慣が同じであるのみならず、其の家系も同じである場合には、數宗族が一民族となることは一層容易である。

民族の或る一定の目的を以て一致團結したものは國民である。國民は民族を生み出す文明より一層高等の文明の産物で、之を生み出すに最も必要なものは所謂

國家的の思想である。國家とは家系言語の異同を問はず、人類の鞏固なる一團體で、上には共同の統御誘導の任務を有する者を戴き、且一定の區域の土地を領有して、之に住んで居るものである。故に國民は民族よりも其の範圍が一層狭いものではあるが、しかし其の主義綱領に於ては一層進歩したものである。随つて宗族や民族中に國民まで、進歩發育したものは古今を通じて少ないのである。國家には自働的のものと、他働的のものとがある。自働的の國家とは其の存立を自力によつて維持するもので、他働的の國家とは他の慈悲心又は國際公法の力で、辛ふじて存立するものである。

近來聯合的の國家が少なくない。聯合的の國家とは一定の區域内に、住んで居る同一民族の個々別々に國家をなして居るものが一の中央政府の下に、統合されて居るものを云ふのである。例へば、北米の合衆國、瑞士同盟國、獨逸聯邦等の如きものである。蓋し近年此の聯合的國家を組織することが文明民族中に益増加するの傾向を來たしたやうである。即ち、南米の諸國に於ての如しである。然し、此の種の國家を組織するには復或る條件が必要である。例へば、相連続して居る土地に

住むこと、同一の利益目的を有すること、人種の同一なること等で、此等が異なる場合には、聯合は到底望むべからざるものである。

第三節 人類の種類別

現今人類は數多の宗族や民族に分れては居るが、その體格や言語に據るときは、之を少數の大部類に纏めることができる。之を人種と稱するのである。併ながら、人類が果して動物學や植物學で謂ふ所の種に分つべきものであるか、又は人類は僅に一種で、人種と稱するものは前の二學で種より一層意義の狭いものとしてある亞種に相當すべきものであるかを説く前に、少しく人類の過去に遡つて考へて見れば、先第一に起る問題は其の初めて生れ出た故郷は何處であるかといふことである。是に對してはまだ吾々の研究が之に確答をなし得る迄には進んで居ないが、しかし、吾々は此の故郷は舊世界の氣候溫暖の地に在つたものであらうと想像するのである。斯く想像する理由は外でもない、今日主要の人種の分布區域は此の溫暖の地に集つて居るからである。思ふに、人類は此の地から四方に移住散亂した結果、異風土の所に行つたものだけは、周圍の狀態の影響を受けて少數の亞種

と變じたので、今日吾々が人種と稱するものも、實は此くして出來た亞種に外ならぬやうである。然らば、則ち今も尙此の亞種が新に出來つゝあるかといふに、それは既に遠い過去に結了して、今は最早之が成立を見ないのである。その理由は言ふまでもなく場所の不足なのに基くのである。即ち地球面が狭過ぎるのに在るのである。現下人類は行くべき所には皆行つて新に行くべき所はないのである。それで、人類の數が増加すれば則ち前には、相離れて住んで居たものも自然相接近するやうになる。接近すれば自然互に交通する、争鬭をする、物品、奴隸、女子等の取り合をする、其結果は雜種の成立となる。雜種が出來れば、前には區別の明な人種の間、中間の性質を帯びた者が現はれる譯である。して、其の數は交通の益頻繁になるに随つて、益増加すべきものである。

現今、雜種の最も大規模に出來つゝあるのは米國である。此の地には、白人と、昔多數に輸入された亞弗利加の黒人と、及び白人と土人と、の間に、雜種が盛に出來つゝある。

此の雜種製造は既に久しい以前に始まつたことであるが、之が爲、未だ純粹の人種

が滅亡するまでには至らぬ。乃ち歐羅巴の白人と、亞弗利加の黒人と、は互に之を突き附けて見れば、其の間の差異は一目して明である。又白人と蒙古人との間の差異もさうである。しかしながら、兩者の住んで居る界の土地に至れば、又種々の中間の性質を帯びて居るものが多いので、兩者の間に、判然たる區界を引くことのできないことも亦事實である。

斯くの如き次第であるから、人類を種々の部類別けにすることは、難業であるから、別け方にも人に依つて差異がある。その差異は主として如何なる性質を分類の基礎とすべきかにある。

第四節 人類の分類

今から一百年餘の昔、ブルームンバハ Blumenbach が人類を其の身體上の差異數點に據つて五人種に區別した以來、是と類似の企をなした者は少からぬのであるが、或る一性質を土臺として、人種の區別を立てやうとした者は皆不成功に終つて居る。此の區別の土臺とされた性質は頭骨の構造形狀、身長、體色、毛髮の性質等の如き者であるが、此等に因て、立てられた區別法を略述して見れば、左の通りである。

(二) 頭骨を土臺とした人種別

頭骨を土臺としたのは、頭が人體中最も大切な個所であるからで、是には先づ長頭と、短頭とを區別し、次に高頭と低頭とを區別するのである。長短の區別は頭骨の前後の長さ、左右の幅との差から、割り出すもので、長さを百として幅が七十一乃至七十三であれば、則ちその頭は既に立派な長頭で、其の好的例は亞弗利加の黒奴である。之に反して、カラムツク人の如きは幅が八十五で、短頭者の好例である。若し又幅が七十五乃至七十九であれば、之を中頭と稱することになつて居る。それから、又同じ方法で狭顔と廣顔とを區別するのである。

尙又頭骨の下部の形で、斜顎と直顎とを區別する。斜顎とは顎骨が前方に突出して上下の歯が直立せず、互に斜に對立するものである。直顎とは之に反して上下の歯が直立して、相對するものである。

偕、以上の如き頭骨中の各部の差異で、人種別をすることの甚だ困難であることは一民族中にでも種々の形の頭骨があることで明である。例へば同じ獨逸人中でも、北方の者は甚しく長頭であるに反して、南方の者は主として中頭若くは短頭で

ある。隨て頭骨に據るときは、獨逸人は二人種か三人種に別れて、その不自然なることが一目して明である。但し此の分類法も異人種間に何程の混血が行はれて居るかを見るには時に、随分必要な場合もある。

頭骨の内部の容積を計つて、腦漿の大小を立方^{センチメートル}にて表はすことがあるが、之に據れば、男子のは大抵千二百乃至千六百立方^{センチメートル}で、女子のは是より百乃至二百立方^{センチメートル}だけ少ないのである。蓋し腦積の大小は身體の大小(殊に胴部の大小)と一定の關係を有つて居るやうである。

(三) 身長を土臺とした人種別

人類の身長は人の最も氣の着き易い性質で、丁年以上の者に於ては、略百七十五^{五尺七寸七分五厘}と、百四十^{四尺六寸二分}との間に在るものである。平均して最も身長の大い民族はバタゴニヤ人、北米洲の白人、イロケース印度人(米國の土人の一族)、南部亞弗利加のブール人等で、身長百七十^{五尺六寸一分}前後の者でも、其の數少からぬのである。日本人の身長は男子のが平均百五十八^{五尺二寸一分}、女子のが平均百四十六^{四尺八寸一分八厘}であるから、兩者の平均は百五十二

糞(五尺一分六厘)となる。

以上に對して、矮人と稱するものがある。即ち亞弗利加のフシメン并にアバンゴの如きもので、其の身長は百三十八糞(四尺五寸五分五厘)から百四十糞(四尺六寸二分)までの間にある。

近來の研究によれば、身長の大小は先祖傳來の性質には相違ないが、之を以て、人種の區別を立てることは全く不可能であるとのことである。

(三) 體色を土臺とした人種別

體色とは獨り皮膚の色をのみ謂ふのではなく、毛髮と眼の虹彩ひとみとの色をも含むものである。近來の研究によると、身體の外部に現はれて居る種々の色の本元たる色素は如何なる人も皆同質のものであるが、その皮膚の細胞内に堆積して居る分量には、人によつて自ら差異がある。乃ち此の分量の多少が體色を種々に變化せしむるものであるといふのである。それで、同じ白色人種や黒色人種の中にも、其の色には種々の階級があつて、其の階級を傳つて行くと、白人が漸次黒人に推し移り、又反對に黒人が漸次白人に推し移るといふ次第であるから、體色のみで、人類

を分類することは到底出來難いことである。

(四) 毛髮の性質を土臺とした人種別

或る民族では、毛髮に一種特別の性質あることは事實である。例へば其の横断面が楕圓であるとか、圓であるとか、又は其の生へ方が南部亞弗利加人に於けるか如く、束たばをなしてブラシの様であるとか、又は毛髮が縮れて居るとか、眞直であるとかいふことであるが、しかし、此等の性質の何れと雖も、一民族中に例外なしに共通するものは一もない。それで、若し強いて分類を企つるならば、之を二類とするの外ない。即ち一は滑毛で、一は捲毛である。滑毛とは多少眞直な形のものではあるが、柔なのもあれば、剛いものもある。又大きく球のやうに卷いて居るものもある。捲毛とは細に攀かれて居るものであるが、環に捲いて居るものもあれば、又螺旋狀に捲いて居るものもある。

第五節 言語の差異

言語は吾々の思想を音聲にて表はす道具で、人類にのみ發育して居るものであるから、大に之に重きを措いて、之を人種別の根據とするを至當とする者がある。目

下世界に於ける言語の種類は少くも一千ぐらいはあつて、之に土音即ち訛りといふものを加ふれば、千五百にもなるであらうが、しかし、言語學者は之を僅數の種類にまとめて居る。即ち支那、安南、暹羅等の言語を單音語といひ、馬來人や南洋諸島民の言語を二音語といひ、日本語、朝鮮語、中央及び北部亞細亞の語、印度のドラビダ語等の如きものを添加語といひ、亞弗利加バンツ人等の言語を配列語といひ、米國土人の語を合體語といひ、又現今歐米の大部分に行はれて居る白人の言語を曲折語といつて居る。今此の分類法の良否はさて措いて、言語を以て人種の區別をする事の不能なるは、言語は宗族や民族と一般、一の有機物であるからである。變化するものであるからである。廣い面積の地に蔓延して、獨立の文學を形成するまでに發達しなければ、滅亡するものであるからである。歴史に徴するに、古來敗者が自家の言語を棄てて勝者の言語を採つた例が少なくないのである。此の例は殊に勝者が一層高等の文明を有つて居て、敗者の間に殖民的に入り込んで行つた場合に多いのである。昔の羅馬人が其の周圍に住んで居た民族を羅馬化してしまつたことは明に歴史の教示する所である。又反對に人數の少ない民族が人數

の多い而もより高い文明を有つて居る民族の中に飛び込んで、之を征服した後、自家の言語を捨てて、反つて敗者の言語を採つた例もある。即ち羅馬帝國を蹂躪して之を滅した民族の如しである。即ちその言語は今地中海沿岸地には残つて居ないのである。斯かる次第であるから、體格上同じ人種に屬するものでも随分違つた言語を話して居るものもある譯である。然し、全體から觀れば、斯やうなことは例外である。因て人種學者が其の人種別に於て言語に重きを措くのも、言語の變化は着物を脱き棄てるやうに、さう手早く且容易に出来るものではないことに基いて居る。蓋しこれも一理ある議論に相違ない。

それで、現今同じ大部類に屬する言語の行はれて居る土地は各人種の分布區域と略一致して居る。斯く言へば、或は言語の數と土地の數とが同じであるかの様に聞ゆるかも知れぬが、決してさういふ譯ではない。乃ち各人種中には、種々の些細の差異ある言語を話すものはあるに違ひないが、しかし、その人種が他の大部類に屬する言語の行はれて居る區域内に入り込むことは甚だ罕である。若し入り込むことがあるとすれば、それは大抵兩者の境界地に見るのみである。

第六節 人種の分布區域

植物にせよ、又動物にせよ、各種各屬各科に夫々分布區域といふものがある。此の分布區域の由來は土地によつて其の狀態が各生物に適しないにも因るであらうが、しかし、又前世界に於けるその分布の工合にも大に關係するものである。人類は他の動物に比して最後に現はれたものではあるが、それでも尙その分布區域がある。尤も今日では、交通の便が開けて、世界の何れの部分へでも自由に行くことができるのであるから、人種が自家の分布區域を出て、他人種の區域内に入り込んで居るものも少からぬのであるが、發見時代前即ち西曆千四五百年頃に遡つて見れば、さうでなかつたのである。しかしそれでも馬來人の如きは航海に長じて居る爲めか、既にその頃西はマダガスカル島から、東は大洋洲のイースター島まで、數千里の間に擴つて居たものである。尤も此の區域は島から成り立つて居るのであるが、其の配布の工合から見ると、一大連續區域と見做すべきものである。蓋し大體から云へば、大人種は其の原住地から他へ蔓延するには、必ず故障の最も少ない方面に蔓延して居る。又場合によつては、其の原住地から追ひ出されて居るもの

もある。然し通則としては、全然其の原住地を去つて、他に移住したものはないやうである。

第七節 人類の八分

植物や動物の種類別は學者間に略一定して居るが、人類 *Homo sapiens* の種類別に至つては、學者の説が區々である。其の理由は人種學者が大抵或る一性質を分類の土臺とするからである。それで、若し人類を種類別にする必要があれば、その土臺となるべきものは一性質でなく、種々の性質でなくてはならぬ。斯くしてこそ始めて適當な種類別もできる譯である。

従來、人種別を試みた者を通觀するに、その流義に二派あるやうである。一派は、ブルメンバハ *Blimmbach* の分類法に倣つて、人種を少なくとも六七種に分つので、一派はキュビエー *Cuvier* の法に倣つて、之を成るべく少なくして、三種に切り詰めるのである。

ブルメンバハは千七百九十五年に、人類を五人種に分つたが、その基礎としたものは皮膚の色の外に他の性質をも共に参照して居るのであるから、大體から云へ

ば、意外に能く出来て居るのである。それで只馬來人種と稱へたものの中に少しく、改正を加へさへすれば、可なりなものが出来るのである。前記の五人種といふのは左の通りである。

(二) 地中海人種 *Mediterranean Race*

是は一名印度大西洋人種 *Indo-Atlantic Race* とも稱して、北東に於ける蒙古人種と、南西に於ける亞弗利加人種との間に介在して、文明民族の大多數を占め、且目下世界の競争場裡に於て、半耳を取つて居るものである。して其の數は八億餘に達して、世界の總人口の殆ど半數を占めて居る。

ブルーマンバハは此の人種を高加索 *Caucasian* 人種と稱へたのであるが、此の名稱の不適當なるは言ふまでもないことである。蓋し、ブルーマンバハが此の名を擇んだのは、同地方を以て人類の起源地と思ひ、且同時に同國人を以て此の人種の模範的代表者と誤認したからである。

此の人種の原分布區域は歐羅巴(北東部の芬蘭人の居住地、中央部の匈牙利、東部の土耳其等を除き)から、亞細亞の西部を経て、印度に連り、又亞弗利加に在ては、その北

部及び東部を占めて居る。

此の人種は、言語に據れば、三大類に區別することが出来る。即ち其の一は印度歐羅巴人 *Indo-Europeans* (一名印度日耳曼人) 其の二はセミチツク人 *Semitics* 其の三はハミチツク人 *Hamites* である。して、此のセミチツク、ハミチツクの二人種中には、亞細亞並に亞弗利加の地に水草を逐ふて徘徊する牧畜民族も這入つて居る。地中海人種中に入るべきもので、現今一種特別の孤立の位置を有つて居るのはバスク人 *Basques* と、高加索人とである。バスク人は目下ピレニース山の西部に往んで居る、極めて少數の民族で、その言語も他と似ざる一種特別のものである。又高加索人は昔しブルーマンバハが理想的美貌を有つて居る白人種と想像したものであるが、人種學者によつては、之を白人種とせず蒙古人種中に入る人もある。何れにせよ、此の二民族は昔し盛大であつた民族の將に滅亡せんとして居る、所謂、殘遺人種であるとの説である。

さて、發見時代以來、此の地中海人種の世界に蔓延したことは夥しいものである。即ち亞米利加の大部分は既にその占むる所となり、南部亞弗利加と濠洲とも、亦其

の殖民地と化し去つたのである。

地中海人種の特性として擧げらるるものは、先、皮膚の色が鮮なること、頬の赤いこと、換言すれば血液が皮膚を透して見ゆること等である。蓋し此の色の淺薄鮮明な所から、白哲人種又は單に白人の名も出たのである。然し、此の白色は多く北歐に住む者并にセミチック人種に見る性質で、南歐の住民では既に幾分か、黒ずんで居り、アラビヤ人並に印度人では、更に甚しくして褐色に變じて居り、亞弗利加に住む者では、眞の黒色と認むべき色になつて居る場合もある。頭骨の形は、有らゆる種類を呈するが、然し、中頭と短頭とが最も多く、腦積は其の形の割合には頗る大である。顔面の形は概ね楕円で、顔骨は低きか、又はよし高いにしても、其の度が甚しくない。鼻は狭く、頬の突出少なく、齒は直生して、唇は薄い。又毛髪は柔にして、波状時に綵形に巻き、淡い亞麻色(茶色)から濃き栗色を経て、黒色の間に在る。鬚髯は大抵豊である。

(二) 蒙古人種 Mongolian Race

蒙古人種は一名黃人種とも云つて、其の原産地は亞細亞である。此の亞細亞の中

で、その西部と印度と南部の多島界とは他人種の占むる所であるが、その代りに、小亞細亞を経て、歐羅巴の土耳其に入り込み、又その北部にも産し、それから飛地として匈牙利にも侵入して居る。又現今に至りて、露國の斯拉ーブ人が反對に、北部亞細亞に入り込んで來たやうに、南洋、南部亞弗利加、北米等にも移住しつゝある。

此の人種は昔は他の人種より一層多かつたものであると思はるるが、今では白人より遙に少なくなつて、全數約五億(支那の人口が不明である間は、此の數も亦不明である故に之を假に三億五千萬と見て)もあらうかと思はふ。すると、世界の總人口の三分の一にも及ばないものになる。

人種としての性質は、顔形廣く、頭短く、顔骨突出して、顔面概して平に、鼻廣くして低く、口は大抵大にして、眼は稍斜なるが常である。毛髪は粗にして直に、大抵黒色を帯び、鬚髯は概して少ない。皮膚の色は稍黃ばんで、一方には褐色、黒色となり、他方には白色となつて、中には地中海人種と區別し難いものまである。即ち芬蘭人は其の好例である。

(三) 馬來多島洲人種 Malayo-Polynesian Race

亞細亞の最南部であるマラッカ半島から、此の附近の多島界に掛けて一面蔓延して居る人種である。此の人種は移住によつて、北は非律賓、並に臺灣の東部に達し、東は南洋最東の小列島を経て布哇、タヒチ、ニウジランド島等に達し、西は印度洋

第十圖



馬來人

を越えてマダガスカル島まで踏み込んで居る。此の人種の中には、瓜哇人の如き可なりの開明の度に達して居るものもある。人種の全数は、その繁殖速かなる爲め、約四千七百萬に及んで居る。

十六ぐらいのものがある。顔面は楕円で、顴骨低く、鼻は大きい等である。

(四) 亞米利加人種 American Race

此の人種は最初亞米利加が発見せられた頃には、その最北部から其の最南部であ

る南米のテラデルフェゴ(火の國)まで擴つて居たものであるが、其の中のエスキモ一人の如きは蒙古人種に似て、顔面が廣く且平で、顴骨が突出して、眼は細く斜であ

第十圖



亞米利加人

るが、頭骨に至つては短くない。蓋し此の人種には共通の性質が少ないのであるが、しかし、又白人種に於ける如く、極端の性質を帯びて居るものも亦少ないのである。

此の人種の體格は概して、大きく一見立派なものではあるが、其の實餘り抵抗力の強い頑丈なものではない。一般の性質は下の如きものである。髪が直にして黒く、髭が少なく、皮膚は黄褐色である

か、中には之を銅赤色に染めて居るものもある。之が爲め此の人種を赤色人種と云ふこともある。鼻の形は多くは弓狀に彎曲して、銳稜を有し、額は低くして後方

に向かひ斜に引込むものも少なくない。尤も、此の性質は時に幼少の際に頭骨を人為的に壓迫するに由ることもある。

亞米利加人種で墨其哥と秘露との高原に棲む者の中には、白人の入り込む前に、既に一種の半開的文明に達して居たものもあつたが、此等は白人の爲に撲滅され、又その他のものも白人の入り込むと共に次第に滅じて、今では此の人種は五人種中の最も少ないものとなつて居る。但し最初入り込んだ西班牙人や葡萄牙人は多く無妻であつた爲に、土地の女子を娶つて多数の雜種を生ずるに至つた。尤も、此の雜種は之を純血の主人と區別することが甚だ困難である。蓋し純血の主人は千六百乃至千八百萬ほどあつて、雜種も亦之と同數ぐらいであらう。

(五) 亞弗利加人種 African Race

此の人種は黒人種とも云つて、亞弗利加洲中其北と東との地中海人種の住んで居る部分を除いて、他の全部を占めて居る。昔ブルーマンバハは之をエシオビヤ人種と名けたのであるが、此のエシオビヤと云ふ名稱の當らないのは、昔エシオビヤと稱した地方は、多くハミチツク人種の住んだ所で黒人の産地でないことで明か

である。

亞弗利加人種は二類に分れて、一をスーダン黒人 Sudan-Negro と云ひ、一をバンツ

第二十圖



人黒 - ツンバ

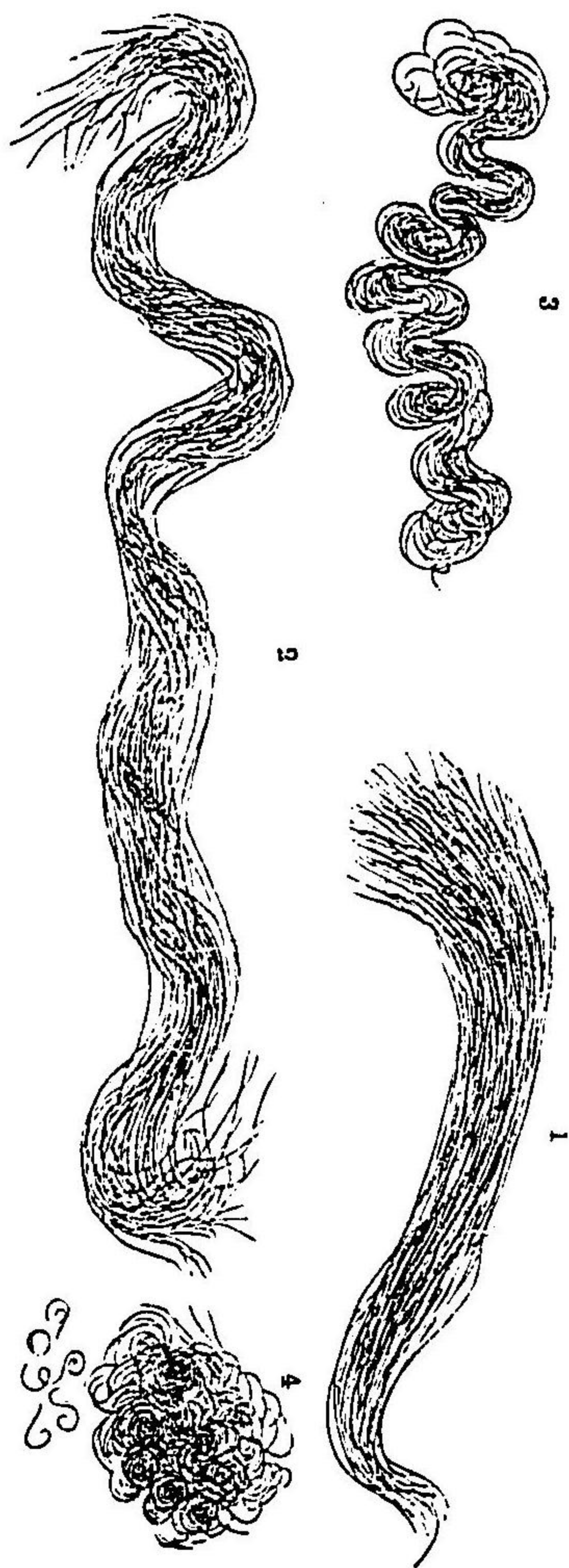
黒人 Bantoo-Negro と云つて、前者は北はスーダン國のサハラ沙漠に接する地方から、南はコンゴ河の分水嶺までの間を占めて、後者は其の以南を占めて居る。

黒人は、數百年前、奴隸として夥しく米國に輸送されて、今では同地で大に繁殖したのみならず、又白人との雜種まで拵へて居る。又彼等は奴隸制度廢止後は皆自由民となつて、殆ど文明國民の取扱を受けつゝあるに反して、其の母國の黒人に至つては未だ半開以上に達したものは無い。

黒人の數は、弗米兩洲と米國に於ける雜種とを合せて、一億二千五百萬を出ないやうである。

體格上の性質から云へば、黑人種は概して頑強で、忍耐力に富み、且軀幹も頗る大である。頭骨は後頭部大に發育して、額は後退し、長頭にして、斜齒である。鼻は廣く

圖 三 十 卷



髮 卷 (一) 髮 卷 (二) 髮 卷 (三) 髮 卷 (四)

して又概ね平で、口は大きく、唇は甚だ厚い。毛髪は小螺旋に捲き、皮膚の色は暗褐色から種々の階級を経て眞黒色となつて居る。

亞弗利加全洲を通じて、諸處に、殊に、遠い山里に隠れて、矮人種が居る。之を簡單に

亞弗利加の侏儒と稱へて、黑人に比すれば、多くは鮮かな薄色を有つて居る。一説に、此の人種は昔亞弗利加の南部に蔓延して居て、後次第に白人の爲に、内部に追ひ込められたホツテントット Hottentots 并に ブシメン Bushmen の二民族と、關係あるものであらうとのことである。兎に角、其の色は黄褐色で、身長低く、體格は柔弱で、顴骨は突出し、眼は細く、稍斜で、女子の脂肪太りをする事等、等は周圍のバンツ―黒人と大に異なる性質である。言語は今日までの研究によれば全く孤立的のもので、他に之に類するものはない。因つて、人種學者中には、之を獨立の一人種とするものもあるが、又之を黑人の附屬人種とする者もある。兎に角、此の人種は一種の殘遺人種で、他人種と混じらない、純血の者は今日洵に少ないやうである。

(六) ドラビダ人 Dravids

印度の南部とベルチスタンとに住んで居る民族で、地中海人種たる今の印度人が北西から、此の地に移住して來る以前に、此の土地に住んで居たもので、今では兩者

雜婚の結果、平地に於ては其の區別が甚だ困難であるが、山間僻地に至れば、未だ其の純血なのが残つて居る。

皮膚の色は黒く、髪は柔にして波状又は絨形に捲き、髭豊に、言語は添加語で、今の印度語とは全く違つて居るのみならず、他の亞細亞語とも亦違つて居る。尤もドラビダ人で印度語を話すものもあるから、此の人種の數を知ることが困難である、尙此の方面の調査が未だ不充分であるから、先此の言語を話すものは皆同人種であるとすれば、其の數は六千萬餘になる。

(七) パプア人 Papuans

一部は馬來多島界中の諸島に住み、一部は非律賓に住み、一部はニウギニー島から東の方ファイジー列島まで住んで居るもので、多くは馬來人に壓迫せられて、内部の山間に退いて居るが、其の色が黒くして、一見亞弗利加の黑人種に似て居る所から、其の住地たる諸島には、メラネシヤ即ち黑人洲の名まで、附けられたくらいである。

色の暗褐乃至黒である點は大に亞弗利加人に似て居るが、髪が極めて密生して、且

第 十 四 圖



(女) 人 ア プ ア

細に絨形に縮れて居ること、鬚の多いこと、鼻の隆いこと、額骨の甚だ高いこと等は亞弗利加人の立派な區別である。此の人種は未だ曾て高等の文明に達したことがない。又其の數も二百萬乃至三百萬より多からざるものである。

(八) 深刺利亞人 Australians

此の人種は其の數五萬より多からざる眞の殘遺人種で、昔は濠洲の全部に群をなして、徘徊して居たものである。髪は黒色を呈して、球狀に捲いて居るが、螺旋狀に捲いて居るが、體格は瘦せて全身に毛が多い、此の人種は、一方には亞弗利加人に似て、他方にはパプア人に似て居る、一説に、此の人種には、南北の兩種があつて、南方人種は毛髪が黒色を帯び且細に

第五十圖



五〇
攀れて居るに反して、北方の人種は其の色が淡く、且直であるといふところがあつたが、其の信僞はまだ不明である。
前に、明治四十三年の世界の總人口を約十六億三千七百萬概數にして十六億三千萬としたのであるから、

之を八人種に割り當れば略左の如くなる。

| | | | |
|-----------|-------|----|-------|
| 地中海人種 | 八六五百萬 | 概數 | 八六〇百萬 |
| 蒙古人種 | 五〇〇〃 | | |
| 馬來多島洲人種 | 四七〃 | 同 | 五八〇〃 |
| 亞米利加人種雜種共 | 三五〃 | | |
| 亞弗利加人種 | 一二五〃 | | |
| ドラビダ人 | 六二〃 | 同 | 一九〇〃 |
| パプア人及び濠洲人 | 三〃 | | |

合計

一六三七〃 同 一六三〇〃

第八節 人類の三分

人種の數を減じて三種とするのは白人種、黃人種、黑人種とするのである。

白人種とは前に述べた地中海人種と略相符合するものであるが、芬蘭人、ラブランド人并に匈牙利人はその言語の他と大に異なるに拘らず、之を此の中に入るるのである。

黃人種とは蒙古人種に更に亞米利加人種と馬來多島洲人種とを加へた者である。それで、其の分布區域は三人種中の最大のものとなる。黑人種とは亞弗利加人種に更にドラビダ人、パプア人并に濠洲刺利亞人とを合せたものである。

性質を舉ぐれば、白人種は皮膚の色が白く、鼻が狭く且高く、黃人種は皮膚が黃色で、髪の毛が大抵黒く、黑人種は皮膚が黒く、髪の毛が多少縮れて、鼻形が幅廣であるといふのである。此の別け方が簡單便利なこととは言ふまでもないが、しかし各種の中には、體格の大に違つて居るものも少からぬのであるから、更に之を中間性の人種として別に部類を置くとときは、分類が簡單ではなく、反つて複雑になるのである。

から、之を採用する學者の少ないのも亦止むを得ない次第である。

五二

第九節 人類と風土との關係

人類は全體から言へば、世界的の動物である。即ち熱帯にも住めば、寒帯にも住む、高山にも住めば、海邊にも住む、又北半球、南半球、東半球、西半球、何れの半球にも住んで居る。去りながら、人類が斯く弘く蔓延したのも畢竟長年月を経て、夫々異風土に適するやうな亞種を生じたからである。それで今日熱帯地方の住民と、寒帯地方の住民と、其の土地を交換させることは不可能のやうである。素より熱帯の住民には勞役の多い寒冷の地に移住するの必要は殆どないが、反對に、天産物の豊かな熱帯地方が、歐羅巴の文明民族の上に、一大引力を働いたことは著明な事實で、之が爲に發見時代以來、歐洲人の熱帯地方に誘引された數は夥しいものである。それで、異風土の熱帯に果して歐洲人が馴れ得るや、否やは、久しい以前からの問題であつたが、先年亞弗利加洲が、歐羅巴の諸國に分割されてから、之が開發の必要上、前の問題が一層緊急になつたのである。しかし英人の印度に、蘭人のスンダ諸島に、西班牙人の西印度に於ける經驗から見れば、歐洲人が熱帯に移住して、こゝに長く繁

殖する事は全く出來難い事である。何故といふに、その小供が死ぬからである。小供は他の健康地に移して育てなければ、大抵死るるからである。それで、如何に好都合の場合でも、一家族が三代以上に續くことはないのである。

斯かる次第であるから、歐羅巴人が熱帯に移住して、自ら之が開墾に従事することは不可能である。随つて其の土地の風土に慣れた民族を之に従事せしむるの外、別に手段がないのである。

近來、支那人が博く世界に出稼ぎをするから、此の人種だけは如何なる風土にも構まぬものゝやうに言ふものがあるが、支那人の出稼ぎは多くは單獨的に行くので、全家族を擧つて出掛るのは至て稀である。蓋し、個人の全家族乃至は全宗族よりも一層抵抗力に富むことは言ふまでもないことである。個人なれば、異風土に犯されぬ様に、防禦方法を講ずるにも、全家族や全宗族に對して之を講ずるよりも、遙に容易である。異風土の地に移住して、之に耐へ得るや否やの問題は、個人々々に取つてではなく、多數の人に取つてである。老若男女を合せたものに取つてである。

歐羅巴人の中でも、異風土の地に移住して、其の瘠れ方に早いのと晚いのがある。即ち葡萄牙、西班牙、伊太利等の人の如き、所謂南歐人は、北方の人より熱帯地方の風土に耐ふる力が強いのである。是は蓋し南方の人は昔から亞弗利加の北方に住む、亞刺比亞人と相接して、多少其の血液を受けて居るからであるといふ人もある。人類の食物に就ては、昔から廣く世に行はれて居る説がある。それは即ち風土が異れば、食物も異なるものである。殊に熱帯の住民は家屋や衣類が、手輕なもので済むから、食物も亦他帯の住民に比して、少量で済むと云ふのである。然るに、最近の研究によれば、是は誤謬で、食物の分量の差は殆ど言ふに足らない程僅なものであるといふことである。

前の如き説の行はれた原因は、寒冷の土地に住む者は、体内の温を維持する爲に、温暖の地の人より一層多量の炭素を要するといふのにある。抑、食物の要は身體から排泄する物質を補充するのにあるから、其の質が身體の營養に大關係を有つて居ることは無論である。底で身體の營養に必要なものは、水、鹽、蛋白質、脂肪並に炭水酸化物(澱粉、糖等)であるが、水と鹽とは何れの食物にも多少含まれて居るもの

であるから、詰まる所、蛋白、脂肪、並に炭水酸化物の分量にあることになる。最近の調査に據れば、何れの民族でも、何れの地に住む者でも、身體に要する蛋白質の量は、體重に比例して一定して、氣候の如何には殆ど無關係との事である。例へば、十三貫目の日本人が一日二十四々の蛋白質を要するものなら、十六貫目の露國人は一日約三十々の蛋白質を要することになる。之に反して、脂肪と炭水酸化物との量は全く勞働の多少に關係するもので、多く働く者は多量を要し、少なく働く者は少量で済むといふのである。尤も、寒冷の土地に住む者で、暖衣も着けず、又勞働もしなければ、温暖の地に住む者より稍多くの分量を要することは事實である。然し、この差は極々僅で、勞働の多少から来る差に比すれば、その一小部分にしか過ぎないのである。然し、寒帯と熱帯とでの勞働には下の如き差がある、即ち寒帯で勞働すれば、之が爲に生ずる體温は四圍の寒空氣に觸れて、速に發散し去るのであるから、随つて勞働も長く繼續することが出来るが、熱帯では、勞働から生ずる温は、四圍の空氣が温い爲に、容易に發散しないのである。随つて、身體の疲勞を來すこと速で、寒帯に於けるよりは一層頻繁に、休息するの必要がある。その結果、一方で例

へば十時間の労働が出来たものなら、他方では例へば七時間しか出来ないことになる。それで、温を生ずるに要する炭水酸化物と脂肪とも稍少量で済むことになる。しかし、此の分量の差も大したものではないのである。

北極地方に住むエスキモー人の如きは、寒氣を防ぐ爲に、多量の脂肪を食ふといふことが地理書などに見えて居る。成る程彼等が温帯の人より一層多量の脂肪を食ふことは事實である。しかし、是は其の土地に穀物の如き澱粉性食物が缺乏して居るから、自然多量の動物性食物を取らざるを得ないやうになるからで、特に之を好んで取る譯ではない。但し脂肪の蛋白質や炭水酸化物に比して、約二倍の生温力を有つて居ることは事實である。

第三章 文明に因る人類の分類

第一節 文明の高低

数多い民族中には、今日既に高等の文明に達したのもあれば、又中位の文明に達したのもある。又漸く文明の初階級に在るものもある。因て此の三階級の文

明を呈する民族を天然民族、半開民族、開明民族と稱するのである。天然民族とは従来未開人と稱したもので、半開民族とは本野蠻人と稱したものであるが、此等の名稱は今では不適當として餘り用ゐられないことになつたのである。

抑、文明とは何であるかと云ふに、人類が自家の経験に由て、獸類以上に得た總ての獲物財産で、且長く子孫に傳ふべきものを云ふのである。此の獲物財産には、有形のものもあれば、無形のものもある。有形の財産は先身體の健康を維持すべきもので、所謂衣食住である。衣食住を得るには一定の道具が必要であるばかりでなく、又附近若くは遠方の地と物資の交換を要するのである。是に依て、交通といふものが始まるのである。蓋し人類は其の文明の度の極めて低い間は、獸類と一般全く四圍の天然の附與する物に依て、生活するのであるが、有形的即ち物質的文明が進むに随つてそれだけ、天然の産物に依る必要が減じて、之と同時に又愈遠隔の地から物資を仰いで、之を使用することになる。

一民族中、自家の土地で出来るものばかりで満足せず、更に外國の産物や製造品をも取寄せる者が出来て、而も其の者が富豪有力者の如き極めて、少數の者ばかりで

なく、その大多数である場合には、その民族は物質的文明に於て大に進歩發達したものと見て差支ないのである。

無形の財産とは倫理、法律、技藝、學術、宗教等の類で、是も進めば進むほど、人の見地が廣くなる。即ち初めは自家の生れた郷里附近のみを其普及範圍と見做するのであるが、次第に之を一國、一洲、終には民族人種の異同を問はず、世界全體に擴張することになるのである。蓋し、無形的文明の最終の目的は世界の人類を平和に導ひて之に四海兄弟的の樂を得させるに在る。

史冊に徴して明なる如く、地球面上文明の單獨に開けた土地が甚だ少ない所から考へて觀れば、古來、天才に富む民族は極めて罕である。と斷定しなければならぬ。蓋し文明は、其の種類は何たるを問はず、一民族が其の中の少數の才智に富む、誘導者に教育訓練された結果である。若しこゝに一民族があつて、其の中に之を文明に導かんとするものが多いのみならず、欣んで之に應ずるものも亦多數であれば、其の民族は賞揚すべき民族である。他に卓絶して居る民族である。若し又一民族中に、斯かる誘導者が不在の場合には、其の民族は良し他から刺激を受けても、大抵

何等の反應をも示さない者である。其の故は、新文明新思想を攝取せしむるには、眞先に其の利便を知らしめねばならず。又之を多數の人に知らしむるには、多くは誘導者の力を藉らねばならぬからである。時によつては此の誘導の任務を外國人が採ることがある。商人や傳道師の類は其任務者である。然るに、現下交通の便が大に開けて、此の誘導の任務に當るべき者が全世界に行き渡つて居るに拘らず、尙文明の度の低い民族の少なくないのは、蓋し一部は此の任務者が彼等を氣長く徐に教訓することをせずして、反つて彼等を搾り取る策を講ずることのみ、汲々たる爲で、折角現れんとする文明の萌芽も、之が爲に、枯涸せざる可らざる運命に陥るからであらう。此の外人に接觸するの便否は大に其の住んで居る場所の地學的位置に關するものである。

尙又多數の人を文明に導くには、之を紀律正しき勞働に馴らさなければならぬ。生來懶惰の民族は、如何に之を文明に導かんとしても、其の勞は多く徒勞に歸するのである。蓋し高等の嗜好心は大抵勞働に由て得べきもので、勞働しなければ、亦之を知るの機會もないのである。文明の度の低い民族は、勞して物を得んよりは

勞せずして物を得ざるに如かずといふ考へを有つて居るのであるから、一時博く行はれた奴隸制度も、そのみで考へれば悪いものに相違ないが、多數の民族を、文明に導く一手段としては、復缺くべからざるものと言はねばならぬ。

儲文明の基礎たる有形無形の財産の進歩を計るものは分業である。分業が行はれなければ、これが改良進歩は、望むべからざることである。又文明の進歩を促す地學上の條件は、人類の一個所に集合することである。即ち住地の人口の稠密となることである。狩獵や牧畜を營む民族の非常に廣い土地に散亂して住むのと、農工業を事として居る民族の多數狭い面積の土地に集合して住んで居るのを見れば、則ち文明の度の高低によつて、如何に其の集合の度に、差があるかを知ることができる。従來の經驗によれば、高等の文明に達するには、土着することが必要である。固より、土着民族は古來皆悉く時代相當の、高等文明に達したといふ譯ではないが、しかし、反對に土着しない所謂流民で、昔から半開以上に、昇つた例は一本ないのである。尤も、土着といふことにも種々の程度階級がないでもない。一民族の文明の歴史に徴するに、その文明が進めば進む程、其の住地との關係が密にな

つて、終には出來得る限り其の地を利用せんとすることに努めて居る。例へば、土地を耕すばかりでなく、道路を開き、橋梁を架け、運河を堀り、港を築く等、種々の設備をなして、土地の利益を計ることに、汲々として居る。斯くなれば、其の地は勿論其の住民の所有に歸して、隣地の人に對しても、亦之が所有を主張する權理が生じて來る。

第二節 生業の種類

吾々人類は生活しなければならぬ。生活するには、働かなければならぬ。此の生活の爲に働くことを生業といふのである。蓋し、分業の度が少なければ少ない程、それだけ、多く人の力が食物を得る方に向けらるゝのである。又全體から云へば、文明の民族中でも、其の大多數が、此の食物を得ることに従事して居る。それで、昔から人類を、食物を得る生業の種類方法によつて、狩獵、牧畜、農業の三民族に分けて、同時に之を文明の三階級としてある。しかし、此の分け方の餘りに簡單で、且模型的なことは、世の中に純粹の肉食者が非常に罕なので明である。即ち、肉食者でも必ず幾分か、の菜食をするものである。それで、狩獵民でも、牧畜民でも、本業の傍亦

少しの農業を営み、又反對に農民中にも、牧畜を兼業して居る者がいくらかもある。因て、此等の民族は其名稱通りに考へると、誤りに陥る處がある。

尙又今日では狩獵民の外に漁業民もあり、又農業にも三階級を區別して、簡易農業、未耜農業並に園業とするのである。簡易農業は農業中の最も簡易手輕なもので、狩獵民や牧畜民の營む農業も亦此の階級に屬するのである。して今その最も盛に行はれて居るのは熱帶地方で、其の方法は、鍬や熊手の如き簡易な道具を以て、土を掘るまで、深く之を下から、覆さないものである。此の方法で栽培するものは多くは、芋類の如き球根植物であるが、場所によつては、稻、粟、玉蜀黍等も作るのである。簡易農業を營む者の中には、土着しない者がある。ブラジル國のポロロと稱する土人の如きは其の一例で、その主生業は狩獵である。それで、物を栽ゆるにしても、成熟の早いものを選ぶのである。

天然民族が營む簡易農業は地面を荒す農業である。即ち肥料を加へて、之を大切に取扱ふことをしないのであるから、地面が忽ち瘠せて來る。瘠せて來れば、直に新規の地面に移るのである。斯かる次第であるから、此の種の農業者は、よし家

畜を飼つて居ても、之を農業に使用しないのである。

未耜農業は謂はゞ正式の農業で、亞帶や溫熱帶の地味の稍瘠せた土地に行はれて、未耜と之を引く動物との力に依る農業である。して其の作物は大抵穀類である。昔し奴隸制度の行はれた時代には、動物の代りに人類を使役したことがあるが、しかし、是は其の後次第に廢れて、今では多く牛馬を使つて居る。

正式の農業が文明の一大進歩を示すものである事は、其の人類を土地と離るべからざる境遇に至らしむるに在る。此の農業は大に勞力を要するのであるから、人類は自然之にその全力を注がなければならぬ。しかし、其の代りに收穫は勿論多いのである。隨つて、割合に狭い土地でも、多數の人を養ふに足るのである。之を地學上の言葉で言へば、正農業は人口の稠密を來す原因となると言ふのである。

穀類は簡易農業の産物の大多數と違つて、長持ちのするもので、少なくとも翌年の收穫時までには持つものである。又穀類は、其の萌芽と發育との時に當ては、地面の濕潤なることを要するもので、それと同時に亦肥料をも要するものである。故に、降雨缺乏の土地では、人為の灌漑をしなければならぬ。肥料と灌漑とを以てする農

業が、正農業中でも一層進歩した者と見做さるる所以は、其勞の一層多い代りに收穫も亦之に準じて多いからである。亞細亞や亞弗利加で、最古の文明の開けた土地は皆大河の貫く平な沃土多い沖積地であるから、人爲の灌漑は一層その生産力を増すのである。且斯かる土地では、河水が膨脹する度毎に其の兩岸の地に氾濫して、此處に土砂を沈澱するのであるから、特に人が肥料を加へずとも、肥料は自然に蒔かれるわけである。

園業は正農業に比すれば、小規模のものではあるが、土地を利用する點に於ては、一層之に優つて居る。随つて、勞力を要することも亦一層大なる代りに、利益も亦随つて大である。道具は犁や動物よりも、寧ろ鐵の如き簡單なもので済むのであるが、其の目的を達するには、灌漑と肥料とが、其の最大要件である。培養植物は青物類と果樹とである。

園業は前の二農業に比すれば、尙一層人口の稠密を來すもので、その好例は東亞及び南亞の諸國である。

第三節 天然民族と其の分布

今では世界に全く開けて居ない民族はないのである。或は、火を出すことを知つて居るとか、或は、簡易な器具や武器の類を作るとか、或は幾分かの美術思想を有つて居るとか、或は又多少の宗教心があるとかして、有形、無形の財産の皆無のものはないのである。之に反して、文明の度の低いものはいくらかもある。之を人類の出現した當時の状態に似て居るものとの考から、天然民族といふのである。

天然民族は、地面を利用して食物を作ることなどは、まだ殆ど之を知らないものである。又現在の事のみ考へて、未來の事は、之を念頭に置かない者であるから、食物の有り餘る事もあれば、又非常に缺乏することもある。又彼等は規律正しき一定の勞働に従事しないものである。生來懶惰で、忍耐力がないから、他の文明の産物を見て、よし之が便利を知ることが出来ても、尙之を自家の用に供しやうともしない。又一體に自家の必要が少ない爲に、自ら文明を進めることも無論できない。分業も僅に男女の間に仕事の區別があるくらいである。蓋し彼等は人類の如何なる者であるとするらない者である。人類が萬物の靈長で、獸類との間には著しい差のある者であることには、少しも氣の附かない者である。

以上は天然民族の一般の性質であるが、生業の側から見れば、彼等にも種々の階級がある。蓋し最劣等の天然民族は一定の居所なきもので、其の數も少くないが、一族中の頭数は甚だ少ないのである。斯る民族を拾集民族と稱へて、地面を耕すことは毛頭なく、家畜も有たず、只徘徊する傍隨所食物を得るのである。して其の食物は蟲の如きもの、草木の果實や根の如きもの、何でも自然に産して偶然見當るものである。時に彼等の中には漁獵をする者もあるが、其の獲物は食物全體の一部分にしか當らないのである。斯かる生活をすることは、屢其の居所を取換へざるを得ないによつて、堅牢な小屋や、見るに足るべき住家は、大抵有たないのである。斯かる民族は多くは地球面の交通の無い個所にのみ住んで居るもので、つまり強敵によつて斯かる場所に追ひ込められたのである。南米の南端にある火の國に住む者南部亞弗利加のブシメン族、深ス刺利亞人、カリフォルニア土人

第六十圖



ンメシブ

敵によつて斯かる場所に追ひ込められたのである。南米の南端にある火の國に住む者南部亞弗利加のブシメン族、深ス刺利亞人、カリフォルニア土人

中の數族等は其の海邊に住む者で、錫蘭島のウエツダ人、非律賓の擬黑人(ネグリト)と稱するバプア人種、亞弗利加内部の矮人種、ブラシル國のポトクダ人等は其の山間に住む者である。

上述の如き最下等の天然民族も漸次發育して、遂に一層高等の階級に達すべき者である。此の高等の階級の者も、生業の種類によれば、數種に分れて、其の第一は狩獵民族である。蓋し民族をして狩獵を業とするに至らしめたのは、外界の状態に相違なく、其の證據には、彼等の住んで居る所は必ず獵獸の多い所である。現今、獵民の最も多いのは北米の土人中である。昔し此の國は大に獵獸に富んで居た爲に、之を獵する住民も、亦此の地に廣く蔓延したのである。然し今日では歐洲人の移住の結果、其の獵域は非常に狭められて居る。それから、北米の北西部の沿岸地や、西伯利亞の河多き地方の河湖には、鮭鱒の類を産すると夥いのであるから、自然住民は淡水漁業を以て、其の生計として居る。又此等の中でも、つと北方に住んで居るものは、寒氣の爲め物産に不足な所から、自然之に刺激せられて、少々は物質的財産を所有して居る。例へば、彼等は家畜として、犬と馴鹿とを飼養して居る。

淡水漁業民より一層進歩したものは、海洋漁業民である。即ちエスキモー人の如

第七十圖



ウエツダ人

の土民は白人と交通を始めた以來、冬は食物を白人の手から得るものが少くないから、之が爲め、少しは其の文明の度が、高まつたかと思ふと、さういふ模様も見えないのである。

きは、非常の膽力を以て海を小舟で乗り廻すまでに進んで居る。北極の周圍で、穀物のできない地方に住む天然民族は、之を極北民族 Hyperboreans と總稱して、其の生業の性質上、夏と冬とに其の住地を變ずることになつて居る。又冬は夜長の時期で、同時に食物缺乏生活困難の時期である。しかし、西伯利亞

現今、輕便主義の農業を兼ねずに、全く獸獵のみで生活して居る天然民族は、その數甚だ少なく、僅に亞弗利加、南米、中央亞米利加等の土民の中に、罕に之を見るのみであつて、その他の者に至つては、皆多少地面を利用して耕作をして居る。斯くなれば、彼等も亦稍堅牢な小屋を建て、同じ土地に長住居もするのであるが、しかし、獵りを本業として居る間は、小群をなすのみで、多數群集して、住むことはないのである。又此の種の天然民は、人口の増加を生活に不利益なものとするのであるから、成るべくその繁殖を抑制して居る。

南洋中に在る數多の小群島では、獵獸が乏しい代りに、沿海が水族に富むで居る。それで、住民は、獵民ではなく、海洋漁業を營んで居る。

天然民族も、菜食を主とするやうになると、努めて簡易農業を營むものである。多數相集つて、共同の土地を耕すのである。斯くなれば、勞力が必要になるから、人口の増加は彼等の歡迎する所である。蓋し狩獵民であれば、戰をする場合には、成るべく敵の勦滅に努めて、自家の獵場を擴めんとするのであるが、農民であれば、反つて敵を生擒して勞力に使役せんことを工夫するのである。蓋し奴隸なるものは農

業には、重資でも、獵りの手助にはならぬものである。

如何に農業が盛であつても、其の農業が、簡易輕便のものである以上は、民族をして永く同一の地に止まらしむることができぬのである。何故なれば、此の種の農業は前にも述べた通り地面の生産力を荒して、之が恢復を圖らないものであるからである。それで、斯かる農民は一個所がいけなくなれば、他の個所に移つるのであつて、移つた跡には、何等永久的の遺跡を止めないのである。彼等が無史民族と稱するものも蓋し之が爲である。時に彼等は附近の數族を併せて、大に其の權力を振ふこともあるが、しかし、元來彼等の政治的團結は微弱であるから、其の全盛も僅の間である。其内、他の族が起つて更に復權威を振ふのである。斯くの如く、その離合は自在である。東部亞弗利加の草原地では、簡易農民中に牧畜者も混じて居て、その牧民中には貧富の別も明に立つては居るが、其の家畜を殖す法は、正式でないのである。人の物を盜むのである。南米のパンパス平原に棲む牧民も亦同様である。故に彼等はまだ半開以下の状態に在る。

上來述べたやうな天然民族は、昔し白人の蔓延し始めた時代前に在ては、世界の住

居に適する面積の半分以上を占めて居たのであるが、米國では、既に大に其の區域を狭められて、西伯利亞、濠斯刺利亞、南部亞弗利加等でも、亦大いに其の住地を奪れつゝある。天然民族の口數を知ることには甚だ難いのであるが、大體の見積りによれば、一億三四千萬、即ち世界の總人口の約十二分の一ぐらいのことである。

第四節 天然民族の滅亡

天然民族が、世界を通じて次第に滅亡しつゝあることは、著明なる事實である。昔し我が國の全部に住んで居たアイヌ人が、今僅に二萬に減じて居ることは、人の皆知る所であるが、布哇の土民も、最近七十年間に、十三萬から三萬に減じ、ニウジランドの土民マオリ人も、最近五十年間に五萬六千から四萬に減じ、タスマニヤ島の土人も、一百年前に五千を算したが、明治十年に至つて全然滅亡し、其の他亞弗利加のブシメン族や、ホツテントット族、米國の印度人、北極周圍のエキスモー人、カムチャツカ半島の土民等、何れも文明民と接觸以來大にその數を減じて居る。

滅亡の原因は種々あつて、又民族によつて夫々違つて居るのであるが、然し全體から云ふと、二類に總括することが出来る。一類は民族自身の罪に歸すべきもので、

第 十 八 圖



ホツトツト人

一類は文明民と自稱する者と接觸しての悪結果である。

民族自家の罪とは、小供を邪馬視して之を殺す風習とか、人肉を嗜む習慣とか、戦争をすれば、必ず敵を應殺せねば止まぬといふやうな慘酷心とか、或は又生人を神祭の犠牲に供する迷信とかいふものの類であるが、是等は第二の文明人に接しての害に比すれば、遙に小さいのである。文明人と接觸しての害は先づ傳染病(痘瘡、麻疹、梅毒の類)で、之が爲に倒れた天然民族の数は、非常なものである。次ぎは酒である。酒は文明民中でも貴重な人命を奪ふ一因であるから、無教育無衛生心で、節量といふことを知らない、天然民に取つては激烈なる毒藥に均しいものである。それから又米國發見の後に於て、白人は久しく土人根絶の戦をしたことがある。此の種の戦は、多少南洋の土人に對しても亦行はれたことがある。

近來に至つては、博愛心の勃興と、經濟上の必要とに迫られて、天然民族の保護が行はるるやうになつた。我が國にアイヌ人保護の會があるが如くに、西洋各國の政府も、大に此の件に意を注いで居る。即ち丁抹政府は、グリーンランドを外人に封鎖して一時六千人に減じた、エスキモー人を今では一萬二千弱に繁殖させて居る。又明治三十四年には、約四萬まで減じて居つた、ニウジールランドのマオリ人も、今は約四萬八千に増して居る。亞弗利加の内地では、土人の増殖を計らなければ、勞力の缺乏を來たして、經濟上白人に大打撃を加ふることになる。これは前にも述べた通り、風土の加減で白人自ら勞働の任に當る能はざるに因るのである。斯かる次第であるから、天然民族中には、最早救ふあたはざるものもあらうが、又保護の結果、再び昔の盛況に立ち戻るものもないとも言へまい。兎に角、人道上彼等の滅亡を坐視する譯には行かぬのである。

第五節 文明の財産の分布

生物學上から言ふと、現今全く相隔離して居る、二區域に、同種の動植物を産する場合には、其の區域は元相接續して居たものと見るのであるが、同じやうな事が人類

の文明の財産の分布の上にもあるのである。例へば、道具、武器、衣類、裝飾品等の如き有形物若くは風俗習慣、昔話等の如き無形物で、同じやうな物が今日非常に相離れて住んで居る民族中に在ることがある。此の場合には、其の物は雙方の民族が各自單獨に發明したものであるか、又はそうではなく、或る方法で、一方から他方に傳つて行つたものであるかといふ問題が起る。乃ち之を單獨發明とすれば、人類は、皆同じ考へを有つて居るもので、同じ條件の必要に迫らるれば、自然同じ様なものを作り出すものであるといふ前提を置くことになる。さうすると、今日大に相離れて居る民族中に見る種々の異財産も、元は同じであつたのが、其の後、次第に變化して違つて來たのであるといふことになる。成る程、或る物はさうであるかも知れぬ、しかし、實際の經驗によると、同じ條件の必要も、同じ外界の状態も、必ずしも同じ考を起さしむると限つたものでないのであるから、同形の器物や同一の習慣、口碑の如きものを説明するには、矢張生物學で、用ゆる地理的分布の説明法によるの外、別に良策もないと思はる。それは外でもない。即ち一方から他方に傳はつたといふのである。爰に一例を舉げて見れば、アルプス山中の木造家屋は屋根を

板で葺いてあつて、其の上には、石を乗せてあること、恰も我が國の田舎の柿葺屋根（こけりかぶ）のやうである。是は無論兩方とも單獨發明で、一方から他方へ傳はつたものとは考へられないのである。然るに、天文學上の動物園の十二宮と稱する星座の名稱は、不思議にも太古埃及で用ゐたのと、昔から支那に傳はつたのと殆ど相符合して居る。これは、決して偶然の符合とは言へないから、其の出所は一であるといふの外ない。

第六節 文明の巢窟と其の範圍

前にも述べた通り、文明の進歩を促すものは労働である。抵抗物に打勝つことである。天興の物産を其の儘取るとは労働とは言へないのである。成る程、人類初生の地は、最少の労働を以て、生活し得る熱帯地方でなくてはならぬと察せらるるが、文明の初めて開けた巢窟は、熱帯外の地でなくてはならぬ。人類が労働によつて、自家の食物を得るべく餘義なくされた所でなくてはならぬ。換言すれば、一年中に季節が變化して、植物性食物の出來る時と、出來ない時と、互に相交代する所でなくてはならぬ。亦、實際に於ても、舊世界の最古の文明の開けた、四中心、四巢窟

と稱する土地は亞熱帯に屬する細長い區域で、又地味膏腴の沖積地に位して、勞力次第で、多量の穀物も出來、亦多數の人口をも容るるに足るの所である。その四中心とは左の如きものである。

(一)支那の北部 黄河と渭水との中流地には、既に最古の時代に於て、西部亞細亞と確に立證すべき接觸なしに、一種の文明が開けて、その文明はその後、次第に南東に向かつて擴つたのみならず、又朝鮮を経て我が國にも傳はつて來たのである。此の東亞文明區域に於ける農業は、最古の時代から、犁と牛とを以て行ふたもので、其の西部亞細亞に行はれたものと少しも違はないのは、吾々の最も注意すべき點である。

(二)ヒマラヤ山下のバンジャブの地と北部印度 此地の文明は、多少西部亞細亞の刺撃を受けたものらしく、その蔓延區域は、全印度半島と、後印度并にスマトラ、爪哇等の大島で、後印度に於ては、東亞の文明と相接觸するに至つた。

(三)メソポタミヤの平野 是の地の文明が、所謂西部亞細亞の文明で、蓋し他の三地のものに比べて最も古い者である。して之が創始者は、アルメニヤから南下した、

セミチック種と、印度日耳曼種の太古の波斯人とである。

(四)埃及 此の地の文明は西部亞細亞の文明に類したもので、之を開いたものはハミチック種である。してその發育は、全く沃壤に富む、ナイル河の沖積地に歸すべきである。

西部亞細亞の文明區域は、一部は亞刺比亞の南部と、小亞細亞とに擴り、一部は初めはセミチック種のフイニシヤ人により、後には、印度日耳曼種の希臘、羅馬人等によつて、地中海沿岸の地に蔓延したのであるが、其の後サラセン人は又再び、之にセミチック種の文明を蒔いたのである。その際之に浴した、重なる部分は、北部亞弗利加で、其の餘波は、飛んでスーダンの北部に住む黒人界に及んだのである。その後此の文明は次第に北進して、遂にその中心は歐洲の中央及び西部に遷り、又殖民地の建設と共に全世界に擴つたのである。

右四大中心の外、新世界にも文明の開けた、二中心があつた、一は黒其哥の高原で、一は、秘露ピルの山間である、兩地とも、數理上の熱帯ではあるが、氣候は冷涼乾燥で、低地の熱帯とは、全くその趣を異にする所である、此の文明は、高原山間の幅狭く、且海濱と

の連絡交通の不便な所に開けたものであつたから、一種特別の發育を呈して、其の白人に押し潰された頃には、未だ完全の發育の度に達して居なかつたものである。尙、此の外に、諸處に單獨に發育した、小中心はあつたのであらうが、此處では一々之を詮索する必要もあるまい。

第七節 半開の文明と全開の文明

半開の文明とは、亞細亞と、北部亞弗利加との大部分に住む民族の文明を謂ふので、此の文明が、或る方面に於ては、可なり高等の域に達して居るのは疑もないことである。然し此の文明民の眼界を見るに、歐米の文明民のそれに比して、大に偏狭な所がある。即ち、彼等は自家の文明を最上のものと自覺する結果、之を隣國人に押し付けやうとする。中には武力に訴へてまでも、之を他に誣んとする者がある。昔の秘露人、昔のサラセン人、今の回教徒等は、其の例で、中古時代の基督教徒も亦之に類した動作を取つたのである。

最高級の文明に達した、所謂全開民族となれば、其の眼界が擴大して、世界の人類を一團體と見るのである。それで、其の行爲は一視同仁的である。世界的である。

宗教家は博く人類を正道に導んが爲に、何れの方面にも傳導師を派出して居る。學者は學術技藝を研究して、世界の人類の幸福を計んとして居る。因つて此の種の文明民には、仁義民族の名まで與へられたのである。蓋し往古隆盛を極めた諸民族中で、此の名稱を附すべき價値あるものは、獨り希臘人で、その文明の度は意外に高く、歐洲人が此の希臘人の文明程度にまで達したのは極めて近來の事である。

第八節 遊牧民と其の分布

水草を逐ふて遊牧する民族は、天然民族中にもあれば、亦半開民族中にも在るが、其の住んで居る土地は、草生地で、其の飼養する動物は種々の有蹄類である。抑々農業と牧畜とは、何れが先きに開けたものであるかに就ては、學者の説も一定しないのであるから、先此の二業は、同一族中、早く分れたものとすれば、則ち何れも主として男子の業には違ひないが、牧畜業の耕地業より労働を要することの、遙に少ないことは明である。蓋し、牧畜民は概して懶惰である。彼等の業は、獵民のそれに比すれば、遙に容易である。生活難の憂が少ないのである。故に、彼等は多く穩順で、氣樂で、群居して、且賓客接待の美風を有つて居る。

牧畜民の飼養する家畜は天然自然に増殖するもので、之が爲に特に、手の掛かるやうなことはない。して其の種類は先づ羊と山羊で、山羊は多く乳獸として養ひ、羊は肉、脂肪并に毛を取る爲に飼ふものである。牛を盛に飼ふのは重に亞弗利加の東部と南部との牧畜民で、馴鹿を養ふのは、亞細亞北部の牧畜民である。

遊牧民中で、一種特別の部類を形るものは、農業に適當な乾燥のステップ Steppe に住むものである。斯の種の土地は廣漠たる平原であるから、之を縦横するには、交通機關が必要である。それで彼等は交通用として馬、驢、駱駝の如きものも共に飼うのである。蓋し駱駝の他の動物に比して、遂に重寶なのはその極めて粗悪の草で満足するので、糧食携帯の必要がないからである。

遊牧民は一區域の土地を占領すれば、則ち數多の小群に分離する。これは土地が水に乏しいからである。則ち夫々水の在る個處に分れて家畜を牧せねばならぬ。それから牧場にする土地は、彼等の共有物である。各自所有權を争ふやうなことはないのである。彼等は食物を貯蓄することをせず、家畜が一個所の草を喰ひ盡せば、直に他の土地に移るのである。即ち一定の區域内を四季によつて、順番に

移動するのである。此の移動の場合には、必ず總ての財産を携帯するのである。随つて多くは携帯し易い天幕を以てその家として居る。

遊牧民中でも、全然乳と肉とで生活するものは極めて罕である。彼等は肉食の外、多少菜食もするのである。夫で時に少しの簡易農業を營む者もないでもないが、しかし、多くは其の家畜から製造する産物を以て、隣地の農民からその農産物を交換的に得て居るのである。廣漠たるステップや、沙漠地方では、彼等は農産物を得る代償として、運送業を營むで居る。随つて、最古の時代から内陸交通の一機關となつて居る。

遊牧民には、穏順な性質のものと、粗暴な性質のものがあるが、是れは多く其の飼養する家畜の種類によるやうである。馬や駱駝の類を飼ふものは、其の速力を利用して、之に乗つて争闘、掠奪をする傾きがある。それで其の氣質が大抵殺伐である。アラビヤのベズーイン人の如きは、互に牧場の奪ひ合ひをしたり、又は近隣の農民を襲ふて、切り取り強盜をして居る。中古世界を震駭せしめた蒙古人も、亦此の類である。回教主マホメットの成功したのも、斯かる民族を率ひたからである。

米國土人の多数が殺伐であるのも、其の飼養動物が馬といふ足早の動物であるからである。

以上に反して、馴鹿を養ふ西伯利亞のタングース人や北歐のラブランド人、羊群を飼ふ西亞のキルギース人等は、その家畜の感化を受けてか、甚だ柔和な民族である。現今、遊牧民の蔓延は既に其の絶頂を越えて、其の分布區域は次第に農民に蠶食されつゝあるのみならず、又牧民其の者の中にも、土着民族に變化しつゝあるものがある。其の好例は歐洲の南東部と、北米の西部との土民で、南露の如きは昔しシシヤ人の遊牧地であつたが、今は此民族も大抵土着民となつて、牧地は農作物の地と化し去つたのである。

遊牧民の口數は、目下二千萬より多くはあるまい。且其の區域も陸地の總面積の、六分の一乃至五分の一ぐらゐかと思はる。

第九節 文明民族の經濟の階級

世の中の未だ開けない初めに於ては、人は皆各其の必要品を自製したものである。即ち生活に入用な家屋や衣服から、日々其の使用する諸道具まで、皆盡く他人の手

を借らずに作つたものである。故に物貨の運送は極々狭い區域内に限られて、今日吾々が文明世界に見る、貨物交通と稱する様な、大袈裟なものはなかつたのである。随つて、斯かる時代の經濟は、一家の外に出ない、所謂一家經濟であつたのである。昔の希臘人や羅馬人に至つては、奴隸を使役して、有らゆる物品を作らしたのであるから、盛な分業まで始まつて、その一家經濟も思ひの外、高い度まで進歩したのであるが、然し、その物品は一家内、一家族の需用を充たすに止まつて、それ以外には出なかつたのである。

人が自家で製作することの出來ない物品を、需用するやうに進歩すれば、則ち交易といふものが始まる。交易をするには、之に充つべき物品は自ら需用するより、餘分に作らなければならぬ。又附近に便利な交易の場所もなくはならぬ。農を業とするものゝ交易場は、自然農産物を需用する、工を業とする者の住む所である。此の處は市と稱して、地方の市街地は多く此の市から發育したものである。農と工との間に商が這入つて、品物の取次ぎをするやうになつたのは、是は後世の事であつて、最初の狀態ではないのである。

今日では、交通の便も大に開けて、多少の變化も生じて居やうが、しかしそれでも、尙地方の市街地は、其の周圍の土地と共に、一の經濟區域を形造つて居る。斯かる市街地の繁昌の多少は、全く此の區域の大小によるものである。即ち區域が大きくて、人口が多く、且産物も多ければ、それだけ此の市街地に集中する物資も多い譯であるから、それだけその市街地も繁昌するのである。

斯かる市街地經濟も、交通が開けるに連れて次第に擴張して、遂に國家經濟となるのである。之と同時に、又或る種の工業は、土地的となるのである。即ち或る土地に限つて勃興するのである。殊に近年の如く、石炭と鐵とが盛に採掘せらるる時代に、なつてからは、此の土地的工業が、大に殖へて來たのである。蓋し十六世紀以來、各文明國は出來得る限り、土地の狀態と、地理的位置とを利用して、自國の經濟の發展を圖つて居る。例へば、道路を布設し、富源を開發し、新事業を起し、隣國との通商貿易を開いて、有無相通じ、殖民地を設けて、自國の經濟區域を擴張する等、種々の經營を企つるも、畢竟するに、自國民の物質的幸福を増進せしめんとする一種の經濟政策に外ならぬのである。

今の文明國の多數は、既に經濟法の最高級ともいふべき世界經濟に達して居る。乃ち文明國の中には、隣國は言ふまでもなく、非常に遠い國の産物にまで依頼して、生活して居るものが少なくないのである。例へば、英國を始め、其の他の工業國が遠い外國から輸入する食料品によつて生活して居るやうなものである。斯かる狀態になれば、各國間の關係は甚だ密になつて、一國の盛衰は忽ち他國にまで影響するようになる。故に今の經濟は世界全體に關するものである。して此の狀態を喚起したものは何であるかと云ふに、それは交通機關の發達である。之が爲に交通も今は世界交通で、往時のやうに狹小の一區域に限られたものではないのである。

第四章 國家(政治地學)

第一節 地球面の占領

人類は經濟上發育すればするほど、それだけ土地を多く利用して、是との關係が密になるのである。因つて文明が進めば進むほど、それだけ土地を我が物にしたい

といふ念が強くなる。社會の初めに於ては、人が何れの地に住むとしても、それは各自の自由であつたのである。誰も咎める者はなかつたのである。言ひ換れば、土地は何人の所有でもなかつたのである。然るに人類が増殖するに連れ、その必要とする土地は、宅地にせよ、又獵場や牧場にせよ、次第に擴張するのであるから、終に互に相接觸するに至るのである。斯かる場合に一方から、他方に侵入すれば、則ちそれが争ひの種となるのである。それで近所合壁一族皆互に相擧つて、自家の繩張内を侵入者に對して防禦することになる。斯かる事態は、最下等の天然民族中にも見る所で、是れが即ち地球面の一定の區域の所有權を主張する、國家的組織の起源である。然し完全の國家組織は、獨り高等文明民族中にのみ見るもので、其の目的は單に多人數を團結せしめて、外から來る敵を防禦するばかりでなく、内では一同に永久的幸福を附與せんとするにあるものである。昔しアリストートルは、國家は元來群住の結果で、其の目的は生活をして、幸福ならしむるに在ると言つたことがある。

昔は世界に一定の主權者のない土地が澤山あつたが、その土地は其の後次第に減

少して、今では主權者のない土地は殆ど皆無となつたのである。目下高等の經濟狀態に發育した諸國は、各出來得るだけの土地を獲得して將來に於ける、自國民の膨脹に備へんとして居るのであるから、その結果、昔し其の數の多かつた、勢力薄弱の獨立の民族國家は、次第に勢力強大のものに併呑されつゝあるのである。蓋し斯かる傾向は、各國內の地主の中にも亦見る所で、其の結果は小地主減じて、土地は少數の大地主の手に歸することになる。

目下世界に割居して居る獨立國の數は、僅に五十有餘で、其の治下に在る民衆は十六億である。此五十有餘の中で、歐羅巴と米洲とに、各二十づゝあるから、世界の他の部分には、僅々十餘國しかない勘定になる。然るに米洲の諸國は、極々僅の國を取り除くれば、他は皆歐羅巴人の建設したものであるから、政治上から謂へば、世界の大部分は、既に歐羅巴化せられて居るのである。現今白人が事實上若くは名義上其の主權を行ふ土地は、面積約七百十四萬方里陸地の約七割四分で、その人口は少くも十一億(總人口の六割九分)に上つて居る。尙又昔し大國であつて後世、次第に衰微した波斯、阿富汗、土耳其、暹羅、摩羅哥等の如きは、獨立國とは云へ、今は白人の

壓迫を受けて、殆んど頻死の境遇に在る。それから支那でも、其國土と人口とこそ立派な強國の資格があるが、永く之を持続するや否やは、今暫くその經過を見なければ、斷言が出来ぬ。それで今日白人以外の人種で、之が跋扈跳梁に拮抗せんとするものは、獨り我が日本のみである。蓋し日本民族の勃興は亞細亞諸國民に、大刺撃を與へて、之か爲に中には將に奮起せんとしつゝある國もある。しかし、其の果して往時の隆盛に復歸するや否やは、尙疑問である。

第二節 政體の種類

如何なる種類の國家に於ても、實際國を支配するものは、少數の者である、然るに此少數支配者の權力には、種々の階級があつて、若し其の權力が一名の元首に歸するときは、その政體を君政と云つて、更に專政、獨裁政、憲政の三細別がある、專政國に於ては、人民は元主に對して全く、無權力であるから、元首は我が儘の仕放題である。獨裁國に於ても、立法權は獨り元首に在るが、其の法には、元首自身も亦服従しなればならぬ。露國は最近の時代まで、此の獨裁國の好例であつた。それから、憲政國に於ては、立法權は元首と人民の代表者との兩者に在るのである。

共和政では君政と正反對で、人民全體が政權を有するものと見做さるのであるが、しかし、之が執行は選舉によつて定められた少數の者に托さるのである。此の共和政にも二種あつて、一は貴族政と云ひ、一は民政といふのである。貴族政とは被選人が少數の貴族に限られて居るもので、昔の羅馬と、中古の伊太利亞とに行はれたのである。然るに民政に於ては、被選人は、人民全體から出るのである。今の合衆國、佛國、瑞士等は其の例である。

地學上から観るときは、政體の種類よりも、寧ろ國家が單位國であるが、聯合國であるかといふことが肝要である。單位國とは中央政府の權力が、その國の隅々まで一樣に行き渡る國で、聯合國とは、さうでないものである。聯合國は同等の権理ある、數多の獨立國が互に相集つて出來て居るのであるから、或る事柄に關する権理のみ、共同の聯合政府に讓つて、其の他のものに至ては皆之を各自の手中に收めて、一切聯合政府の干渉を受けないのである。聯合政府に或る権理を讓るの目的は、無論共同の安寧秩序を保ち、幸福を増す爲で、その方法は一にして足らずであらうが、兵制を一にするとか、貨幣を一にするとか、郵政を一にするとか、いふやうな事

は、即ちその數例である。蓋し、人民の幸福の多少は、單位國であると、聯合國であるとを問はず、中央の政權と、國家を成す、州、縣、國等の如き地方の獨立權との關係の多少に在るのである。

聯合國の各部分は、其の組織の性質上、單位國の州縣よりは遙に獨立である。民族によりては、聯合制を設けることが割合に容易である。例へば、獨逸、瑞士、合衆國等の諸民族の如しである。近來、經濟上の發達に連れて、米國の諸國は、單位制から聯合制に移り行きつゝある。即ち墨西哥やブラジルの如きは既に聯合制を取つた國である。

從來、聯合制を設けた諸國は、其の境域相接して、同一人種に屬して、且同一の經濟状態を有つて居たものである。遠方に在る殖民地の如きは、人種は同じでも、經濟状態が違つて居るから、本國と同一の制度を取る譯には行かぬのである、それで亞米利加大陸に在つた、歐洲の諸殖民地は、その經濟が發達すると共に殆ど皆獨立して仕舞つた。今の加奈陀や濠洲が英國の殖民地でありながら、未だ獨立しないのは、英國が從來の經驗に鑑みて、之に殆ど獨立同様の自由を與へて居るからである。

一國が聯合國の仲間入をすれば、それと同時に公法上獨立的國家の資格を失ふものと言はねばならぬ。それで此の公法上の獨立のみを土臺とすれば、現下歐羅巴には、二十四の獨立國があることになる。しかし、此の中には俗に豆粒國豆粒國と稱ふるモナコやリヒテンシュタインの如きものまで數へてある。地學上から謂へば、此等は露、獨、佛等の如き、獨立國と同等に見るべきものではないのである。何故なれば、その面積が餘り小に過ぎ、且其の内容が獨立國の資格を備へて居ないからである。獨立國は宛ら水に取り巻れた陸地の如きものである。其の大なるものは、大陸に比すべく、小なるものは島に比すべきである。然し島の中にも、獨立島とて、昔の大陸の收縮から出來て、今の大陸とは、無關係のもの、附屬島とて今の大陸から分離して出來たものがある。此の附屬島は、今こそ大陸と離れて獨立して居るもの、その成立は全く大陸あるに由るものである。モナコ、リヒテンシュタイン、アンドラ、サンマリノの如き、經濟上獨立することの出來ない豆粒國は、即ち此の附屬島に比すべきもので、其の存在は全く之に接する、大國の慈惠心に由るのである。ルクセンブルクの大公爵國は、前の四國に比すれば、稍大で獨逸との關係は獨り關

税の同盟にあるのみであるが、しかし、尙之を他の獨立國と同等の資格あるものは到底見られないのである。

第三節 國家の大小

現時に在ては、國家の勢力は國土の勢力と之に住んで、之を自分のものと極めて居る、人民の勢力とに由るもので、國土の勢力は位置、面積、氣候、地味、地中の寶、交通の便否等に由り、人民の勢力はその口數、文明の度、氣質等に由るものである。

斯くの如く國家の勢力は、種々の元素に因るものであるから、此の勢力の大小は、時代によつて、其の標準を異にせねばならぬ。歴史には世界一統帝國とか、又は大國とかいふやうな名稱を擧げてあるのを見るが、此等は其の時代に、人に知れて居た世界の大きさと、之に住む人口の多少とによつて極まるものである。尙又今日小國又は中國と稱ふるものも、之を交通開けずして、人口稀少の時代から見たならば、或は侮り難い大國であるかも知れぬ。故に國の大小を計る尺度標準は、時代と共に變化すべきものであると言はねばならぬ。

昔の國々の面積に就ては、精密な歴史地圖を一見すれば、大體の見當だけは附くの

であるから、國土の大きさは先知り易いものとしても、差支ないが、人口に至つては、推測するの外仕方がない。然るに此の推測の試みられた國さへまだ極めて罕である。

第四節 世界一統帝國と殖民地帝國

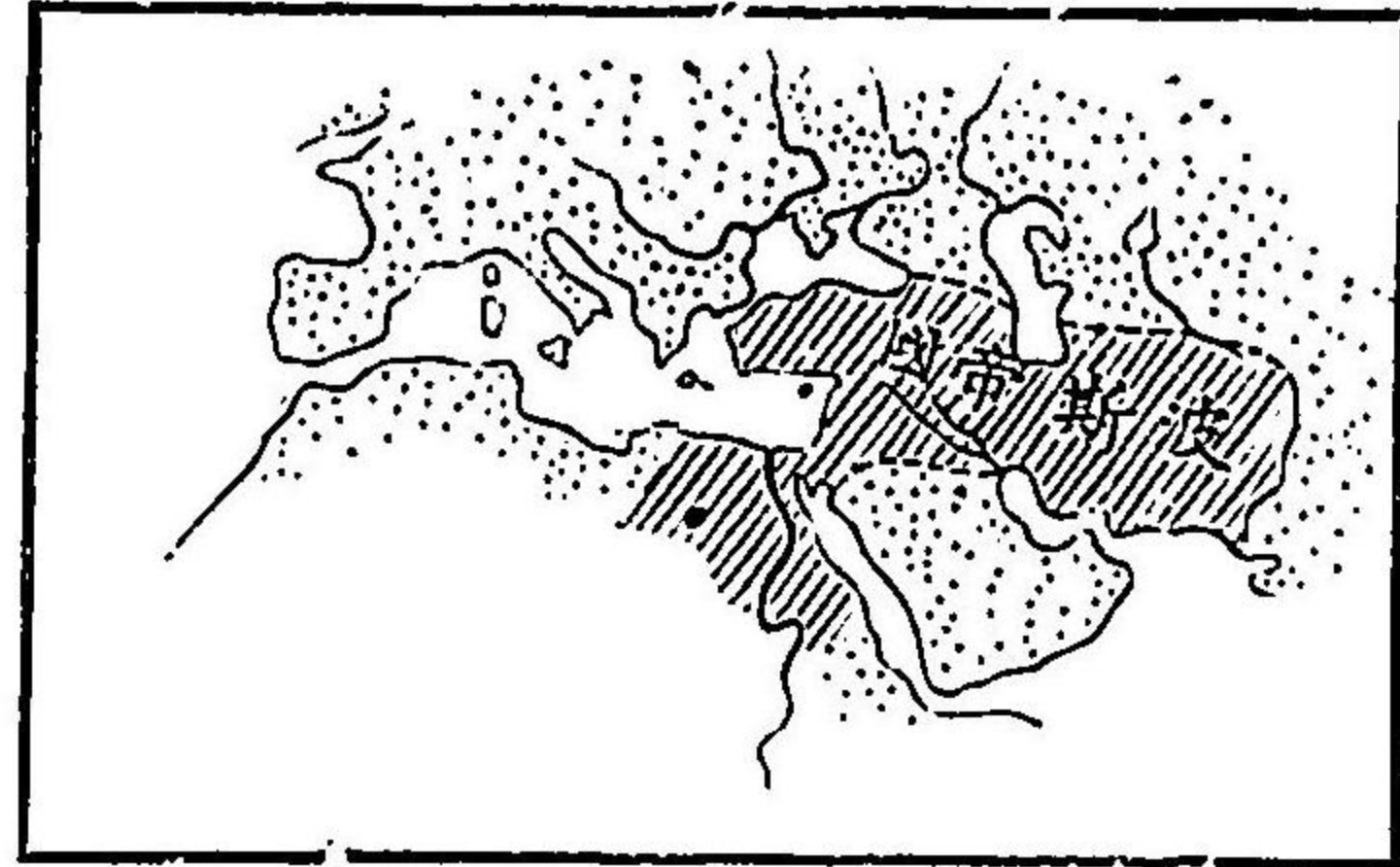
近い過去まで、西洋人が萬國史と稱へたものは、西部亞細亞の文明區域と、歐羅巴の文明區域との歴史であつて、世界の隅々まで行き渡つたものではなかつたのである。又東亞の如きも多くは、度外に置いてあつたものである。隨つて、西洋史に世界一統帝國などいふ字が現はれて居ても、是はその當時知れて居た世界の僅に一部分を統べたもので、名實相反して居るものである。しかしその領域の廣さと實力とは、他の未だ征服されない、國や土地に比べると、遙に優つて居たものである。故に之に匹敵すべき、第二の政治地域を作ることとは、不可能であつたのである。斯かる意味にての世界一統帝國でも、其の數は甚だ少ないのである。

先最古の一統帝國は、西曆紀元前五百年頃のギリウス、ヒスタスビス王の波斯國であらうが、其の面積は四十五萬方里と見積られて、當時知れて居た世界の六分の一

強を占めて居たのである。蓋し其後に興つたアレキサンダー王の大帝國(約三十萬方里)も又羅馬帝國(同上)も、是程までには大きくなかつたのである。且羅馬の皇帝時代には世界も波斯時代より遙に廣くなつて居たのであるから、羅馬帝國は地中海を其の領域内に入れて勘定しても、尙世界の十二分の一にしか當らなかつたのである。それから十世紀に興つたサラセン帝國と、十三世紀に現はれた蒙古帝國とは、短命ではあつたが、一時其の領域は殆ど七十萬方里に及んだのである。今の支那帝國も、之と殆ど同大で、昔は東亞に於ける一統帝國であつたが、今では其の無氣力を度外視しても、尙一統帝國の資格はないのである。

以上擧げたやうな過去現在の大帝國は何れも、大陸的の性質を帯びて居るものである。大陸的性質とは、帝國の中心地は勿論、其の四圍に在る屬地も皆相接して、一連続の陸塊をなして居るものである。今の露西亞帝國も亦其の屬地たる西伯利亞等と相接して、一塊の國を形つて居る。此の國は、十八世紀中、既に百十萬方里の地域を有して其の後アラル、カスピの低地と、之に接する山地とを合併したので、今は殆ど百五十萬方里に膨脹して、中古時代の一統帝國の二倍大となつて居る。

圖九十第



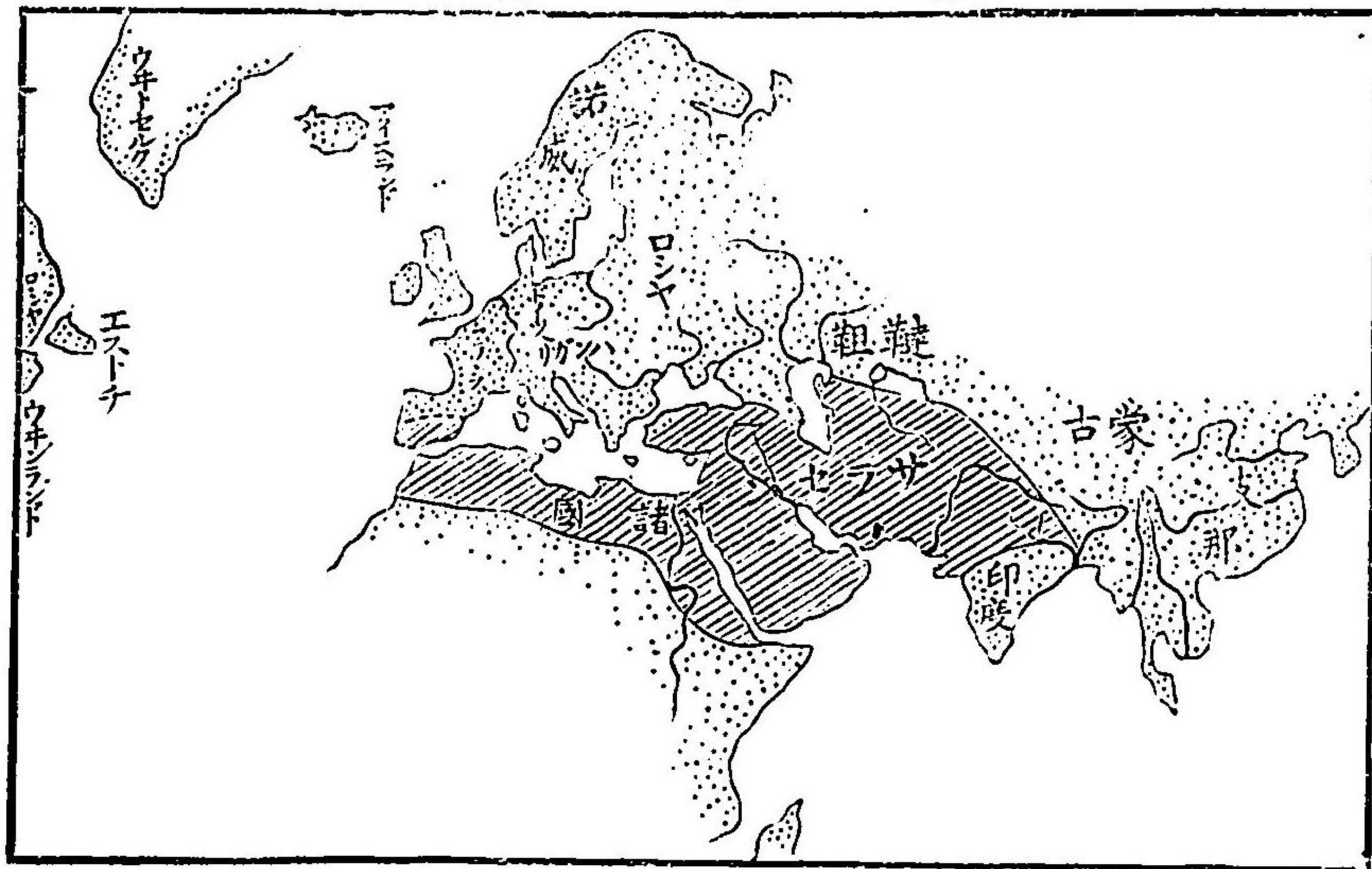
紀元前五百年頃の波斯帝國

圖十二第



紀元三百年頃の羅馬帝國

圖一十二第



紀元一千年頃のサラセン帝國

故に歐亞二大陸の大部分は露と支那との二大帝國に占められて居るやうなものである。

此の大陸的大帝國に對して、殖民地帝國といふものがある。是は米國發見後の產物で、其の過去に於ける最大のもは西班牙で、現在に於ける最大のもは英國である。西班牙は十九世紀の初めまでは南米の半分、中央亞米利加、墨其西哥、今の合衆國の過半等を有して、その面積は七十萬方里餘に及んだのである。之に反して英國の殖民地は米國獨立の際には僅に二十萬方里以内に減じたのであるが、今は再び膨脹して約二百萬方里といふ歐洲大陸に三倍する大きさに及んで、且つ五大陸中に亘つて、人類の住むに適する、陸面の殆ど四分の一を占めて居る。更に昔からの大帝國を列擧すれば左の通りである。

羅馬帝國(紀元三百年頃)

三三〇、〇〇〇方里

波斯帝國(紀元前五百年頃)

四五〇、〇〇〇同

サラセン帝國(十世紀)

七〇〇、〇〇〇同

蒙古帝國(十三世紀)

七〇〇、〇〇〇同

支那帝國(現在)

七〇〇、〇〇〇同

西班牙殖民地帝國(一八一〇年)

七〇〇、〇〇〇同

露西亞帝國(現在)

一五〇〇、〇〇〇同

英吉利殖民地帝國(現在)

二、〇〇〇、〇〇〇同

土地の價值が面積の大小にのみ由るものでないことは、言ふまでもないことである。露西亞帝國には、其の北方に不毛のタンドラがあつて、その南方には、ステツプや沙漠がある。支那帝國にも、其の邊境の地には、不毛の地が澤山ある。英吉利帝國にも、加奈陀の北方の如き、濠洲の内部の如き、宏大なる荒蕪の地がある。昔の波斯、中古のサラセン、蒙古等の諸帝國にも、沙漠やステツプが多かつたのである。夫で、土地の正味の價值から言つたならば、最小の羅馬帝國が最上の位置を占めたものであると思はる。

次に人口となると、過去の大帝國中、一も今の一等國の本國の遙に、上に出たものはなかつたらうかと思はる。オーガスタス帝時代の羅馬帝國の人口は約五千四百萬と見積られたのであるが、波斯、サラセン、蒙古の三帝國でも、亦眞に之が支配を

受けた者は、羅馬帝國の口數以上であつたとは思はれない。又西班牙殖民地帝國も、其の人口は、本國のものを合せても、尙三千萬を越えなかつたと見積られたのである。固より、羅馬時代の五六千萬と、今の五六千萬との間には、其價值に大なる差がある。當時は世界の人口の未だ少ない時代であるから、五千萬乃至六千萬と謂へば、世界の總人口の五分の一から四分の一にも當つたものと見なければならぬ。我が帝國の如きも、最近の調査に據れば、既に羅馬帝國の見積り人口に達して居るが、之を世界の總人口に比ぶる時は、その僅に、三十分の一にしか當らないのである。露西亞帝國は目下一億六千萬の人口を有し、支那はその人口三億五千萬と見積られて居る。然るに、英吉利帝國に在ては、印度の如き人口稠密多數の地を有するが故に、其の總人口は四億二千萬に上つて、世界の總人口の四分の一を占むるのみならず、世界の各人種までも、網羅して居る。然るにも拘らず、之に世界一統帝國の名を與へられないのは、未だ世界の覇權を一手に掌握することが出来なからである。世界一統帝國は嚴密に言へば、之に匹敵すべき第二の帝國の存在を許さないのである。

第五節 一等國(一名大國又は強國)

大國と強國とは近來になつてこそ、同意味のものになつたが、中古時代の如く、傭兵を使つた時代には、必ずしも二者相一致しなかつたのである。當時は、小さな市街共和國でも、政治上、一強國の働きをなした例がある。現今の如く、自國民のみを兵とする時代には、強國となるには、夫だけ多數の人口を有たねばならぬ。又多數の人口を有つには、之を容るべきそれだけ大きい土地を有たねばならぬ。面積の広い大國は、世界一統帝國の存在した時代にも、その數こそ少なけれ、尙あつたに違ひないのである。蓋し、國が大國となれば、其の發育は、既に、その絶頂に達したもので、恰も人が血氣盛んの年齢に達したやうなものである。世界には、既に此の絶頂を通り越して、既に老衰時期に入つた國も少からぬのである。歐洲の西班牙や葡萄牙は、其の好例で、瑞典や阿蘭陀も亦其の例である。但し、前の二國は、自ら衰微して弱くなつたのであるが、後の二國は他の國の勃興で、弱國の列に加はつたのである。偕二十世紀の曉に、世界の競争場裡に於いて、互に相睨み合つて居る大國は九あるが、孰れも、征略若くは殖民政策で、其の領域を擴張せんことに努めて居る。支那は二

十七八年の役の前までは人口最多の強大國として、畏怖されたのであるが、今は反つて老衰國として、人の侮りを受くることになつて居る。然し、同國も近來大に自覺して、切りに富國強兵の道を講じて居るから、成功さへすれば、世界第一の強國となる望がある。

此の九強國は孰れも亞熱帶若くは北半球の中緯度に位して、世界をぐるりと帶狀をなして取り巻いて居る。然し、其の重力の中心は尙歐羅巴に在る、此處には英、佛、獨、埃、伊、露の六國がある。それから新世界には又白人の建設した合衆國がある。それで、白人以外の國で強いのは、僅に東亞の日支兩國である。而も支那は目下の處、望みの少ない國と見なければならぬ。

現在の強國の強國たる所以は、其面積の大きいのは、寧ろその人口の多いのに在る。現に二等國で、その領域の、今の一等國より遙に大なるものがいくらかもある。新開地や、土地の餘り膏腴でない所に起つた國は、自然人口數の割合には、面積が大である。又國の強弱を比較するには、其の本國のみを比較して、領地は如何なる名義の下に在るも、決して之を勘定に入らすべきものでない。其の理由は國は領地あ

るの故を以て、強いのではなく、強いから領地を有つて居るからである。國が領地を得るのは、その經濟狀態が充分に發育して、手を國外に伸しても差支ない程度に達してからである。領地や殖民地は、戰時には、本國を助けるものではなく、反つて足纏ひになるものである。何故なれば、本國はその勢力を削いて之を防禦しなければならぬからである。又此等の地が本國を距ること、遠ければ遠い程、それだけ本國の不利益になるのである。さて本國のみを以て、一等國を比較して見れば、先づ支那を除く物として、その人口は三千萬と一億三千萬との間に在る。それでその差は一億であるが、その領域の面積に至つては、更に一層大きな差を呈して居る。故に一等國を、其の領域の大小によつて、大域一等國と、小域一等國の二部類に分つる必要がある。さうすれば左の如き表となる。

大域一等國

| 國名 | 面積(方里) | 人口(明治四十三年) | 一方里平均人口 |
|---------|---------|------------|---------|
| 一、北米合衆國 | 五二〇、〇〇〇 | 九一萬 | 一七五 |

| | | | |
|---------------------------------------|---------|------|-------|
| 二、歐羅巴露西亞 | 三五〇,〇〇〇 | 一二九〃 | 三六八 |
| 三、支那 | 二六〇,〇〇〇 | 三五〇〃 | 一,三四二 |
| 小域一等國 | | | |
| 四、埃匈國 | 四〇,六〇〇 | 四八〃 | 一,一八二 |
| 五、獨逸 | 三五,一〇〇 | 六五〃 | 一,八二三 |
| 六、佛蘭西 | 三四,九〇〇 | 四〇〃 | 一,二四六 |
| 七、英吉利 | 二〇,四〇〇 | 四六〃 | 二,二五四 |
| 八、日本 <small>(北海道、樺太、羣島、朝鮮を除き)</small> | 一八,七〇〇 | 四六〃 | 二,四五四 |
| 九、伊太利亞 | 一八,六〇〇 | 三四〃 | 一,八一七 |

以上の九個國は其の面積百三十萬方里に及んで、世界の總人口の半數以上を有つて居る。

若し領地を入れて計算することになれば、以上の數字は非常に變化して來る。蓋し目下獨立でない國で、以上の一等國に匹敵すべきものは、英領印度のみである。此の國は三十五萬方里の面積と、三億一千四百萬の民衆を有し、優に一等國の資格

を備へて居るが、將來果して獨立し得べきや否やは、大なる疑問である。

第六節 二等國(一名中國)

二等國は一等國に比すれば、其の數が多いのである。中國と三等國即ち小國との區別は、一定した極まりもないが、先づ經濟上獨立し得る得ないの邊を界とすれば、今日の有様では、人口一百万がざつと二等國の最下限となる。現に、人口一百万以下の國は經濟上他國と、同盟せんとするか、又は附近の大國と聯合せんとするの傾きがある。

二等國は、地學上から謂へば、大陸島の如きもので、元大國から、其の衰へた時代に、分離したものであるか、又は一大國の分裂によるか、又は殖民地の獨立したものである。第一類の例は阿蘭陀、瑞士、葡萄牙等で、第二類の例は、バルカン半島の諸國である。又第三類の例は合衆國、墨西哥、南米諸邦の如きものである。二等國も、其の境域の大小に依つて、大域、中域、小域の三部類に區別することができ。大域二等國の中には、比較的新開の國が多い。又其の一であるブラジルの如きは殆ど大陸のやうな大きさを有つて居る。然し、此等大域二等國の過半は、平均

すれば、人口比較的に稀薄の國で、又殆ど全く歐洲以外に在る。之に反して中域と、小域との二等國は殆ど皆歐洲大陸内に在る。此の中で、中域二等國は人口疎で、重に歐洲の南西部と、南東部に在るが、小域二等國は人口稠密で、盡く歐洲の中部に在る。

左表には公法上獨立の二等國二十九を挙げ、傍ら比較の爲公法上獨立でないものも挙げて參考に供してある。

大域二等國(人口甚た疎)

| 國名 | 面積方里 | 人口(明治四十年) | 一方里平均人口 |
|------------------|---------|-----------|---------|
| 一、ブラジル | 五五〇,〇〇〇 | 一,八〇〇,〇〇〇 | 三三 |
| 加奈陀(ニウファアントランド共) | 五五六,〇〇〇 | 六七〇 | 一二 |
| 濠洲聯邦(ニウジールランド共) | 五三二,〇〇〇 | 五六〇 | 一〇 |
| 二、土耳其帝國(歐亞に跨) | 一二六,〇〇〇 | 二,三四〇 | 一八五 |
| 三、墨北西哥 | 一三〇,〇〇〇 | 一,四〇〇 | 一〇七 |
| 四、波斯 | 一一三,〇〇〇 | 九〇〇 | 七九 |

| | | | |
|------------|---------|-------|-----|
| 五、アルゼンチナ | 一一一,〇〇〇 | 六〇〇 | 五四 |
| 六、ポリビヤ | 八〇,〇〇〇 | 二三〇 | 二八 |
| 七、コロンビヤ | 七八,〇〇〇 | 四七〇 | 六〇 |
| 八、秘露 | 七三,三〇〇 | 四六〇 | 六六 |
| アルゼリヤ及チウニス | 六八,〇〇〇 | 六〇〇 | 八八 |
| 埃及 | 六五,〇〇〇 | 一,一五〇 | 一七七 |
| 九、ベネズエラ | 六一,〇〇〇 | 二七〇 | 四四 |

中域二等國(人口疎)

| | | | |
|------------------------|--------|-----|-----|
| 一〇、暹羅 | 四〇,九〇〇 | 六七〇 | 一六四 |
| 一一、智利(マゼラン(屬地を除く)) | 三八,三〇〇 | 三五〇 | 九一 |
| 一二、亞富汗 | 三六,三〇〇 | 四六〇 | 一二六 |
| 一三、アビシニヤ | 三五,七〇〇 | 八〇〇 | 二二四 |
| 一四、瑞典 | 二九,二〇〇 | 五五〇 | 一八八 |
| 一五、モロッコ(ツアット及び(沙漠を除く)) | 二八,五〇〇 | 九〇〇 | 三一五 |

| | | | |
|---------------------|--------|--------|-------|
| 芬蘭 | 二四、二〇〇 | 二三〇〃 | 九五 |
| 一六、諾威 | 二〇、八〇〇 | 二四〇〃 | 一一五 |
| 一七、エクスアドル | 一八、四〇〇 | 一三〇〃 | 七一 |
| 一八、ネパール | 一〇、〇〇〇 | 三〇〇〃 | 三〇 |
| 中域二等國(人口稍密) | | | |
| 一九、西班牙(カナリヤ群島共) | 三二、八〇〇 | 二、〇〇〇〃 | 六〇九 |
| 小域二等國(人口疎) | | | |
| 二〇、グアテマラ | 七、三〇〇 | 二〇〇〃 | 二七四 |
| 小域二等國(人口稍密) | | | |
| 二一、ローマニヤ | 八、五〇〇 | 六八〇〃 | 八〇〇 |
| 二二、ブルガリヤ | 六、二〇〇 | 四三〇〃 | 六九三 |
| 二三、葡萄牙(アゾールス及マデイラ共) | 五、九〇〇 | 九二〇〃 | 一、五五九 |
| 二四、希臘 | 四、二〇〇 | 二八〇〃 | 六六六 |
| 二五、セルビヤ | 三、一〇〇 | 三〇〇〃 | 九七四 |

小域二等國(人口稠密)

| | | | |
|---------------|--------|------|-------|
| 二六、瑞士 | 二六、六〇〇 | 三六〇〃 | 一、三五三 |
| 二七、丁抹(附屬地を除き) | 二五、二〇〇 | 二七〇〃 | 一、〇七一 |
| 二八、阿蘭陀 | 二一、四〇〇 | 三三〇〃 | 一、五四二 |
| 二九、白耳義 | 一八、九〇〇 | 七七〇〃 | 四、〇七四 |

以上の二十九個國は、面積百六十五萬方里に及んで、人口約一億九千六百万方を容れて居る。因つて、之を九個の一等國に比すれば、面積に於ては、一倍二七であるが、人口に於ては、四分の一弱である。

第七節 三等國(一名小國)

凡國は必ず小國を以て始まるものである。因て、天然民族中には、此の小國が頗る多いのである。蓋し、其の最も小なるものは、亞弗利加人種中の村國である。但し其の大きさは時の酋長の勢力名望に依て消長するもので、酋長が有力者である時は、その國は、大きくなり、然らざる時は、分裂して小さくなるのである。

山間や多島界に於けるが如く、天然の地勢が土地を小區域に明畫する所に於ては、

文明民族中にも、尙昔から持續して居る小國がある。

往古希臘半島中に勃興した諸國は、皆小地域のもので、その面積は平均二百乃至二百六十方里、その人口も、時に甚だ多かつた奴隸を加へて尙三十萬乃至五十萬にしか上らなかつたと思はる。又瑞士聯邦は二十二のカントンと稱する小國から成り立つもので、面積が皆合せて僅に二千六百六十方里であるから、各カントンの平均面積は僅々約百二十方里となつて、人口は平均十六萬となるのである。西班牙の羈伴を脱して出來た中央亞米利加の諸國は、グアテマラを取り除くれば、又皆小國である。然し、地勢の關係上、其の面積は三千二百から七千八百方里の間にあるから、大城の小國とでもいふべきものである。尙小國のある所は、マレイ多島界、カウカサス、アラビヤ、サハラ等の外、その許多相群つて存在する地が二ある。一は、獨逸國內で、一は印度である。兩地の者は共に中古時代からの遺物である。獨逸には目下尙二十あつてその面積は平均百六十方里ぐらいである。印度には二等國相當の十二獨立國の外、尙二百四十より少からざる小國がある。その面積は平均二百六十方里で、人口は平均十二萬である。此等は事實上より寧ろ名義上の獨立國

である。

又罕には、大國の間に介在して、小國を見ることがある。伊太利亞中のサンマリノ、佛蘭西中のモナコ、西班牙中のアンドラ、埃國中のリーヒテンシュタインの如き豆粒國は其例で、その人口は僅々數千に過ぎずして、いつれも昔からの遺物である。其の存在はつまり潰す勞を取るほどの價値なきものであるからである。小國中、一種特別のものは、市街國である。是も中古時代の遺物で、今は獨逸と瑞士の或るカントン中に残つて居るのみである。かゝる國の本は農にあるのではなく、市街地に住む市民にあるのである。市民の營む商工業が、間接に富の本源となつて、兵士をも雇ひ又艦隊をも拵へたのである。市街國は地中海沿岸地にはフィニシヤ人や希臘人時代以來、あつたもので、中古地中海の海上權を握つたベニス、ゼノアの二市も亦此の市街國であつた。

第八節 政治區域

國の生長は他の土地を併するに由るもので、その土地は國に接近したものであることもあれば、又多少之と相離れて居るものであることもある。接近した土地は

大抵戦争で取るものであるが、離れた所謂海外の土地は、戦争で取ることもあれば、又條約に依つて取ることもある。又無所有者の土地なれば直に占領することもある。此の海外の土地の本國との政治上の關係は種々であるが、兎に角、別に區域をなして本國とは多少其の行政を異にして居るものである。斯かる行政區域は亦、本國內にも必要である。何れの國でも、その各部分は多少人情、風俗、經濟、歴史等を異にするものであるから、之に依て、その中にも區域を設くるの必要が起る。その名稱は國によつて異つて居るが、我が國では道、縣などと云つて居る。斯くの如く、行政上區畫された地域を其の中央政府との政治上の關係如何に拘らず、政治區域といふのである。

第九節 地學上の位置と政治上の位置

何れの政治區域にでも、必ず地學上の位置といふものがある。此の位置には三種を區別することが出来る。(一)赤道からの距離、即ち緯度の高低、(二)海からの距離、即ち海邊であるか内陸であるかといふこと、(三)海面上の距離、即ち低地であるか、高地であるかといふことで、此等によつて區域の風土も違へば、又動植物の状態も違ふ。

政治區域の政治上の位置とは、他の政治區域に對しての位置で、殊に之に接して居るものに對しての位置である。是は、國の外交政策に極めて密接の關係を有つて居る。

地學上の位置の中で、海外との交通に至大の關係あるのは海からの距離である。海に接して居る國は海外との交通が便利であるに反して、内陸の國は、此の點に於ては、大に不便である。尤も近來は鐵道が開け、電信電話が設けられたから、幾分か其の不便を減殺したやうなものゝ、それでも尙海の有無は、一國の交通に取つて、非常な違ひである。歴史に徴するに昔から内陸の國は海岸の獲得に苦心するか、左なくは、少なくとも大河の岸に出て、海との連絡を遂げんとに努めて居る。蓋し、露國の其の最好例であることは人の皆知る所である。

現在の獨立國に就て觀る時は、純粹の内陸國は甚だ少ない。即ち二等國以上の國では、歐羅巴の瑞士とセルビア、亞細亞のネパール、亞弗利加のアビシニヤ、南米のボリビヤぐらゐのものである。

海にも種類がある。その萬國交通に差支のないのは大洋や口の廣い江灣である。

四面陸を環らして口の狭いものは、其内でこそ交通自在なれ、外に向かつては交通不便である。露國はバルチック海と、黒海とを控へて居るが、兩ながら内海であるから、尙内陸國同様である。西伯利亞の東邊の海は邊海であるから、内海よりも交通は稍便利であるが、此地方は人口未だ稀少で開けず、それに又冬季結氷の不利益がある。それから北氷洋の沿岸に至つては、全く問題にならぬのである。内陸國と正反對の國は島嶼國（一名海邊國）である。島嶼國は四方に海を繞らして、運動自在である。斯かる極端の海邊國は、一等國中には、日本と英國とあるのみである。

政治上の位置に最も關係の多いのは隣國の數である。此の數が多ければ多い程、それだけ、有事の日に、攻撃點が多い譯である。然し、隣國は皆必ずしも敵である譯でもないから、その向背によつて正面と背面とを區別するのである。正面とは、敵對の尤も強い方面で、背面とは、危險の最も少ない方面である。蓋し、有事の日に當つて外交政策の妙所は國の背面をして毫も患なからしむるに在るのである。國によつては、地學上の位置が既にその背面を、無患にして居る。その好的例は露

國と加奈陀とである。此の兩國は背面に殆ど入り込むべからざる氷海を控へて居る。故に露國の如きは安心して、南方に押し出すことが出来る。半島國である瑞典のチャールズ第十二世が嘗てバルチック海の南岸と東岸とに出て、大に敵を惱ましたのも、亦其の背面が安全であつたからである。

國が他國の間に介在すれば、其の政治上の位置は大に困難となるのである。何故なれば、何れの方面も正面となり得るからである。斯かる不利益の位置に苦んで居るのは獨逸と、埃匈國とである。故に、此の二國は常に相提携するの必要がある。曾て波蘭が滅びたのも、三面に敵國を受けて無背面となつたからである。

政治區域が次第に増大擴張するに至れば、その政治上の位置に變化を來たすと同時に又他の政治區域に對しても、其の影響を及すものである。北米合衆國は元大西洋沿岸に建國したものであるから、その正面は此の方面のみであつたが、次いで其の領域を西方に擴張して、遂に太平洋に出づるに至つて此の方面にも亦正面が、現はれたのである。その影響として日本も其の西方大陸側の正面の外、更に亦太平洋側にも正面を控ゆることになつたのである。尤も大洋を隔てゝの正面は、陸

續きの正面とは大に違ふ所もある。目下合衆國が西岸に正面を作つて、之が爲に大に苦みつゝあるのは、我が邦の如く、一艦隊を以て兩沿岸を防ぐことができないからである。同國が切りに巴那馬運河の開鑿を急ぐのも、蓋し、一は之が爲である。

第十節 國土の生長と國境の形

生存競争の結果、世界の獨立國が次第に其の數を減ずるのは、復止むを得ないことであるが、之と同時に、其の境域の形も亦次第に簡單ならんとするの傾向がある。此の傾向は更に左の三段に細別することができる。

(一)國境の出入を減ずること 國境の出入を少なくして成るべく防禦線を短縮することは、何れの國に取つても大利益のことである。蓋し、軍事上から見れば、國境の理想的形狀は圓であるに違ひない。何故なれば面積の割合に周圍の最も短いのは圓であるからである。しかし、歐亞の如く、舊い歴史を有つて居る國が互に相併立して居る土地では、斯かる理想的の形を得ることは幾と不可能である之に反して、新開の地や、新に占領した土地では、其の界に以上に近い形を附することが比較的容易である。合衆國や深洲内の諸州には、直線境のものがいくらかもある。又

歐洲列強の間に分割された亞弗利加内にも、亦此の直線境を見るのである。

(二)國境に天然の界を興ふること 國境には簡單な形が必要であるのみならず、山脈、河川、海岸線等の如き天然の界を附することも、亦必要である。蓋し、天然の境界は多少長くなつても、之を無視した直線境界より尙に優る所がある。歐洲諸國の過半は既に殆ど此の目的を達して居る。殊に、西部の諸國がさうである。又瑞士、バルカン半島の諸新國、希臘等もさうである。素より、此等の國に於ても、細に見れば、尙幾分の不自然的個所はあるが、大體に於ては天然界に據つて居る。南米智利の如きも南緯四十二度以南を除くときは、約九百里間天然界に頼つて居る。

(三)聯合國の成立 同民族の建て、居る諸國が相合して聯邦となることも又多くは國境を簡易にする機會を興ふるもので、殊に、之が爲に自然天然境を得ることがある。其の最好例は伊太利亞である。元此の國が許多の小國に分れて居たときは、その境も區々であつたが、今は三方は海で、北方はアルプスの山壁に據て居る。獨逸は聯邦ではあるが、その東部にはスラブ人種の波蘭國の一部を併せて居るから、此の方面は最も不自然な境を有つて居る。

第十一節 國の重力の中心

國には、單成國と複成國とを區別することができ。單成國とは、地勢と經濟的性質とが全國殆ど同一で、之に住む人民も亦同民族であるもので、複成國とはさうでないものである。單成國は小國若くは小域の中國にのみあるものであるが、斯かる單成國にも、必ずその中に、其の中心即ち重要地と見るべき土地がある。此土地は國を治むる政令の出づる所で、又多くは最初國を建てた場所である。故に其の位置は、理論上から謂へば、國の中央にあるべき筈であるが、地勢の工合上、甚しく偏心して居ることもある。して其の最も甚しき場合は、小さな島國で其の中央は山で住地に適せず、随つて人は多く、其の周圍に住んで居る場合である。斯かる國では、その重力の中心は周圍の沿岸に在るのである。

復成國の中心は、之を組立つる各地の貧富、經濟住民の發育の多少等によつて、極まるものである。然るに政治區域は時代と共に其面積を變更するものであるから、その重力の中心も亦之と共に其の位置を變ふるは、理の當に、然らしむる所である。尤も此の位置の變更は場合によりては土地の經濟上の變更にも由ることがある。

例へば、近來の如く、工業勃興の時代には、之が爲、或る土地は人口を吸収して經濟上非常の發育をなすに反して、又他の土地は不作、移住、其の他種々の原因によつて、大に衰微する所もある。

北米合衆國は、初め大西洋沿岸に建國して、それから次第に西の方内部に及ぼしたもので、殊に十九世紀の中頃以來、西部に入り込む人民が、甚だ多いのである。それで、米人は人口の中心の西遷といふことを言つて居る、此の中心は初は無論大西洋沿岸に在つたのであるが、今では既にシンシナチ市の西に遷つて居る。固より國の重力の中心といふものは、人口の中心ばかりをいふものではなく、國を治め、且其の發達を期する動力の在る所をいふのであるから、此の中心は先づ多くは、國の都に在ると見なければならぬ。都は中央政府の所在地であるのみならず、物質的並に精神的文明の中心である。何故なれば此等に關係した技術者學者等の最も多數に集つて居る所であるからである。

都は國の重力の集中する所である。因つて便利の上から言ふときは、國の中央に在るのが、最も當然のことである。都の中には、此の理想的位置に近い位置を有つ

て居るものも、少なくない。我が帝國の都が、其の北部の未だ開けない時代には畿内に在つて、その開けた今日では、關東に在るのは、是れは取りも直さず、始終理想の位置に近い位置を保つて居るものと言はなければならぬ。又、伊太利亞の都の、舊都羅馬に在るのも亦其の當を得たものである。勿論日本でも、伊國でも、其の都の位置の數學的中心でないことは一見して明であるが、是は地勢、交通、經濟等の状態が之を斯かる點に置くことを許さぬからである。此等諸状態の爲め、世界有數の大都會で、非常に偏心の位置を有つて居るものがある。例へば倫敦、巴里、維也納、コーペンハーゲン、クリスチャニヤ等の如しである。其の理由は蓋し主として交通の便に在るやうである。然るに最も不思議なのは、露都、ペートルスブルグである。その昔モスコフに在つた時は、略理想に近い位置であつたが、之を北西に偏在した而も一層寒冷不毛の地に遷したのは、決して其當を得たものとは認められない。北米合衆國の重力の中心は、昔からニウヨークであつたが、今では、シカゴが勃興して、舊中心と、競争の勢を呈して居る。

第十二節 海國

海邊國は港灣のやうなもので、之を利用し得る人民あつてこそ、始めて其の効能を發揮すべきものである。此の効能を充分に發揮し得た海邊國を海國と稱して、航海術に長じた人民の國の別名となつて居る。海邊國の數は甚だ多いが、眞の航海民を生み出した國は古來甚だ少ないのである。航海民は多少之を養成することが出来るに違ひないが、兎に角その人民は勇氣と膽力とに富んだ民族でなくてはならぬ。昔の海國民は、フィンニシヤ人、希臘人、エトルスカ人、ノースメン等で、何れも永年間の養成によつて生れ出たものである。現在の海國民で、最も有名なのは英人である。しかし、其の養成には千年餘を要したのである。

海國民中直接航海に従事するものは概ね、海濱の住民である。此の住民は、生れ落つるや、否や、海を見て育つて、生長してからも、多くは海に據つて、生計を立て、居る。例へば、漁業に従事するか、或は船乘業をするとかして居る。それで自然彼等の間には航海心が養成せらるゝのである。往古や中古の海國民は皆海邊に住む者のみに限つたもので、海賊を出したのも、亦皆海邊の人民であつたが、現今に至ては海國をして眞の海國たらしむるものは、海邊の住民ばかりでなく、内陸に住んで

他の業務に従事して居るものゝ力も、亦與つて大なるものがある。何故と言ふに、内陸に住む農工を始め總ての人民が勉強して、有らゆる物産を自國民が需用するより遙に多量に拵へて、之を自國の船で海外に輸出するやうになれば、それだけ多くの人が又航海に従事するやうになるからである。さうなれば、又自國の船舶や貿易を保護する爲に、それだけ多くの海軍も備へなければならぬからである。斯くなつてこそ眞の海國であるから、現今の海國は海濱の人民ばかりでなく、全國の人民の勉強奮發心に由つて始めて勃興するものである。

一時有力の海國であつた西班牙と、葡萄牙とが其の後次第に衰へて終に今日の如き慙な有様になつたのも全く世界の市場に出すべき自家の産物を有たなかつたことに原因するのである。それから、白耳義は工業大に開けて、海外に出たす物産あるに拘らず、之を輸出すべき自國の商船なき爲に未だ海國の仲間入が出来ずに居る。合衆國も、最近の時代まで海國ではなかつたのであるが、海外領地を得てから急に商船や海軍を増して遂に海國の仲間入をしたのである。英國は、其の主食物を盡く海外に仰いで居る代りに、海外に輸出すべき工業品も亦多い、之が爲、その

商船隊と艦隊との多いことは世界第一である。因つて目下海國中の大王とも云ふべきものは、此の國を措いて、他にはないのである。終りに我が國が明治の聖代に至つて、昔に復歸して、立派な海國となつたことは人の皆知る所である。

第十三節 政治區域の界

政治區域の境界には、先づ線と帶とを區別するのである。何れの政治區域でも、最初は一の中心から始まつて、それから次第に、四方に擴張したものであるから、初の間は政治區域は皆孤立して居たものである。それで、其の間の土地は、獵場とか、牧場とかいふやうなものに利用されて、謂はゞ一種の共有地であつたのである。是れが即ち帶狀の境界で、亞弗利加内部の天然民族中では、其の幅時に甚だ廣いので、之を横切るに數日を要する事がある。又、日清戦争前には、朝鮮と支那との間に、鴨綠江の西岸に沿ふて、幅十里乃至二十五里の中立帶があつたが、是も亦立派な帶境である。境界が帶であれば、二政治區域の間には、二重の界線がある様なものである。何故なれば、双方別々の界を有するからである。しかし、此の帶狀境界も双方の人口が増加して、土地の價値が昇るに隨つて次第に狭めらるゝことは、勢ひ止むを

得ない次第で、遂には變じて線となつてしまふものである。

國の境は昔は上述のやうに、内から外に向かつて發育したものであるが、近年文明國が相互の間に極める境は、常に最外の線で、最初之れを圖の上に引き、それから更に境界委員を派遣して、實際の界を取り極めるのである。例へば、日露の間に定められた樺太の五十度線の如しで、列國間に分割された亞弗利加の各部の界も、亦初め圖上に出來た者である。然るに此の界にはその後に至つて實地の取極めを經ない部分がまだ澤山ある。

次に政治區域の境界線には天然のもの、人爲的のものがある。天然のものは山脈、川筋、海岸線、沼地、林帶等の如きもので、元來境界線は敵に對する防禦線であるから、此の點から云へば何れの種類も皆同一の價值あるものではないのである。例へば、山脈も低い、勾配の緩なもの、高且急なものには、及ばないのである。又川の如きも大小によつて、大差がある。海岸も急峻で、其の前面に、淺瀬多いものは、平坦で深いものより防禦線としての價值は、無論多いのである。それから、林帶の如きは、土地が開け行くと共に、伐り倒さるものであるから、さうなると、天然の界

ではないことになる。

人爲的の界線には先づ第一に城壁や塹壕の類がある。此等は天然の界のない所か、さなくば、その弱い所に設くるもので、昔は文明國を其の附近の蠻民から防ぐ爲に設けられたものである。支那の萬里の長城は、人の普く知る所のもので、斯かるものは歐羅巴にも數個所にある。羅馬人が今のローマニヤ、匈牙利、獨逸、蘇格蘭等に築いたものは、今も尙其の跡を遺して居る。又太古波斯のダリウス王も、カウカサス山の東麓デルベントの關門に當つて、横斷の長壁を設けて、蠻人の侵入に備へたことがある。

近時に至つては、壁の代りに國境に當る所に、砲臺の列を敷くことになつた。是は單に守衛の爲ばかりでなく、直に敵國に侵入して之を戰地とする爲である。此の頃又軍境と稱する極端の人爲的防禦線がある。是は有事の日には、直に住民を武装させて、之を防禦に充つる仕組みであるのである。

近來新に開けた地方に見る直線狀の境界こそ、眞に人爲的境界の最たるものといふべきで、その起因は地理の未だ明ならざるに在るのである。地理の明でない時

には、勿論精確な地圖もない譯であるによつて、勢ひ經緯線の如き人為の線によるか、又は二個の既に知れて居る點を結び付くる線に依るべく餘義なくせらるゝのである。

此の頃圖上に、直線若くは單一の曲線を畫いて、其の中を利益圈(Sphere of interest)と稱することがある。二個國の間に介在する河では、利益線は谷線と稱へて、河床の最深點を結び付くる線の上に引くのが慣例となつて居る。例へば、普佛戦争以前、ライン河が未だ獨佛の境になつて居た時には、利益線は、其の上に引かれたのである。尤も谷線は時々變化するものであるから、その都度境界委員を設けて、その所在を確定するの必要がある。

二個以上の國の間に在る湖上にも、亦利益線を引くのである。加奈陀と合衆國との間に在る四大湖や、獨逸、埃國、瑞士三國間のコンスタンス湖の如きは、いづれも其の上に利益線がある一體湖面は國の面積中に算入するものであるから、此の利益線の所在の違ひで、國の面積に増減を來たすことは明である。而も之を算入するせざるとでは、合衆國の如き國に取つては、その面積に一萬方里餘の差を生ずるの

である。

領海と稱して、海岸線から數里の沖までの間を國に附屬するものと見做すのも、矢張利益圈の類である。その目的は種々あるべきも、その重なるものは、漁業を保護するに在る。

第十四節 境界線の發育

政治區域の境界線には、出入の多いのと少ないのとがある。出入の多いのは、それだけ境界線の長いもので、その少ないのは、それだけ境界線の短いものである。抑面積の割に、周圍の最も短いのは圓であるが、斯かる形の國は實際には、無論ないのであるから、何れの政治區域の界も、最短の界よりも、多少長いのである。因つて、長短の界の長さ即ち國を圍にしてのその周圍の長さを一として、實際の長さを之に比らべたものを國境線の發育と稱するのである。數例を擧ぐれば、左の通りである。

| 國名 | 面積(方里) | 最短界(里) | 實際の界の長さ(里) | 發育 |
|-------|--------|--------|------------|-----|
| 瑞 士 國 | 二、六七〇 | 一八三 | 四七二 | 二・五 |

| | | | | |
|--------|--------|------|-------|----|
| 獨逸國 | 三五、二六〇 | 六六六 | 二、〇七五 | 三一 |
| 埃 甸 國 | 四〇、六〇〇 | 七〇九 | 二、四四七 | 三四 |
| 大英國及愛蘭 | 二四、三〇〇 | 五〇六 | 三、二七九 | 六四 |
| 日本帝國 | 四三、五四〇 | 一一一三 | 八、七七三 | 七九 |

米國の如き新開地に見る直線境界は、先づ最短の圓狀境界に最も近いものと言はなければならぬ。

境界線の發育と共に、その何程が好意若くは中立を表する國に接し、何程が、多少敵意を挿む國に接するかを見るのも、亦趣味あることである。今一等國中、外交上最も困難の位置に在る獨逸を見るにその境界線中海に接する部分は三割六分で、他國に接する部分は、六割四分である。此の六割四分の中で、一割四分は露國に、五分は佛國に、一分五厘は丁抹に接して居る。因つて埃甸國、瑞士、白耳義、阿蘭陀等の友邦若くは中立國に接する部分は四割四分で、敵國に接する部分より二倍二多いのである。

第十五節 一國內の行政區域

何れの國でも、多少風土、習慣、歴史等を異にして居る部分から、成り立つて居るものである。それで、各部分の幸福を計らんとするには、自然國を數多の大小の行政區域に細別しなければならぬ。此の各行政區域の権力と、中央政府の権力との關係は、國によつて大に異なるもので、佛國の如く、中央集權の強大な所もあれば、又普國や埃國の如く、各部に於ける自治制度の盛な所もある。しかし、此の中央と地方との権力の關係よりも、遙に地學者の趣味を感じるものは、各行政區域の大きさである。此の區域は國と違つて、便宜上から極めたものが少なくないから、人爲的の境を有つて居るものも、割合に多いのである。

(二)市町村 これは行政區域の最小なるもので、國を一の有機物に譬へて見れば、之を組み立つる細胞の如きものである。市町村の境は歴史的に昔から極まつて居るものも少からぬのであるが、その數は時勢と共に變化するものである。新開國の如く、絶えず移民の流れ込む所では、其の數は増すのである。しかし、市街地の如く、その區域が次第に擴張せられて、その周圍に在る村落を吸収する所では、その數は反つて減するのである。

市町村の大きさは、各國多少違つて居る。普國では平均〇三九方里、佛國では平均〇九七方里、日本では平均一三方里、阿蘭陀では平均一九方里、伊國では平均二二方里で、英國の Parish (寺區) と稱ふるものは平均約〇六方里、米國ミシシッピー河區域の Townships は皆同大で、三十六方哩(約五五方里)である。

(二)郡 日本では市町村を總ぶる行政區域を郡と云ひ、郡を總ぶるものを府縣と云つて居るが、國によつては、此の間に、亦一若くは一以上の區畫があつて、英國の如きは随分複雑を極めて居る。然し、此等を一々説明するのが、此の講話の目的でもないから、茲には只地學上から見て、郡縣等に相當するもののみを擧げて置く積りである。さういふことにすれば、直接市町村の上に立つ區域は、我が國では郡で、其の面積は平均約三十方里である。佛國のカントン Canton は平均約十二方里、獨逸のクライス Kreis は、南西では約三十方里、北東では約六十方里である。それから、埃國のベチルクスマムト Bezirksamt は平均約五十八方里で、伊國のシルコンダリオ Circondario は平均約六十五方里である。

(三)府縣 我が國の府縣の平均の大きさは約四百方里であるが、外國のは小は百方

里から大は殆ど千方里に及んで居る。列擧すれば、左の通りである。

| | |
|-------------------------------------|-------|
| 佛國のアロンヂスマン Arrondissemens | 平均一〇〇 |
| 合衆國東部のカウンティ Counties | 一二〇 |
| 丁抹のエムテル Aemter | 一四〇 |
| 英國のカウンティ Counties | 一七〇 |
| 阿蘭陀のプロビンヌ Provinces | 一九〇 |
| 匈牙利のコミタテ Comitate | 二一〇 |
| 白耳義のプロビンヌ Provinces | 二五〇 |
| 伊國のプロビンヌ Provinces | 二七〇 |
| 希臘のノマルキー Nomarchies | 三一〇 |
| 露國のクライスメ Kreis | 三二〇 |
| 佛國のテバルトマン Départemens (上の區域) | 四〇〇 |
| 普國西部のレギールンダムスチルク Regierungs bezirke | 四二〇 |
| 瑞典南部及び中部のレーネ Länne | 五〇〇 |

バツリヤのレギールンダスベナハタ Regierungsbezirke

六〇〇〃

西班牙のプロビンス Provinces

六八〇〃

波蘭のゴベルンメント Governments

八二〇〃

普國東部のレギールンダスベナタルク

九四〇〃

(四)道 右の行政區域以上の區域を有する國は僅數の大域國に限つて居る。我が國の道は、北海道を除いて、他は皆單に地學上の區域である。我が國で北海道と同部類に入るべきものは臺灣と樺太との二區域である。

埃國のクラウンランド(天領) Crown-Lands

平均一三六〇^四方

土耳其(歐洲)のビラエット Vilajets

一四三〇〃

普國のプロビンス Provinces

一九五〇〃

(樺太)

二二一〇〃

(臺灣)

二二五〇〃

露國南部及び西部のゴベルンメント

三三八〇〃

北海道

六九一〇〃

尙以上より大きく、且面積一萬方里以上のものは合衆國の各州(平均一萬四千方里)、支那の省(平均一萬三千方里)、露國東部及び北部のゴベルンメント(平均一萬七千方里)等の如きものである。

第十六節 領地

現今國をなすものの中には、領地を有するものがいくらかもある。此の領地は、其の本國に對する政治上の關係によつて、殖民地と附屬地とに區別することが出来る。殖民地とは本國を離れて、海外に在るもので、附屬地とは之に接して居るものである。

殖民地とは、廣く謂へば、移民の移住した土地であるから、其の地が移民の出た本國に屬すると、屬しないと、少しも之に關係しない譯である。それで、普通一般の殖民地に對して、所領殖民地とでもいふべきものを區別する必要がある。すると、布哇の如きは日本人の殖民地ではあるが、所領殖民地ではないのである。之に反して、樺太、臺灣の如きは、所領殖民地である。前に掲げた附屬地に對する殖民地は、即ち此の所領殖民地の事である。

所領殖民地で、最も大切なものはその土地である。此の土地に對しては、移住民の多少に拘らず、その本國は、之が所有權を主張し得るのである。斯かる土地には、人が多數入り込んで、之を開拓することが望ましいのであるから、その所在地は、海岸であるか、又は海から遡ることのできる大河に接する所である。又斯かる土地を取り得るものは、航海民族に限るのである。即ち所領殖民地は此の航海民の國の海外領地である。その本國からの距離の遠近には、少しも制限ないものである。附屬地とは元一國が取つた之に接する土地で、その住民は異民族であるのみならず、その文明の度も亦多くは異なつて居るものである。然し永い年月の後には、本國に同化せられて、之が一部分となることもある。さうなれば、無論附屬地ではないことになる。

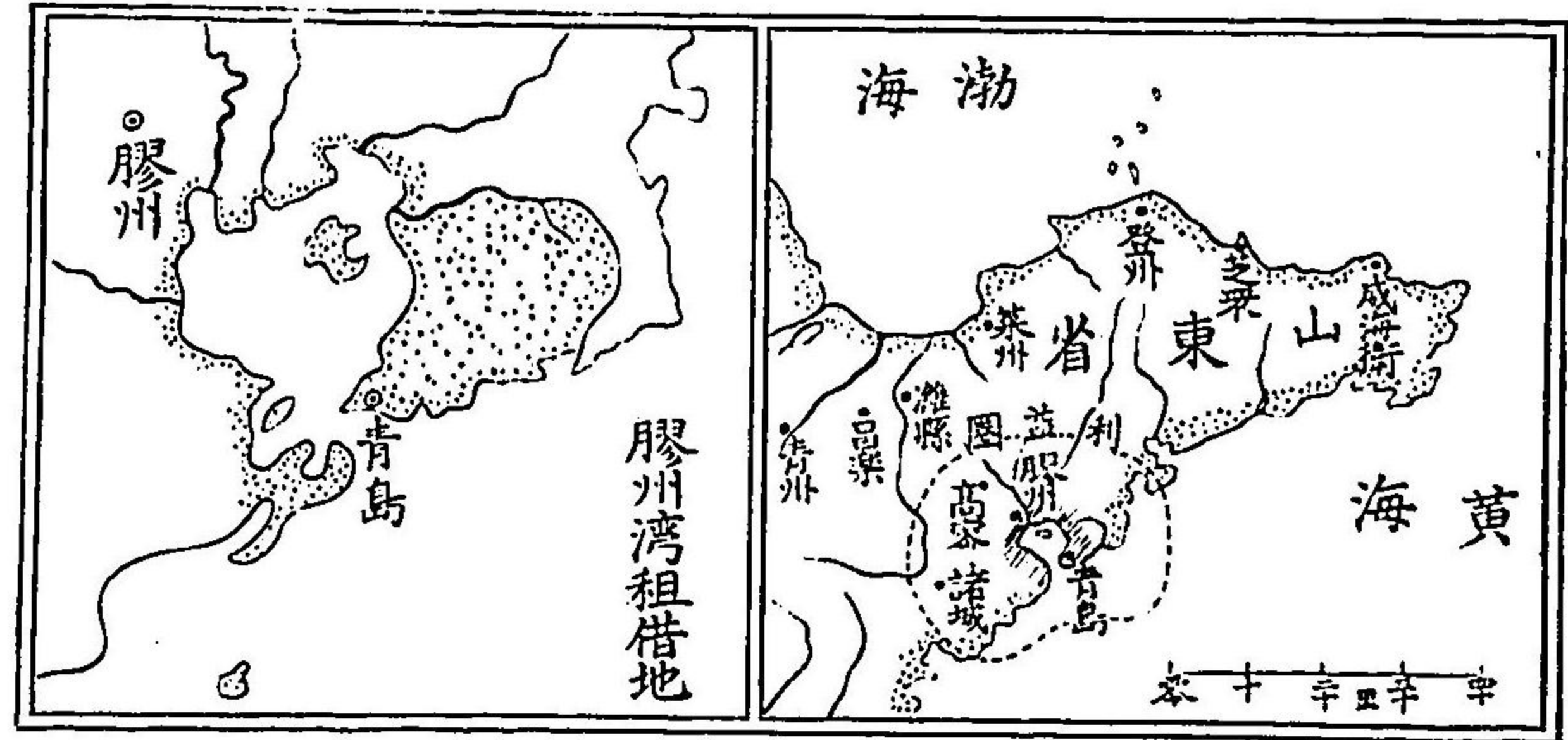
支那と露國とは、大域の附屬地を、有つて居る國の好例である。支那の附屬地は西藏、新疆、蒙古、滿洲等で、露國の附屬地は西伯利亞、トルケスタン、カウカサス、芬蘭等である。芬蘭は元瑞典の附屬地であつたが、露國に併吞されてから、其の一州の如きものになつて居る。埃匈國にも元ボスニヤと云ふ附屬地があつたが、今では全く

合併されてしまつて居る。英吉利水道中の佛國の沿岸にあるチャンネル諸島は、昔し英國が佛國內に所有した附屬地の遺物で、今でも英國とは其の行政を異にして居る。ホルシカ島は地學上から見ても、又人種上から見ても、伊太利亞に屬すべきものであるが、政治上から云ふと、佛國の領分であるから、是は無論附屬地と見做すべきものである。それから、アイスランド島は大に離れては居るが、しかし矢張丁抹の附屬地と見做すべきものである。

第十七節 領地の界と利益圈

新に占領された土地には、無論明確な境界はないものである。若しあるとすれば、それは占領を開始した正面にのみあつて、その反対面は無境界である。境界未定である。斯かる場合は、多く海外の占領地に見るものである。何故なれば、占領は海岸から始まつて、それから次第に内陸の方に及ぼして行くものであるからである。若し此の占領地が、未開人の土地であれば、直に境界を取り極むる必要はない。何故なれば、未開人は開明人ほど境界に重きを置かないからである。然し、他の競争國に對して、將來取らんと志す區域を利益圈若くは勢力範圍として、明示するの

圖 二 十 二 第



地借租と利益圏の逸獨るけに省東山

必要がある。して其の境界は、特に、不明にして置くこともあれば、又條約によつて明に取り極むることもある。

此の利益圏といふ名稱は近來の新作に係るものであるが、之に相當する物は昔からあつたものである。即ち昔に在ては地中海の西部は南北の二部に分れて、其の南部はフィニシヤ人の勢力範囲内、北部は希臘人の勢力範囲内であつたのである。又十三世紀中、黒海はゼノア人の勢力範囲内、アドリヤ海はベニス人の勢力範囲内であつたのである。蓋し、空前絶後の大利益圏は、全地球面が西班牙と葡萄牙との二國間に分たれた時に在つたのである。即ち西曆千四百九十四年と、千五百六年とに出された羅馬法王の院宣で、大西

洋中、ケープベルド島の西三百七十レグアスの距離に在る子午線を界として、是より西に発見さるる土地は西班牙のもの、東に発見さるる土地は葡萄牙のものとなり極められたのは、是れ取りも直さず、世界を二分して、兩國の勢力範囲内に取り込んでしまつたのと同様である。

利益圏を設くることの必要を感ずるに至つたのは、亞弗利加開拓の問題が起つてからである。此大陸中の暗黒界が、英、佛、獨、西、葡、伊の六國間に分割された時に、各自の利益圏として、未だ曾て人の踏査したことのない土地までも、圖上に線を畫いて、取つてしまつたのであるから、表面上無所有者の土地は全くなつたのである。

第十八節 所領殖民地の種類別

殖民地には最初商館の建設から始まつたのが澤山ある。商人が海外に出掛けて、適宜の地に移住して、こゝで商買を始むる場合には、本國政府の保護を要することは勿論である。此の保護といふことから、その地が終に政府の物になるのである。斯かる貿易商會の中には、随分永く續いたものもある。有名な英國の東印度商會の如きは、千六百年から千八百五十七年まで、二百五十七年間續いて、一時、其の勢力

は、大したものであつたのである。しかし、多くの商會は、其の商買地を早く本國政府に讓與して、終に保護國といふものを生み出したのである。保護國の内政は、多少獨立したものは違ひないが、經濟上の點から言ふと、之が保護の任に當る國との關係が少からぬのであるから、政治地學に於ては、矢張之を海外領地と同一視せざるを得ないのである。

殖民地は多く經濟上の點から分類するものであるが、一殖民地で種々の經濟上の状態を併有するものもあるから、殖民地によりては、何れの種類に入るべきものなるか、その所屬の不明なものも少からぬのである。しかし、種別をすれば略左の如きものになる。

(一)商業殖民地 Commercial colony 海外殖民地で最初商業上の一驛に過ぎなかつた者から起つたのが非常に多いのである。それで、其の場所は初め、沿岸若くは保護し易い沿岸の島に在つて、且同時に萬國貿易の重なる通路に當る所に設けられたものである。それから、その貿易品といふのは貴金屬、香料、毛皮、絹布等の如き、その多くは歐洲諸國に皆無であるか、又は甚だ少ないものであつた。して此等を産す場

所は大抵本國から遠距離に在つたのであるから、是が爲、本國と此等の場所との間に亦更に中間の驛を設くる必要が起つて來たのである。

太古フイニシヤ人が西班牙の南部と、亞弗利加の北岸とに、商業殖民地を設けたのを初めとして、中古に至つては、ゼノア市人が黒海の沿岸諸處に商館を設けたのである。米國發見に次ぐ時代になつてからは、歐洲から印度東亞に向かふ道筋の亞弗利加の沿岸には、許多の中間驛が設けられたのである。印度の沿岸に在る葡國や佛國の小領地は、昔の商驛の遺物に外ならぬので、支那の澳門も當時の葡國の商驛であつたのである。其の後、英國の手に入つたアデン、シンガポール、香港等も亦眞の商驛で、獨逸の支那から得た膠州灣も亦多少商驛の性質を帯びて居る。米國には、北方の毛皮獸を産する地方の外、商業殖民地の、勃興した地は皆無であつた。

一土地に商驛が設けられた後は、此の驛を根據として、商買は更に内地に向つて、擴張されたのである。それで、その内地にも亦次第に商驛が設けられたのである。斯くの如くにして、遂に其の土地全部を占領することは、從來の殖民政策の大主眼

であつたのである。

(二)植付殖民地 Plantation colony 熱帯地方では、商驛を根據として、附近の地を開墾して、商品として本國に輸出すべき植物性嗜好品を栽培することがある。勿論之に使役する労働者は白人ではなく、其の地の風土に慣れた土人であつて、白人は單に資本を出し、且労働者を監視するまでである。白人の數は商驛に居る者だけで充分で、特に多數の人を要するが如きことはないのである。若し又斯かる場合に、労働者として、土人を得ることができなければ、之に適する人種の労働者を他から連れて來るのである。米國に多數輸入された黑人種の奴隸は、此の種の労働者であつたのであるが、奴隸制度の全廢以來、印度人や支那人が、黒奴の代りに用ゐられて居る。植付業は簡易農業の一種である。その目的が暴利を貪るにあるのであるから、労働者自身の用ゆる食料品の培養さへ放棄して、専ら植付にのみ従事するのであるから、彼等の食物は他から輸入する場合が少からぬのである。

植付業の盛になつたのは、十七世紀中、歐洲人が從來知らなかつた新嗜好品に慣れて、其消費高が激増し始めてからである。熱帯地方に於ける殖民地の、大に擴張さ

れたのも、全く之が爲である。此の植付が多く熱帯に限るのは、其の土地が膏腴で、小面積の地でも、割合に收穫が多いからである。

米國發見後、西班牙人が同大陸に設けた殖民地中、植付を目的としたものは極めて少なかつた。何故なれば、此の殖民地は多く高原の氣候冷涼の地に在つて、その目的は殆ど全く鑛業(銀)に在つたからである。但し西、佛、蘭、丁の四國に分取されたアンチルス列島には植付殖民地とも見るべきものがある。現今、植付殖民地の最大なるものは瓜哇島と、ブラジル國とに在るが、ブラジルでは、一部はその位置が亞熱帯地に入り込んで居る。

(三)文化殖民地 Cultivation colony 文化とは、熱帯地方を經濟上利用する傍ら、尙土地の人民を文明に導いて、之をその德澤に浴せしむるとの意味で附けた名稱であるから、此の種の殖民地は、十六世紀から十七世紀にかけて、流行した利益吸ひ取り主義の殖民地とは殆ど正反對のものである。但し風土の異なる所から文明人が團體をなして移住して、そして、土人を農業に、導くやうな、大袈裟なことは出來ないのである。

文化殖民地の模範とも云ふべきものは、蘭領の瓜哇島である。此の島には昔から其の各部に割據して居た王があるが、此等には表面上獨立を與へて置きながら、經濟上の點からは盛に農業を奨励して、土民の幸福を進めたのであるから、その結果、土民も大に其の徳澤に感じて、今では急速力を以て、その人口が増加しつゝある。因て、蘭人は此の方法を其の配下に在る他の島にも擴めつゝある。文化殖民地で、一種特別の種類ともいふべきは、英領印度である。此の地は初め東印度商會の商業殖民地であつたが、今では英國の文化殖民地と化して居る。文化の誘導者は割合に少數の官吏、軍隊、商人等で、其の數は三億の人口に對し僅に十萬である。

(四) 征服殖民地 *Conquest colony* 是は最初から武力を以て取つた土地であるが、斯かる場合には、勝者の權威で、之を他の殖民地に變ずることが容易であるから、年月を歴れば、大抵さうなつてしまふのである。例へば英領印度の如きは、最初は征服殖民地であつたが、十九世紀になつてからは、文化殖民地に變じたのである。又アルゼリヤも、初めは佛國の征服殖民地であつたが、今ではその移住殖民地に變じつゝある。昔し西班牙人が墨其西哥と、秘露とを取つたのも、全く武力に依つたのである。

るが、その遣り方が非常に亂暴であつたので、土民の大部分は遂に滅亡したのである。

(五) 移住殖民地 *Immigration colony* 此の殖民地は經濟上から見ても、亦地學上から見ても、前の文化殖民地とは大に違ふものである。即ち土地は溫帶と亞熱帶とに限られて、移民は人口過剩の歐洲諸國から、多數團體を組んで行くのである。此の移民は主として農民である。その理由は種々で、又時と共に變化するのであるが、主因は經濟上に關することである。即ち農民は多く束縛を受けて、苦しい生活をするものであるから、彼等は自由で氣樂な生活を楽しみに、遠方にまで移住するのである。露國は、過去は勿論、現在でも、人口稀少の國柄であるに拘らず、その農民が續々西伯利亞に移住するのは、全く生活の自由を得んが爲めである。それから宗教上の壓迫も往々移住の原因となることがあり、又前に移住したもの、盛況が後の移民の引力となることもある。さて、移住の原因は兎も角、團體の移住地は、その本國と略其の風土を同ふする所でなくてはならぬ。又土地が廣くて、人口の甚だ稀薄な所でなくてはならぬ。此の種の移民の主職業は農業であるから、その殖民地を

農業殖民地 Agricultural colony と云ふのである。しかし中には氣候上の關係で、土地を重に牧場にすることがある。斯かる場合には、之を牧畜殖民地と云ふのである。

歐羅巴人の團體移住地は、北半球に於て西伯利亞、加奈陀、合衆國、南半球では濠洲、南米、及び亞弗利加の南部で、一部の移民は、既に十七、十八の兩世紀にも出たことがあるが、その大團體を組んで行き始めたのは、十九世紀の中頃以來である。して、此等の移住殖民地の中には、既に獨立國となつたものもある。

歐洲諸國中、最多數の移住殖民地を有つて居たものは英國である。英國は、之を得んが爲に、加奈陀から佛人を、亞弗利加の南方から蘭人を逐ひ出したのである。獨逸も亞弗利加の南西部を占領してから、之を移住殖民地にせんとして居るが、氣候の關係上、牧畜殖民地に利用するの外、別に仕方がないとの事である。

海外諸處に殖民地を有つて居る以上は、之を本國と連絡させる爲、又有事の日には根據地とする爲、數多の中間驛を設くる必要がある。此の驛を設くるには、萬國交通線路に當るの所が最も適當である。此點に於ては、英國は最も敏捷に立働いて、

必要と認められた所は、如何なる價を拂つても、皆之を取つてしまつたのである。大西洋中には、ベルムーガスとセイントヘレナ、地中海にはジブラルタルとマルタとサイプラス島、紅海の出口には、ペリムとアデン、波斯灣にはバレーン島、その外シンガポール、香港、威海衛等、皆世界の要所に在るステーションである。又近來は海軍の爲め、貯炭場の必要が生じて、以上の個所は又之を兼ねることになつたのである。實に細に數へ來れば、英國の領地は世界中六十餘個所に散在して、之を結び付れば、一の網が出来る位である。英國の強さも全く之が爲である。

第十九節 海外領地の發育の四期

列國が海外領地を獲得したのは、中古丁抹がフェロー群島とアイスランド島とを諾威から譲り受けた外、皆コロンバス時代後の事である。その時代から、今日までの領地の變遷を通觀すれば、則ち此の間を四期に區別することが出来る。

第一期 此期は西班牙と葡萄牙との全盛時代とも云つて可いので、其の重なる部分は十六世紀の初半に在る。當時海外の領地の獲得に熱中したのは、獨りこの二箇國であつたのである。即ち此の時代は、前にも述べた通り、歐洲以外の世界が此

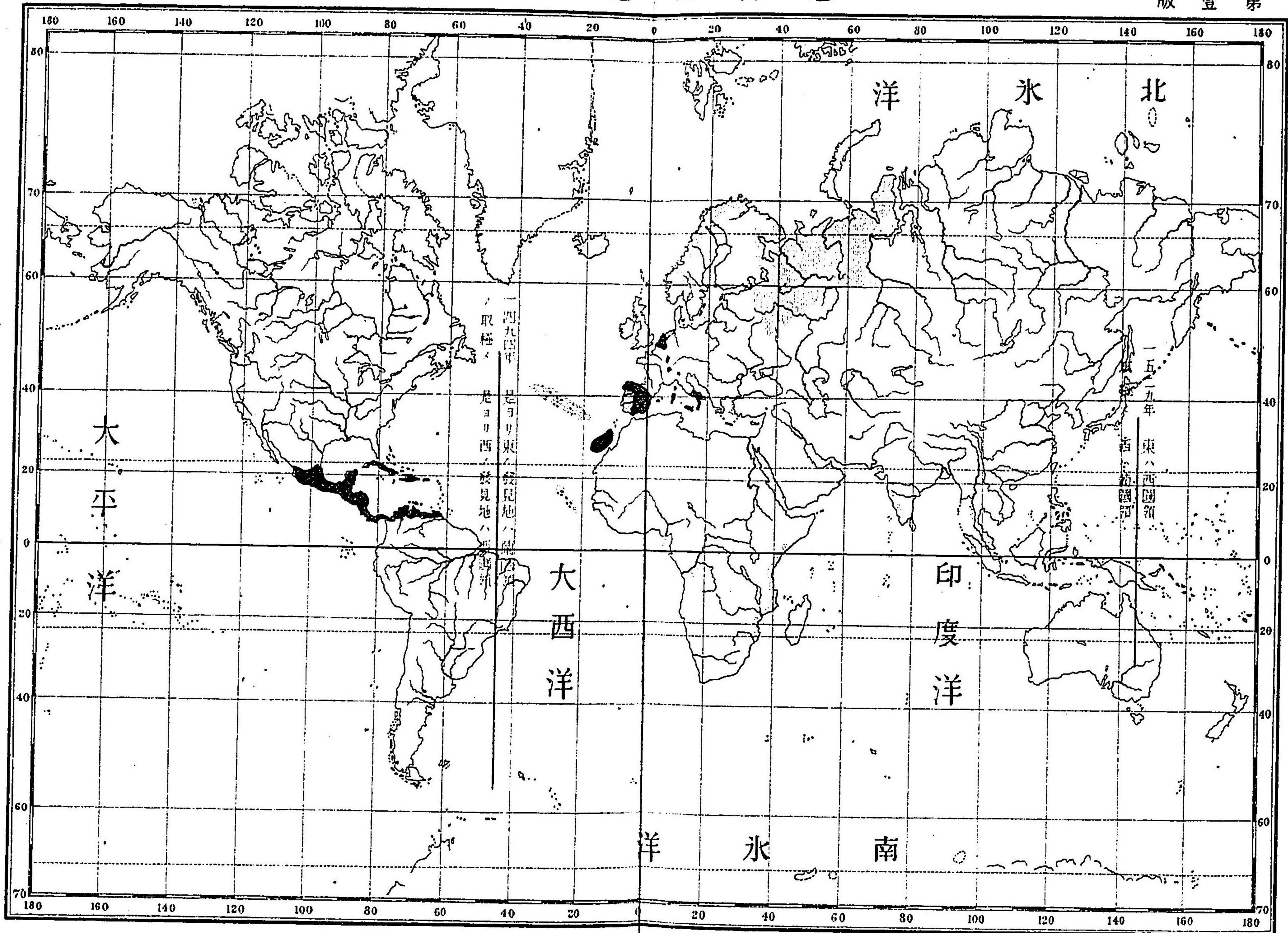
の兩國間に、その利益圏として二分された位の時代であつて、此の時西班牙は、北米の南部と南米とに、宏大の土地を略取するや否や、間もなく一大殖民地帝國を建設したのであるが、葡萄牙はブラジル、亞弗利加并に印度の沿岸に小區域の地を取つたまでで、西班牙の如き大殖民地は拵へなかつたのである。

此の頃に當つて、土耳其人は埃及を征服した。是は千五百十七年の事であつた。

第二期 此の期は重に十七世紀中に在つて、英、佛、蘭の三箇國の鼎立時代ともいふべきである。何故なれば、西、葡の二國は十六世紀の末に至つて既に衰へ始めて、十七世紀に入るや否や、佛、英、蘭の三國が海國として勃興したからである。佛人は千六百八年に始めてクキベック市を立てて加奈陀の殖民を開始するや、英人は北米の東岸に移住して、此の地を殖民し始めたのである。それから西班牙領の西印度には英佛蘭互に相接近して割據することになり、東印度と其の附近の多島界に在つた葡國の殖民地は多く蘭人に横領せられたのである。又佛王ルイ十四世の時代には、列國相競ふて亞弗利加のギネヤ海岸に商館を設けたが、是は其の後大抵消滅して、その今日まで残つて居るのは、僅に指を屈するだけのものである。

年九二五一
分二之面球地

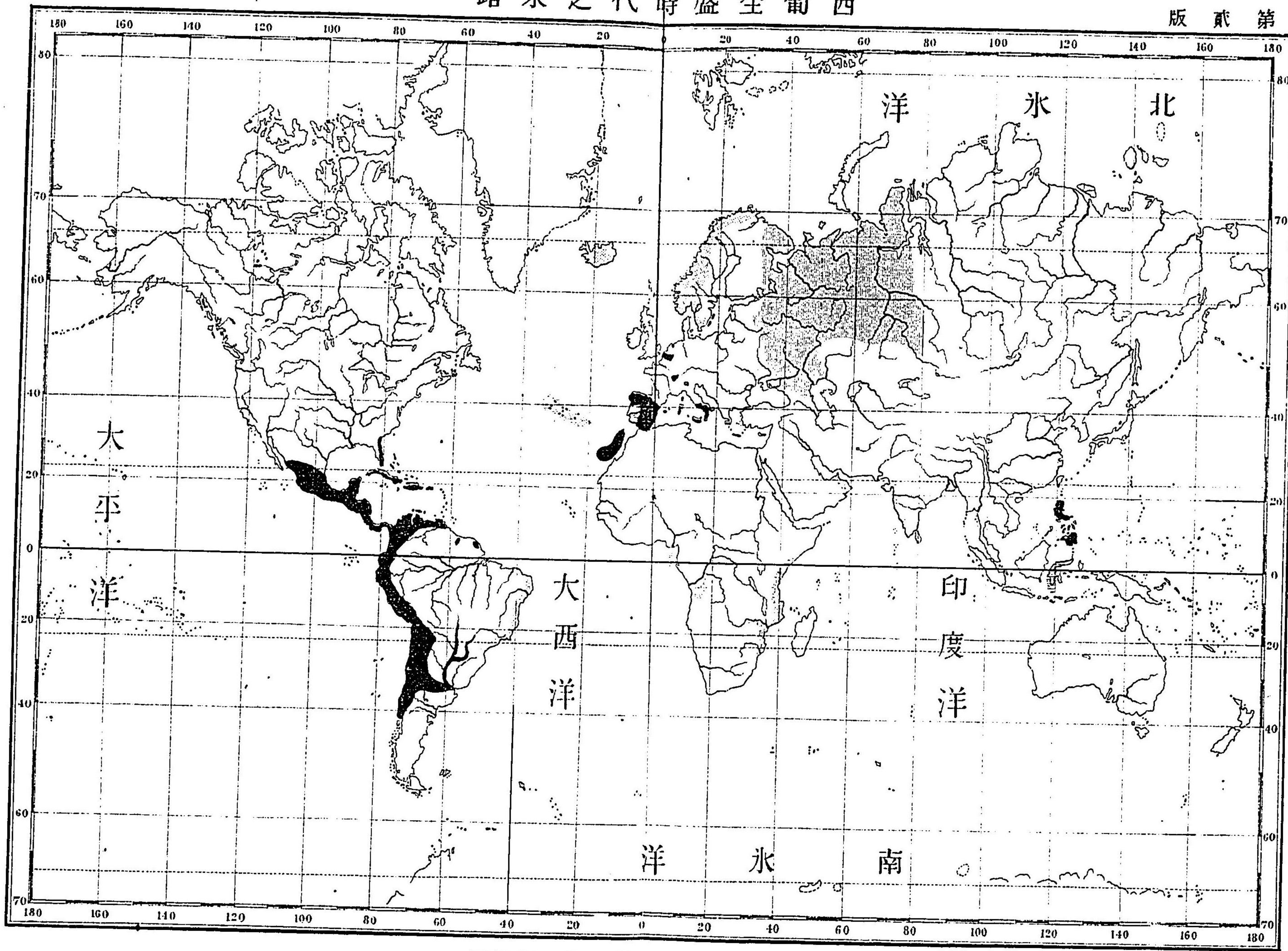
版壹第



| | | | |
|---|---|---|---|
|  |  |  |  |
| 牙班西 | 牙葡葡 | 抹丁 | 國露 |

西葡全盛時代之末路
一五九八年

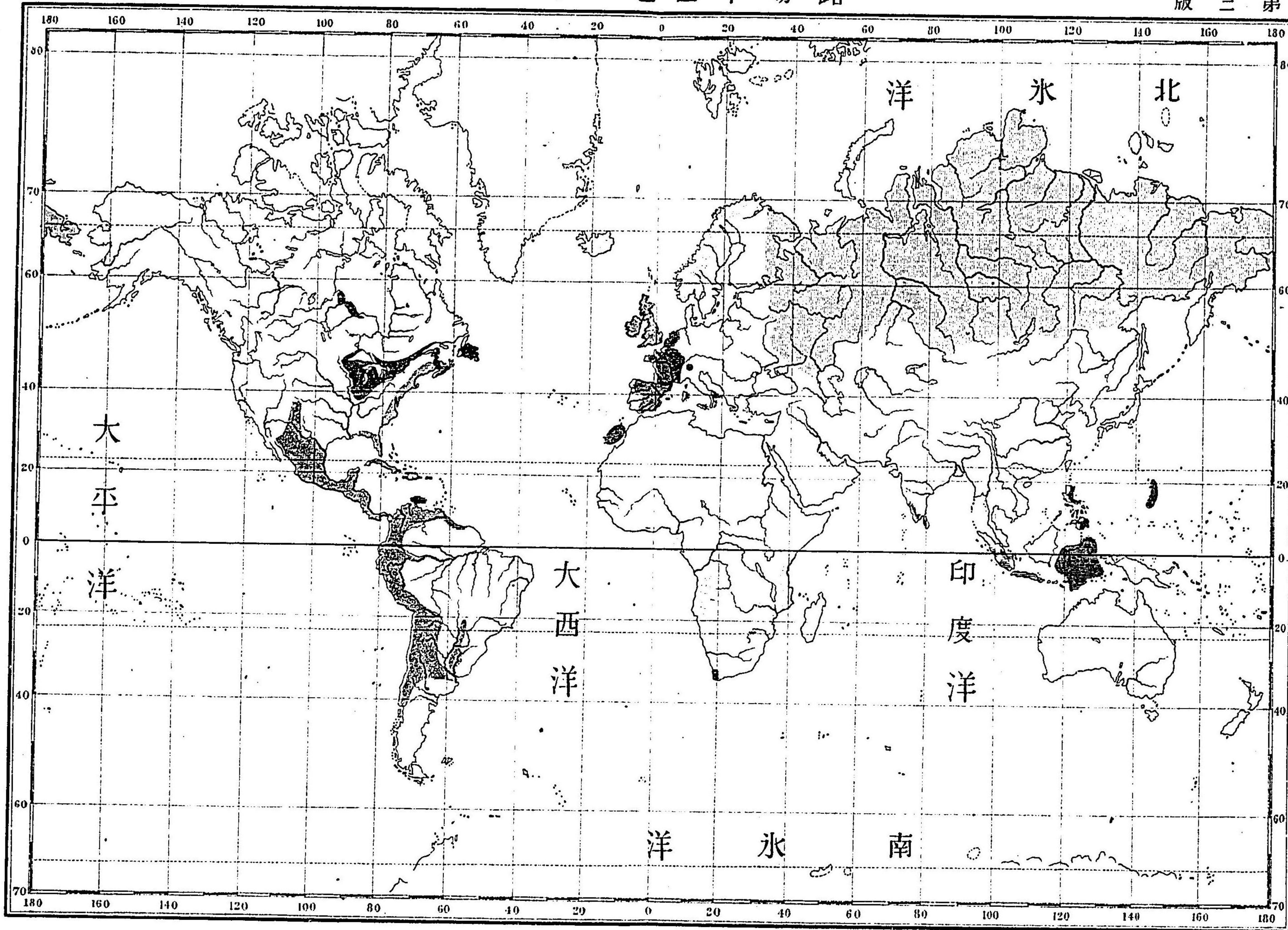
第貳版




- 西班牙
- 葡萄牙
- 抹丁
- 國露

年七九六一
代時ノ世四十易路

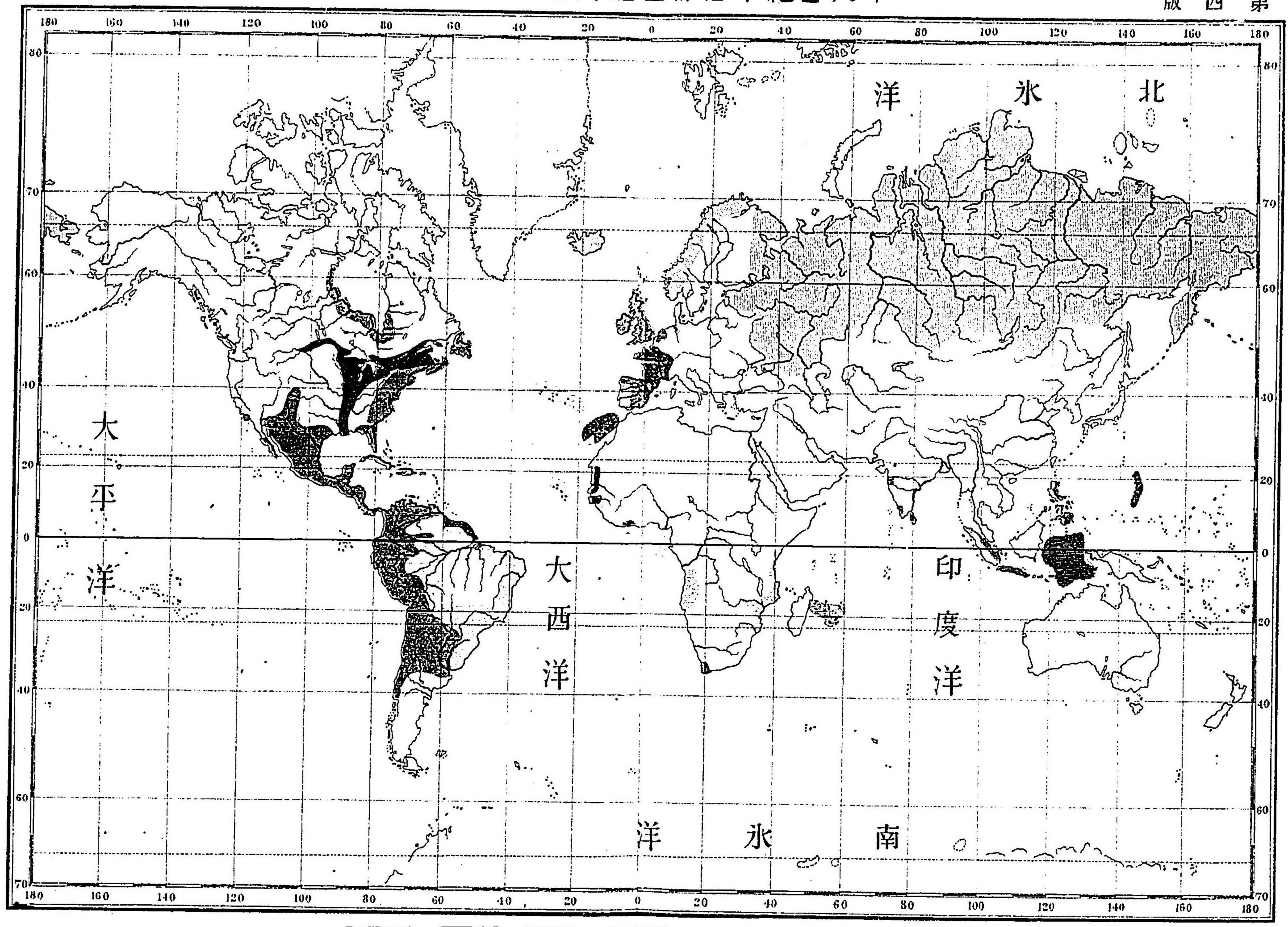
版三第










- | | | | | | | |
|---|--|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |  |
| 牙班西 | 牙荷葡 | 抹丁 | 國露 | 國蘭 | 國英 | 國佛 |

年 四 五 七 一
 時 盛 全 之 地 民 殖 國 佛 之 中 紀 世 八 十

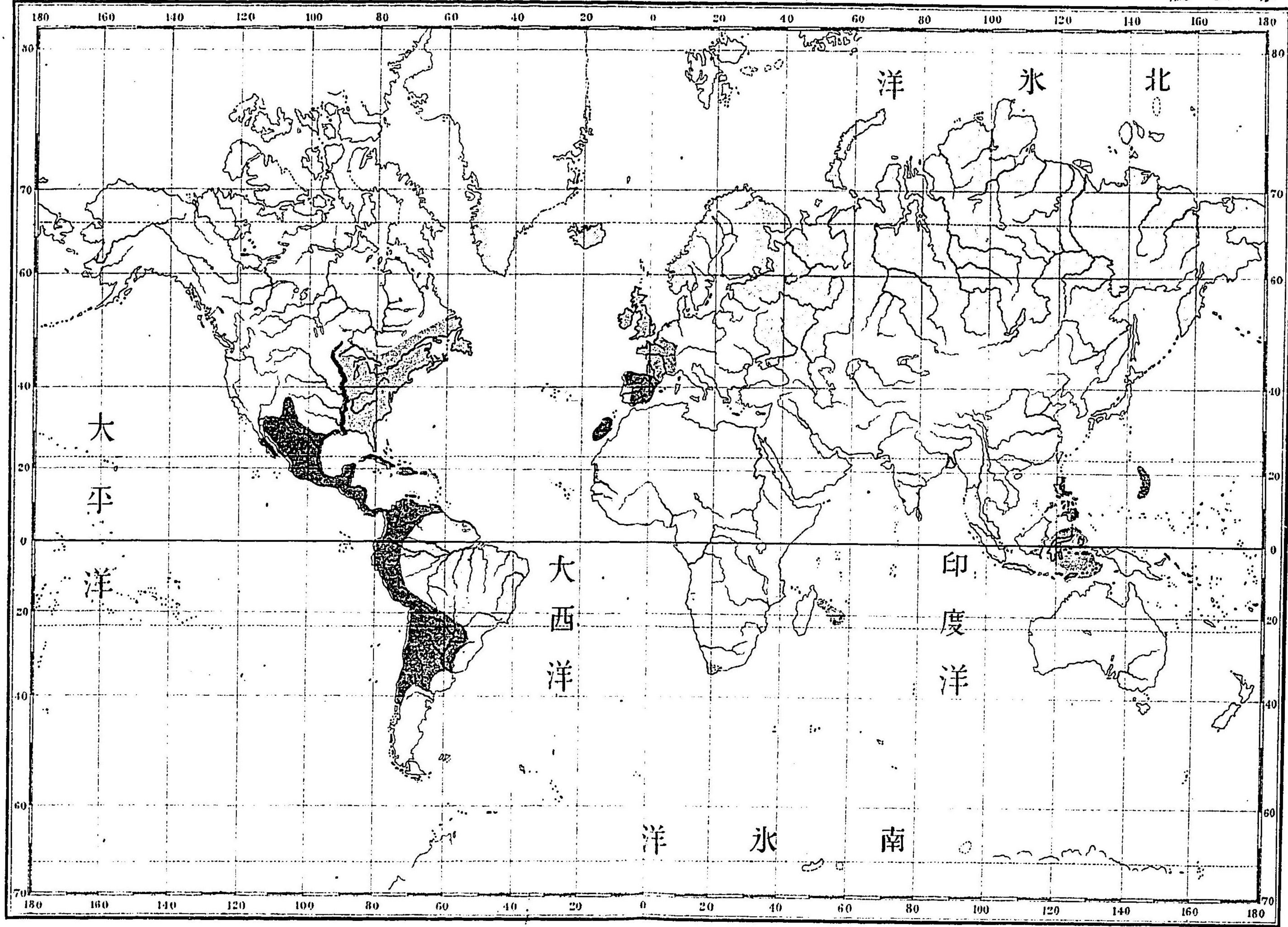
版 四 第



- | | | | | | | |
|---|--|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |  |
| 國 西 | 國 葡 | 抹 丁 | 國 露 | 國 蘭 | 國 英 | 國 佛 |

年 三 六 七 一
 時 盛 全 之 地 民 殖 國 英 之 中 紀 世 八 十

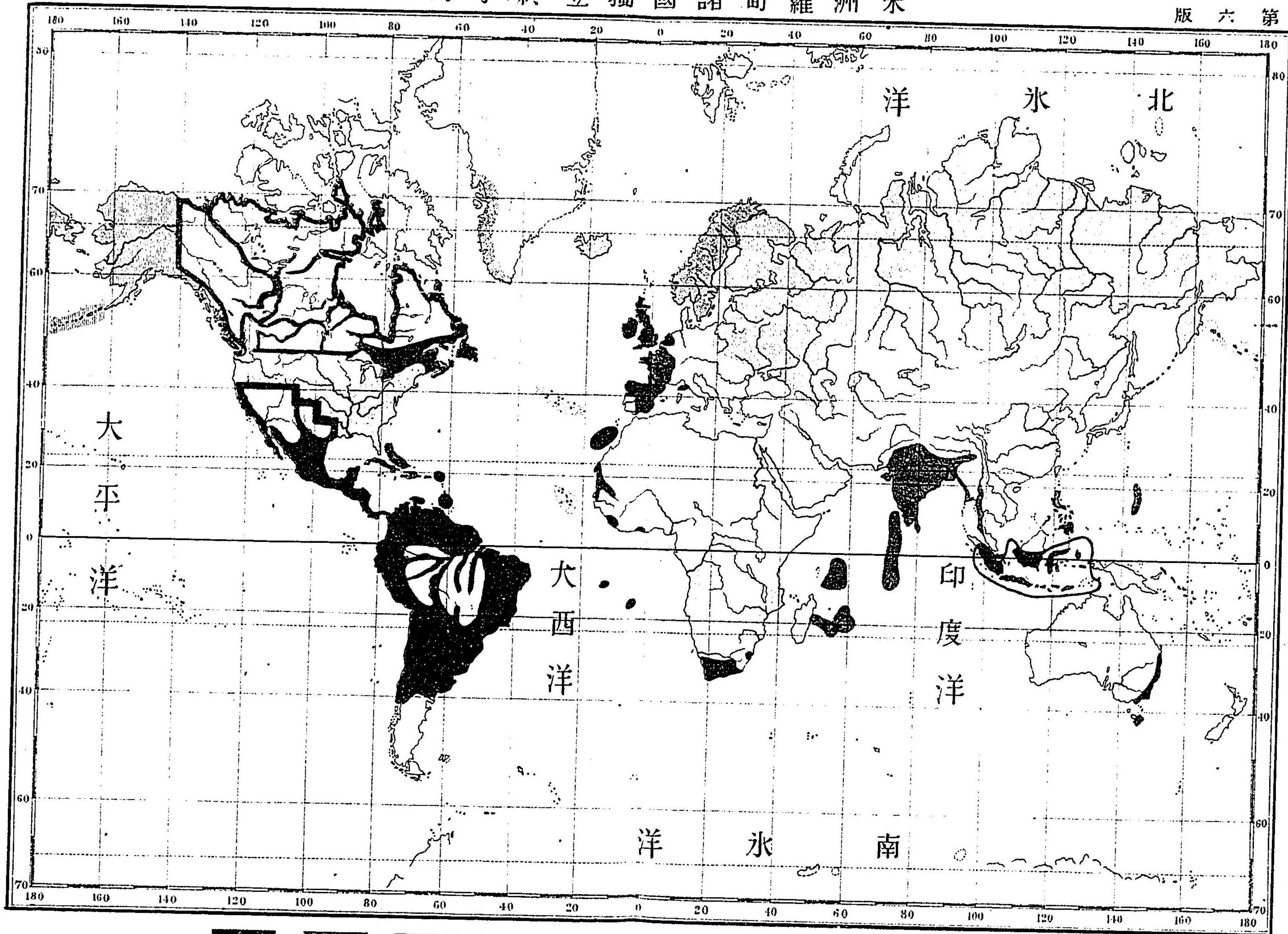
版 五 第


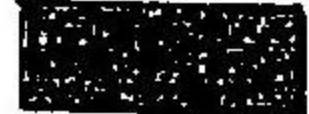
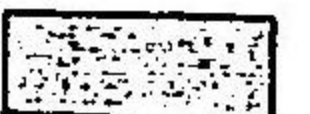
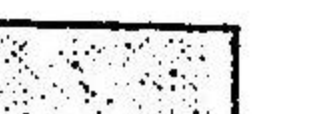








- 西國
- 葡國
- 丁抹
- 葡國
- 佛國
- 英國
- 露國

一八二六年
米洲諸國獨立終了時

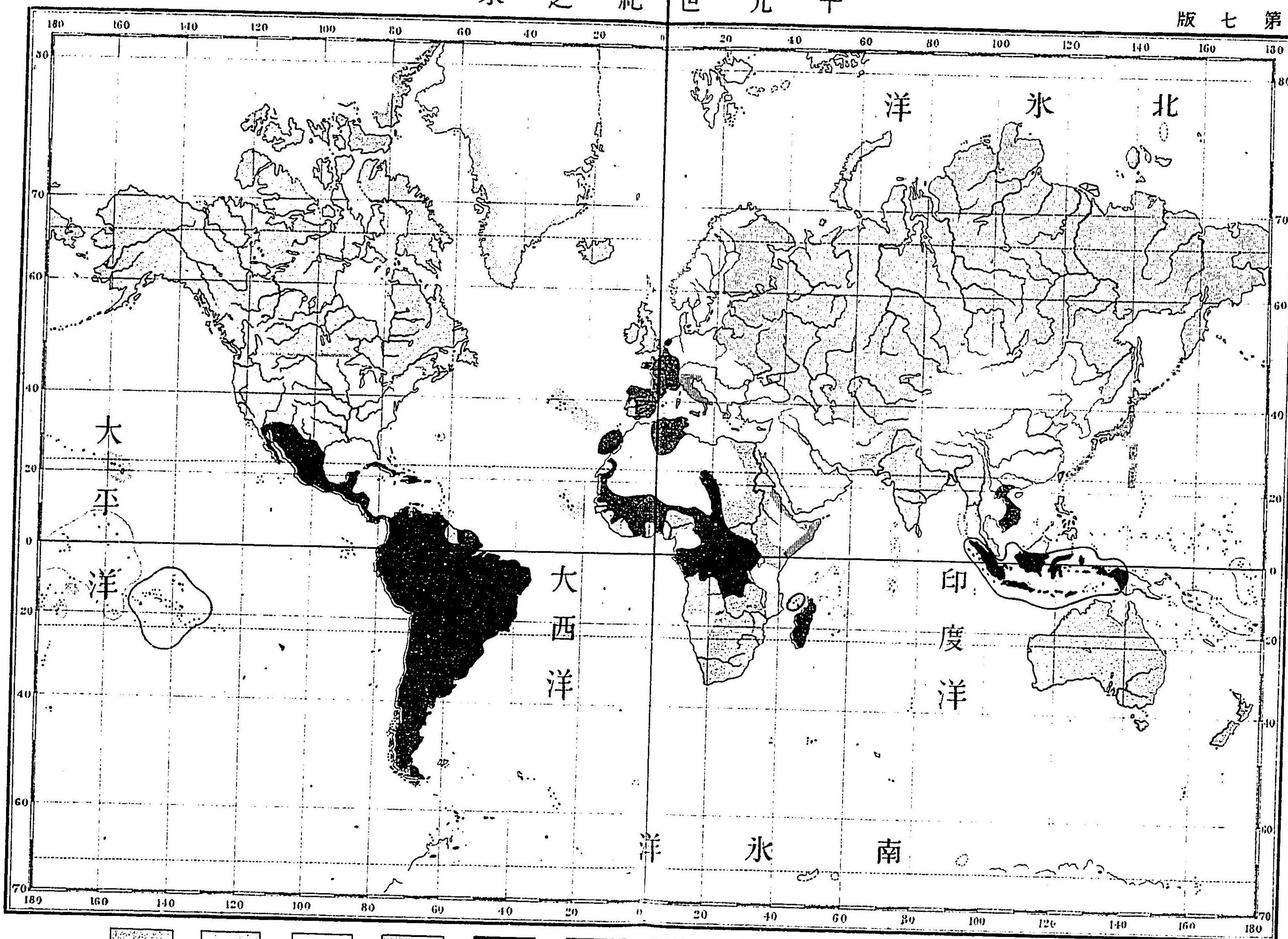
第六版


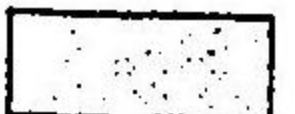



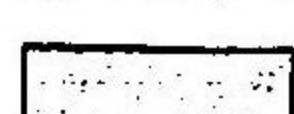
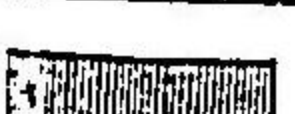
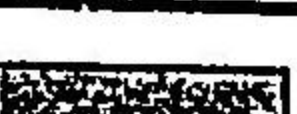
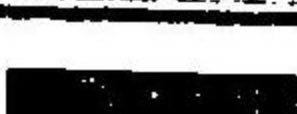
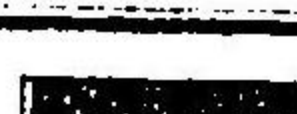
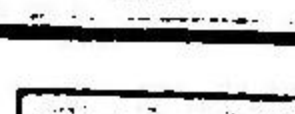
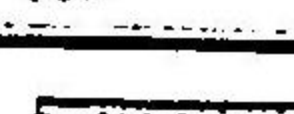


- | | | | | | | | | | |
|---|---|--|---|---|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 米洲諸國 | 西國 | 葡國 | 丁抹 | 瑞典 | 合眾國 | 蘭國 | 露國 | 佛國 | 英國 |

(年四十三治明) 年〇〇九一
 末之紀世九 十

版七第



- | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|--|---|---|---|---|---|---|---|---|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 國衆合 | 抹丁 | 國獨 | 國露 | 國諸/他 | 國葡 | 國伊 | 國西 | 國蘭 | 國佛 | 國英 | 本日 |

此の時代に、露國は其の領域を西の方西伯利亞全部に擴張して、千六百八十九年に始めて支那と境界條約を結んだのである。

第三期 此の期は十八世紀から十九世紀の最初の三分の一に渉るもので、英國が其の領地の大擴張を計つた時代である、即ち千七百五十七年には印度ベンガルを取つて、全印度に英領印度帝國を建て、千七百六十三年には終に、加奈陀から佛人を逐ひ出し、亞弗利加南部、深洲、ニウジールランドの島等からは蘭人を逐ひ出したのである、但し此の間に合衆國が英國から獨立したのは、全く當時の殖民地政策が、收歛誅求を目的としたからである。此の期の末に西班牙、葡萄牙の支配下に在つた、羅甸亞米利加が獨立したのも、亦著名の出來事である。

露國も、此の期に南の方黒海に達して、キルギースのステップ地を併呑し、進んでカウカサスの侵略を始めたのである。

第四期 此の期は最後の時代で、列國争つて領地の獲得に努めた時代である、先づ此の期の初めに、蘭は其の手に残つて居た殖民地を最も熱心に文化し始め、佛國は永き睡眠から醒めて、再び手を伸してアルゼリヤを占領し、傍ら太平洋中の許多の

小島をも占領したのである。又英國から離れた北米合衆國も領地に渴して、或は新に土地を購入し、或は境界争を口實に、隣國の墨其西哥と戦つて、その領地を横取りして、遂に國を太平洋沿岸まで擴げたのである。此の間英國も亦、抜け目なく立ち働いて、印度の周圍に數個の附屬地を加へ、露國もその境界を南に延べて、遂に亞細亞の中央高原にまで入り込んだのである。それから佛國は又後印度に侵入して、千八百六十二年、遂に之が併吞を終了したのである。

次いで亞弗利加の分割が始まつて、獨、白、伊の三國も亦殖民地を有する國の仲間入りをした。終りに、合衆國までも、帝國熱に浮かされて、其天然の境界内を脱出し、西班牙の領地を取つて、遂に又、殖民地所有國と變したのである。是は随分世界の耳目を聳動せしめた事柄であつたが、それより尙一層世人を驚かしたのは、半開と稱せられた、日本が俄に覺醒したばかりでなく、一躍して臺灣を取り、二躍して旅順、大連、樺太朝鮮までも取つて、立派な殖民地所有國となつたことである。

以上の如き次第であるから、二十世紀の初めに至つては、殖民地を有する國が古今未曾有の數に達して、その海外領地は、面積五百四十萬方里、人口八億に及んで居る。

然し、此の領地の發育がその絶頂に達して居ると思はれないのは、まだ亞細亞には足弱の國がいくつもあるからである。波斯、亞富干、暹羅等の如きはさうである。しかし、それよりも歐人の一層垂涎して居るのは、支那であつて、その垂涎の狀は恰も十七世紀中西印度と、亞弗利加ギネヤ海岸とに對した時のものと同様である。蓋し其の未だ分割されないのは、僅に我が日本があるからである。

第二十節 政治區域の現状

各國の海外領地の面積人口を精密なる數字で表はすことは、未だ望むべからざるものである。何故ならば、境界の未だ判然しない所もあり、又人口調査の未だ曾て行はれたとない土地も、多いからである。因つて左に掲ぐるはその概數である。
主として大陸的附屬地を有する大陸國

| 國名 | 本國 | | 附屬地 | | 合計 | |
|---------|---------|--------|---------|--------|---------|--------|
| | 面積(千方里) | 人口(百萬) | 面積(千方里) | 人口(百萬) | 面積(千方里) | 人口(百萬) |
| 一、露西亞帝國 | 三三七 | 一二六、五 | 一一七七 | 三二、五 | 一五〇四 | 一五九〇 |
| 二、支那帝國 | 二六〇 | 三五〇、〇 | 四六一 | 一〇、〇 | 七一一 | 三六〇、〇 |

| | | | | | | |
|---------|------|------|------|-----|------|------|
| 三、土耳其帝國 | 一二六 | 二三四 | 二二四 | 一四八 | 三四〇 | 三八二 |
| 四、北米合衆國 | 五二〇 | 九一〇 | 一一〇 | 九〇 | 六四〇 | 一〇〇〇 |
| 總計 | 一二三三 | 五九〇九 | 一九七二 | 六六三 | 三二〇五 | 六五七二 |

右の表中、芬蘭は露國の附屬地と見做してあるが、キールとボクハラとは、その本國中に算入してある。又、支那ではその新疆を附屬地に算入し、土耳其では亞細亞土耳其と歐羅巴土耳其とを本國とし、クリート、サモス、サソス、埃及、トリポリス並に、エジプシャンヌーダンの半分を其附屬地と見做したのである。又、合衆國の附屬地はアラスカと布哇とで、非律賓、ポルトリコ、グアム、サモアのツツイラ等は、その殖民地と見做したのである。

海外殖民地を有する諸國

| 國名 | 本國 | | 海外領地 | | 合計 | |
|---------|---------|--------|---------|--------|---------|--------|
| | 面積(千方里) | 人口(百萬) | 面積(千方里) | 人口(百萬) | 面積(千方里) | 人口(百萬) |
| 五、英吉利帝國 | 二〇五 | 四六〇 | 一九四七 | 三七二〇 | 一九六七五 | 四一八〇 |

| | | | | | | |
|----------|-------|-------|------|-------|--------|-------|
| 六、佛蘭西帝國 | 三四八 | 三九五 | 七七九 | 六〇〇 | 八一三、八 | 九九、五 |
| 七、獨逸帝國 | 三五三 | 六五〇 | 一六九 | 一一、四 | 二〇四、三 | 七七、四 |
| 八、阿蘭陀 | 二、一 | 六〇 | 一三三 | 四〇、五 | 一三五、一 | 四六、五 |
| 九、白耳義 | 一、九 | 七七 | 一四六 | 二〇、〇 | 一四七、九 | 二七、七 |
| 十、葡萄牙 | 五、九 | 五四 | 一四〇 | 一〇、〇 | 一四五、九 | 一五、四 |
| 十一、大日本帝國 | 一八、七 | 四九〇 | 二五 | 一七、三 | 四三、七 | 六六、三 |
| 十二、伊太利亞 | 一八、六 | 三四〇 | 三三 | 〇、七 | 五〇、六 | 三四、七 |
| 十三、西班牙 | 三三、八 | 二〇〇 | 一四 | 〇、三 | 四六、八 | 二〇、三 |
| 十四、丁抹 | 二、六 | 二、四 | 一一 | 〇、一 | 一四、六 | 二、九 |
| 總計 | 一七三、二 | 二七五、〇 | 三三九七 | 五三四、三 | 三五七〇、二 | 八〇八、七 |

右の表中、我が國では北海道、臺灣、樺太並に朝鮮を白耳義ではコンゴ國を其の所領殖民地と見做してある。

以上の表によるときは、英國殖民地帝國の非常に大きいことが一目して瞭然であ

る、即ち其の領地の面積と人口とは、他の九箇國のものを合せたよりも、遙に大きいのである。又其の人口は本國の人口の八倍もある。尙又、第二表の十箇國の領地を合すれば、面積は本國に約二十倍して、人口は本國に約二倍して居る。

第五章 宗教的團體と其の分布

第一節 宗區

文明の無形的財産中、多數の人を團結せしむる最大勢力あるものは蓋し宗教であらう。

固より斯かる勢力ある宗教は、その高尚なものに限るので、天然民族中に行はるゝやうな簡易劣等のものとは論外である。高尚の宗教とは道義が之に伴ふて、且之に歸依するものが、多數寺院に集合して、之に歸依する實證を示すものである。斯かる宗教は、自然其の宗區を擴張せんことに努むるものであるが、其の方法は、或は單に説教にのみ、よることあれば、或は又之に加ふるに、更に政治上の力を以てすることもある。

地學に於ては、固より各宗教の何物たるを論ずるのではなく、その地球面との關係即ちその分布區域を究むるのであるから、この見地からして、宗教を、大別するときは大體左の三部類に歸着するのである。

(一) 主として天然民族中に行はれて、西人が異教一名野教の下に總括する宗教で、其の分布區域は世界各所に散在するもの。

(二) 印度東亞的宗教で、目下亞細亞の南東部に擴つて居るもの。

(三) 泰西教とでも總稱すべきもので、西人が、單神教の名を附して居るもの。此の宗教は、最初亞細亞の極西部に起つて、今では全世界に擴つて居る。

第二節 異教(一名野教)

宗教とは人類以上の勢力を有する物の存在と、人類と此の物との關係とに就ての見解であると解釋する以上は、目下世界に全く宗教思想の無い者はないと言つても、差支ないのである。何故なれば、如何に劣等の天然民族でも、魔神の如きものゝ存在を信ずるからである。天然民族中には、自家を取り巻く物に皆神靈あるが如くに解する信仰がある。之を總稱して拜物教と云ふのであるが、昔し埃及、アッシ

リヤ、希臘、羅馬等に行はれ、又基督教の輸入以前に行はれた歐洲の中部諸國の神話といふものも、詰まる所拜物教の種類に外ならぬのである。

異教や野教の名稱は、初め基督教徒が自家の宗教以外のものに與へたもので、野教の名は、市町民の皆洗禮を受けて居るに反して、野外に住む者は、此の恩澤に浴して居ないとの意味から、附けられた者である。夫で最初は、大した侮蔑の語でもなかつたのであるが、今では野教徒 *heathen* と云へば、餘程輕蔑の意を含んで居る。しかし、今茲に之を用ひたのは、輕蔑の意味でした譯ではなく、唯此等を總ぶる、良名稱がない爲で、又その基督教以外一切の宗教を意味するものでもないことも、前の分類に依て明である。

異教の種類は何程あるものであるか、之を知ることが出來ないのみならず、之を知る必要も亦ないのである。只吾々の知りたいのは、之を信するものゝ概數であるが、是れ又甚だ知り難いものである。其の重なる理由は、天然民族の口數が不明であるからである。しかし、此種の民族の最も多い亞弗利加大陸の總人口を、一億三千五百萬より多からざるものと假定すれば、異教徒の數は、約九千六百萬、即ち世界

の總人口の凡六分の一となるのである。

第三節 印度東亞的宗教

亞細亞の南東、半分の地には、昔此の地に開けた高尚深遠の宗教がある。その重なるものは、波羅門教と佛教とで、之に加ふるに、純日本的の神教がある、以上の宗區には、多少他の宗教も入り込んで居るが、大體纏つた連續區域をなして、印度から中央亞細亞を経て東亞に擴つて、人口稠密の印度と支那とも、此の中に這入つて居るから、之に歸依する宗徒は、六億七千萬の多きに及んで居る。

(一) 波羅門教 此の宗教は、印度半島内に擴つて、史期前に、此の地に移住した白哲人種の開始したものである。その經文は、吠陀ヴェダと稱して、梵語で書いてある。是れによれば、天地を主宰する神は梵天であるが、此の神は、一體三分と稱へて、其の實三體から成り立つ神である。其三體とは、即ち萬物の創造者である梵天と、その維持者である自在天と、その破壊者である毘紐天とである。蓋し、此の三神で、萬物の生老死を表彰したものである。又此の宗教には、一種特別の性質がある、それは、四姓の民族と稱して、社會を四階級に別つて、貴賤の別を明にすることである。その名稱は、(一)

波羅門、即ち僧侶、(二)刹帝利、即ち王侯軍人、(三)毘舍、即ち商工人、(四)首陀、即ち農民である。此の階級制度は又、壓制の道具となつて、波羅門は其の知識を以て、刹帝利はその武力を以て、毘舍は其の金力を以て、孰れも社會の大多數を占むる農民を壓迫輕侮するの弊がある。

波羅門教徒の数は、近年の印度政府の人口調査に據て、略知ることが出來た。即ち其数は目下約二億二千八百萬である。

(二)佛教 此の宗教は西曆紀元前五百餘年の昔、北部印度の伽毘良に城郭を構へて居た淨飯王の子、悉達太子の開いたもので、太子は言ふまでもなく、波羅門教の刹帝利族であつたのであるが、波羅門教の四民制を打破して、貧富貴賤を問はず、何人にも、絶對の正行爲をなせば、必ず涅槃に入つて佛となり、永久の樂を受くるを得と説いたのである。

斯くの如く、この宗教は四民平等主義を取つたのであるから、一時印度の大部分に擴るのみならず、西は亞富干や土耳其斯坦まで、東は後印度や其の附近の島々(スマトラ、瓜哇)から、支那、朝鮮を経て日本にまで、蔓延したのである。然るに、印度と其の

西方の地には、八世紀から十二世紀の間に、瓜哇とスマトラとは十五世紀に、回々教が入り込んで來て、之に大打撃を與へた爲に、今日では佛教は反つて其起源地から遠い後印度、支那、日本等に盛である。

目下、蒙古、西藏等に流行する喇嘛教が、佛教の一派に過ぎないことは言ふまでもないことである。

佛教徒の数を擧ぐることは、難事の中の難事である。その理由は、その最も多かるべき支那に、何等統計的のものが無いからである。一説に、佛教徒に、孔子老子の道を守る者を加ふれば、其の總数は四億三千萬と四億四千萬の間に在らうと云ふのであるから、先之を其の概數と見做して置くのである。

(三)神教 是は我が國にのみ行はるゝ、所謂祖先崇拜教で、その一特性は他の多神教と異りて、一切偶像の類を用ゐないことである。神教徒の数は、千四百萬と見積られてある。

第四節 泰西教

(一)回々教 此の宗教は七世紀の初め、アラビヤ半島の西部に勃興したもので、その

目的は、此の地方の猶太教と基督教とを、アラビヤ固有の多神教と融和して、一の單神教を開くにあつたのである。開祖の名はマホメットといひ、その教を教徒自身は、イスラームと言つて居る。蓋し歸命、即ち神に服従するといふ意である。

回々教の、最初非常の速力を以て蔓延したのは、一は當時亞細亞西部の基督教國の大に衰微して居た事にも由るのに違ひないが、一は又、その政治と密接の關係を有つて居たことにも由る。即ち宗教の首腦は同時に國の首腦で、又そのコラーンと稱する聖書中にも、人民の政治的組織や裁判の事までも論じてあつたからである。開祖の死後、此の宗教には二派を生じたのである、一はシ派の *Sunnies* と稱して、聖書コラーンのみを信じ、一はスンナ派 *Sunnies* と稱して、聖書の外、尙スンナと稱する傳説をも信ずるものである。シ派は其の數、一千萬乃至一千二百萬あつて、殆ど皆波斯に住んで居る。

回々教の現今に於ける分布區域は波斯、土耳其、アラビヤ等を中心として、西は亞弗利加大陸の北半に擴り、東は印度、スンダ諸島並に支那にまで入り込んで居る。その總數は約二億二千五百萬で、世界の總人口の七分の一強に當るのである。

印度にシツク *Sikh* 教といふ者があるが、是は十五世紀中ナナック *Nanak* といふ者の開いた一宗で、つまり回々教に波羅門教を加味した、單神教であるから、先大體回々教の一派と見做すべきものである。信徒の數は約百二十萬といふことである。

(二)猶太教 是は昔し、西部亞細亞のセミチック人種中に開けた單神教で、聖書を舊約全書と稱して、聖人モーゼスの著したものである。之を信ずるものは所謂猶太人で、不思議なことには、此の人種は、決して自家の宗教を他人種間に擴めやうと努めないものである。又其の信徒は今世界に散亂して、他教徒の如く一定の分布區域を有たぬのである。但し、其の最も多いのは、中央歐羅巴の東部のスラープ人種の國々である。猶太教徒の數は約一千一百万と見積られてある。

(三)基督教 此の宗教は亞細亞西部の猶太教徒國に興つたもので、その開祖は耶蘇基督といふ聖人である。耶蘇は舊約全書中に記載してある救世主と自稱して説教したが、初めは之に耳を傾くる者が甚だ少なく、且その教は、その起源地には奮はずして、數百年を経て漸次地中海沿岸地に擴がり、それから又約一千年を経て、漸く全歐に布及したのである。基督教は元々猶太教から分岐したものであるから、耶

蘇の門弟の著した新約全書と稱する聖書を信するのみならず、尙又猶太教の舊約全書をも信するのである。

此の教は十一世紀に至つて、東派と西派とに岐れて、東派は目下東部歐羅巴と西部亞細亞から、西伯利亞の露人間とに擴がつて居るが、その本場は歐露に在る。西派は最初、加特力教のみであつたが、十六世紀に至つて新教といふものが分岐した爲に、今では新舊の二派になつて居る。西派の分布區域は、歐洲の西半の外、殖民地の建設と共に、南北兩米、阿弗利加の南部、濠洲等にも、蔓延し尙傳道事業によつて、今は全世界にその信徒を見るに至つたのである。

基督教徒の總數は、約六億三千九百萬で、中で、加特力教徒は其の四割五分を占め、新教徒はその三割二分を占め、東派の信徒はその約二割三分を占めて居る。

尙、印度と波斯とには、拜火教と稱する、一種の單神教がある。しかしその信徒は、僅に一萬で、地學上より見れば、殆ど論ずるに足らない程少ないのである。

以上列舉した諸宗教を多神、單神の二部類に大別して、その概數を擧げて見れば、左の通りである。

多神教

東部亞細亞の宗教

四四〇萬

波羅門教

二二六萬

異教

九六萬

計

七六二萬

單神教

基督教

六三九萬

猶太教

一萬

回教

二二五萬

計

八七五萬

以上に依て観るときは、基督教徒が最も多く、世界の總人口の約三割九分を占めて居る。斯く其の數の多いのは、蓋し歐米人が、之を世界最高尙の教として、之が布及に熱心であるからである。我が佛教の如きは、其の哲理に於ては、確に基督教以上にあるが、惜哉、人を厭世に導くの不利益がある。之に反して、基督教は、佛教でいふ彼

岸の快樂を、此の世に求めんとするのであるから、謂はゞ、佛教に比して、遙に實際的の宗教である。時世に適した宗教である。それで、將來世界を、一統し得る宗教がありとすれば、先指を、此の宗教に屈しなければなるまい。

第六章 人類の土着と人口の疎密

第一節 人類の住地

人類は次第に開くるに随つて、一定の場所に土着するものである。土着とは、云ふまでもなく、家屋を建てて、永くその地に住むことをいふのである。此の家屋を建て、永住する場所を住地と稱へて最初は耕地の中に孤立の姿であるが、年を経て土着者の家屋が増加する場合には、大抵その中樞の地となるべき所である。住地には必ず名稱を附して、之を他の住地と區別するものである。

住地に在る家屋の數、その作り方や集り方、その道路や空地に對する位置等は種々様々であるが、之を大別すれば、三類となる。それは散住地、村落並に市街である。但し時に村落と市街とを總稱して、群住地といふことがある。散住地は多くは單住地

即ち孤立住地の形になつて居て、二住地の間に大なる距離がある。

散住地と村落との大多數は、農民の住む所である。是は、その住地が自家の勞働すべき耕地に近いからである。又場合によつては耕地の中心に住むことも、出来るからである。之に反して、市街には、地面の束縛を受くる農民少なく、之を受けない商工業者が多い、又官吏、學者、技術者等も多い。そのみならず、又家屋も、村落に比すれば、遙に立派である。昔から地誌に擧げられ、地圖に畫かるるものは、殆ど皆此の市街住地に限つて居る。

古來の經驗に徴するに、人類が土着する場合には、散住地と群住地とが、同時に出来るものである。即ち一方に單住するものがあれば、他方には群住するものがある。乃ち必ずしも散住地が發育して、群住地となると極まつたものではない。

人口の増加は、舊國に於ては、多く既に成立して居る住地の人口の増加によるもので、新住地の成立によるのは、甚だ少ないのであるが、新開の地に於ては、新住地の建設も、與つて大に力あるのである。住地は時に消滅する場合がある。是は大住地の爲に吸収せらるゝによるか、又は實際破壊せられて、住民は全く離散するによるの

である。後者の場合には、その所在を後世に示すものは、僅に其の墟址に止まるのである。

住地の數は人口と同じて、常に變化すべきものであるが、蓋し之を見積ることは、人口を見積るよりも、遙に困難である。但し、人口が古來次第に増して來た通りに、住地の數も亦、古來次第に増して來て居るのである。何故なれば、前に掲げた其の消滅の場合には、新設に比し、尙に罕であるからである。又全然消滅した住地は極めて罕で、多くは消滅同様の姿で居ても、尙多少の住民を有するものである。斯かるものが、時世と共に、復興を呈する例も亦少からぬからである。

第一節 不常住地

文明の度の低い拾集民や狩獵民の如きは、一定の土地に永住せずして、絶えず其の住地を變更するのであるから、斯かる住地は不定、不常、浮動的住地であつて、實に野營の場所同様のものといふの外ない。それで、その場所には特に名稱もなく、又その立ち去つた跡には、死灰の外、何等の住地であつた痕跡も残らないのである。但し、斯かる不常住地に住む者でも、猛獸や敵に對する防禦には、苦心するものと見え

て、其の停まる場所は、或は洞穴であるとか、或は攀ぢ登るに困難な岩石の上である。又、甚しきに至つては、地面を距る高い樹冠であることもある。斯かる場合には、間々屋根を拵ゆる勞を省くことも出来る。

遊牧民に至つては、其の住地を、多く週期的に變ふるのである。即ち一定の時期に諸處を順番に巡ぐるのである。例へば、夏季には、甲地に住んで、冬季には、乙地に移るといふ工合にするのである。移るときには、その家屋同様の天幕までも、之を携ふものであるが、季節が變れば又舊地に歸るのである。故に斯かる住地には、名稱もあれば、又多少の遺跡も存するのである。

獵民でも又漁民でも、若し小屋掛けをして住まう場合には、是は取りも直さず、その稍土着心を起した徴候と見るべきである。天然民族でも、簡易農業を營むものは、皆小屋に住んで居る。此小屋は永續のものではないに拘らず、中には、稍美術的に出來て居るものもある。總じて、熱帯地方は大雨の降る所であるから、屋根には特に意を用ゐて拵へてある。然し、それでも、家屋全體が輕粗の材料で出來て居るから、出火や洪水に遇へば、全滅して復何等の痕跡をも止めないことがある。

天然民族中には、散住地を見ることが罕がある。是は人類の群住性にも由るのであらうが、その重なる原因は、經濟防禦の兩點にある。それで、彼等の住地の選定と家屋の建方とも、亦是から割り出されて居る。南洋諸島の海岸に住むものは、昔し歐洲に於ける石器時代の人が湖上住居をした様に、海岸に水上住居をして居る。それから、又防禦し易い沿岸の島や、河中の洲に住んで居るものもある。亞弗利加の内部の部落には、溝渠や壁を繞らすものもある。天然民族の村落と稱するものは、大抵人口に乏いのであるが、然し中には千を以て數ふるものもある。此等を、彼等自身は市街と稱へて居るが、然し文明國の市街と違つて、整然たる街衢もなく、唯小屋が多數不規則に集つて居るのみである。斯かる大村落も、一朝之を統轄する酋長が死ぬ場合には、忽ち瓦解して、遂に全く滅亡するに至ることがある。それで、亞弗利加の地圖に載せてある、天然民の村落は、消長常なき爲め、地學では之を不常住地と見るの外ないのである。

第三節 散住地の種類

文明民族中の散住地には、純正單獨のもの、と、附屬住地を伴ふものとの二種を區別

することが出来る、單獨のものは住家と之を取り卷く、田園とのみから成るもので、その最も多いのは高山地である。その理由は、高山地には礫礫の地が多く、耕作に適する地が、少ないからである、然るに平地の散住地では、住家の附近に之に附隨する建物を見ることが多い。例へば水力を應用する水車業者の小屋とか、又は附近の散住地に供給する瓦製造場とか、又は、土地を通過する交通機關の停留場とかいふものの類で是等は、住地あつて始めて、設けらるるものであるから、島で言へば、大島を取り卷く小さな海岸島の如きものである。

第四節 村落

農民が新に一土地に土着する時には、必ず平な草野で、水利の最も良い所を擇ぶのであつて、山地、森林地、沼地に手を出すのは、人口増加して、良い土地が缺乏して來てからの事である、乃ち最初の土着民が如何なる土地を擇んだかは、往々地名に依て知ることが出来る。

村落中に於ける、家屋の配布は、通例不規則であるが、其の不規則の中にも、亦多少一定の配置を示すものがある、山地に於ては、家屋が谷川に沿ふて併ぶものがあり、又

スラップ人種の村には、中央に廣い空地を置いて家屋が其の周圍に建つて居るのがある。我が邦には家屋の、道路に沿ふて、長く連なる者が甚だ多い。阿蘭陀の如く土地が低く、且堤防の多い國では、堤防の内側に、一列直線に、家屋の併ぶともある。最後に最も多いのは、何等の紀律なく、家屋の許多、群集するものである。

第五節 住地の位置

住地の選擇は、前にも折に觸れて少しづつ述べたことがあるが、之を一纏めにすれば建物や道路を作るに差支ないやうな堅い地盤の所、飲料水の在る所、猛獸や敵に對して防禦し易い所、耕地に近い所等によるもので、此等の性質は、田舎の住地にも見出すことが出来るが、市街地には、尙更明に現はれて居る。何故なれば、市街は、村や散住地より、その位置の選擇が遙に大切であるからである。即ち前者には地面が必要であるのみで、市街の如く種々の附帯必要條件が多くないからである。何れの住地でも、他と交通し易い所でなければ、不便に相違ないが、其の最大不便を感ずるのは市街である。随つて、其の位置は必ず交通線になくはならぬ。交通線は網の如き形をなして、一國內を結び付くるのみならず、又國と國とを結び付くるものであるが、此の網をなす線の結び目は必ず人類の住地である。交通は、市街の母で、多數の交通線の切合ふ所には、自然市街が、成立するのである。

第六節 市街

市街の多數は、其の成立の時代によつて、其の位置を、異にするものである。即ち、往古と中古とには、防禦し易い點を擇んで、市街を建てた者である。山腹、平地中の丘河の分岐點、屈曲した河の内側、河中の洲、半島の末端、海岸の島等は、何れも前の條件に適した位置である。その後に至つては、交通の便利な位置をも擇ぶやうになつたが、最初は矢張防禦にも亦重きを置いたのである。此の防禦といふことを全く顧みずして、平地の中央に市街を建設し始めたのは、比較的近代のことで、即ち殺伐時代が去つて道義心が大に進歩してからの事である。

何れの市街でも、その住民の工業は、附近の農民に對して、引力を働くものである。又農民の方では、市街を其の農産物の賣捌所として居るのである。乃ち農民はその農産物を市民に賣つて、市民からはその工業品を買ひ取るのである。それで双方互に利益を受けて離るべからざる關係になつて居る。昔し交通不便の時代には

農民の住む散住地や村落のある地方に、數多の地方的小市街があつて、農民は、その中の最近のものに往來して、常に其の用を足したのである。是に因て、何れの市街にも必ず之に附屬した農民の住む區域のあることが分る。此の兩者間には、常に頻繁な交通があるのであるから、此の區域を交通圏と稱するのである。交通圏の大小に依て、市街繁昌の度も亦自ら異なるのである。即ち、交通圏が大で、市街に往來する農民が多ければ、市街はそれだけ多く繁昌する譯で、其の市街が、特に大官衙、高等の學校、宗教の本山等の所在地であれば、其の繁昌は、一層その度を高むるのである。

市街は多く之を通過する交通機關の停留所となるのみならず、貨物の繼立場や、旅客の宿泊所にもなるのである。殊に山地に在ては、峠の双方に在る市街、平地に在ては大河の岸に在る市街がさうである。河岸に位する市街中には、昔し一の渡船場に過ぎなかつた所も、少からぬのである。

港も亦交通線中の停留所である。港では陸と、船との間に、旅客や貨物の揚げ卸しをするのみならず、時に又船と船との間にも此等の積み換えを見ることがある。

港は内陸の市街に比して、海に向いて居る側では、諸方面から、數多の交通線が、輻湊するの便益がある。港の中でも特に繁昌するのは、他の地方と交通し易い大河口に在るものや、大都會の附近に在るもので、背後に山多く、單に、港と、港との、繼立場に止まる港は、決して大繁昌を極むるものではない。實に、港の繁昌に大切なことは、其の背後の地との交通である。背後の地との交通頻繁な港は、その盛衰と共に又盛衰するのである。住地の中には、交通線路に當らずして、多少の繁昌を極むるものがある。それは、地中の寶を利用する土地、又は其の附近に在るものである。例へば、温泉町や鑛山町の如きものである。

第七節 地面的職業と、地位的職業

天然民族の職業と、開明國では散住地と村落とに住む者の職業とは、大抵一定して、其の多くは同一の職業に従事するものであるが、市街住民の職業に至ては多様多岐である。然し之を大別すれば、局部的職業と一般的職業との二者となるが、局部的職業は、更に分れて地面に密接の關係あるものと、位置に關係あるものとの二類となる。